

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT 建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT Society of Architectural Design Education
巻号 / vol.	021
発行日 / Pub. date	2001, 6
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

本館1F-東工大出版物

華 : ka

20010000 21

大岡山 20100720 00014802 (2009)

巻頭:TIT建築設計教育研究会10周年記念会

学生の設計教育支援を目的として、1990年に設立されたTIT設計教育研究会も、昨年で10年という一つの時代の節目を向かえた。

この研究会の中心的な活動内容のひとつは、卒業生からの寄付金によって可能となった本誌[Ka]の出版である。今回で21号を向かえる[Ka]は、本学的设计製図課題作品および卒業制作などを、卒業生を含めて広く学外に紹介し、そのことによって間接的に学生の設計課題に取り組む姿勢を鼓舞するという意味で、確実にその役割を果たしてきた。

また、この研究会が発足当初から行ってきたもう一つの重要な活動内容に大岡山建築賞の授与がある。優秀な卒業制作、および修士制作を表彰することで、直接的に学生の設計意欲をかき立てようという主旨である。これら二つの中心的活動の最終目的は、発足当初の会則第2条に記載されている「……ひいては優れた建築家を世に送りだすこと……」にあるといえる。その成果の是非を判断するには、今少しの時間を要するが、現時点でどのような可能性の萌芽が見え隠れしているのだろうか？

そこで本号では、昨年末に開催された「TIT建築設計教育研究会10周年記念会」において行われた、歴代大岡山建築賞受賞者による記念講演会の内容を、特集記事として取り上げた。卒業後、さまざまな分野で活動を始めた歴代受賞者たちの生き生きとした言葉の中に、将来の可能性と展望を感じ取っていただきたい。

Headline: 10th Anniversary of TIT Society of Architectural Design Education



華[ka]2001年春・夏号

[巻頭記事] TIT建築設計教育研究会10周年/[2000年度建築設計製図第一・第二・第三・第四]/

[ニュース・投稿] コンペ入賞作品、NAIワークショップ、工大祭レポート、

スライドレクチャー: 岡部憲明、パトリック・ピネル+ハンス・ファン・ベーク+ジェレミー・ベイリー+クノ・ブリューマン、ヤリ・イェッツォネン/

[INFORMATION]

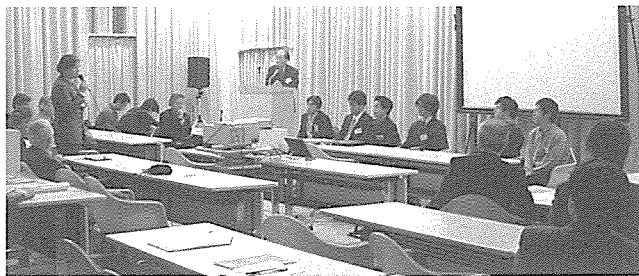


TIT 建築設計教育研究会 10周年記念会

10th Anniversary of TIT Society of Architectural Design Education

レポート: 山崎鯛介 [助手]

YAMAZAKI Taisuke (Assistant, Tokyo Institute of Technology)



TIT 建築設計教育研究会10周年記念会 プログラム

日時: 2000年12月14日[火] 16:00~20:30 場所: 東京工業大学百年記念館

- I. シンポジウム……………16:00-19:00
 - 1. 大岡山建築賞受賞者(1991-1995)によるプレゼンテーション
「卒業から現在までの活動を通じて」
 - 2. ディスカッション
- II. 懇親会……………19:00-20:30
- III. 展示……………大岡山建築賞受賞作品

昨年12月14日[木]、東京工業大学百年記念館フェライト会議室において、TIT 建築設計教育研究会の設立10周年記念会が開催された。今回の10周年記念会では、歴代の大岡山建築賞受賞者による卒業後の活動報告とディスカッションが行われ、またフェライト会議室脇のロビーには歴代の大岡山建築賞の受賞作品が展示された。シンポジウムは在校生の参加を考慮して午後4時から始められ、それに続いて午後7時からは同じ場所で懇親会が開かれた。

記念会は仙田 満教授の開会の辞によって始められ、坂本一成教授の司会によって進められた。まず記念講演に先立ち、現・運営委員長である戸尾任宏氏の挨拶があり、続いて初代運営委員長を務められた中島隆氏から祝辞をいただいた。両氏は本会が10年前に発足した経緯とその設立趣旨について振り返られ、本会が10年間続いたことの意義を述べられた。記念講演のパネラーとしては、90年度(第1回)から94年度(第5回)までの受賞者の中から、塩田洋氏(日建設計)、高森和志氏(鹿島建設)、佐々木健夫氏(山下和正建築研究所)、梅野圭介氏(竹中工務店)、太田啓介氏(ステューディオ・ハン・デザイン)、木下芳郎氏(東工大青木研究室助手)の6名が出席して下さった。講演は1人あたり15~20分間程度の持ち時間で行われ、全員の発表が済んだあとには、ディスカッションの時間が設けられた。

ところで本会の設立趣旨は、現在でも『華』の裏表紙見返しに「TIT 建築設計教育研究会会則」として記載されているように、学生の設計能力の向上を卒業生が側面的に支援することを目指したものである。発足当初は6年間の実験的事業であったことを考えれば、こうして10周年を迎えたことは当初の目標を十分達成したとも言えるが、次の10年間をどのようにするかについては、またあらためて何らかの見通しを得なければならぬ時期に来たと考えられる。そのような意味で今回の記念講演は、卒業生が在校生に対して自らの経験をアドバイスとして伝える場であると同時に、「大岡山建築賞」が卒業後の活躍の励みになったのかどうか、また今後「大岡山建築賞」を続けて行くことによってどういった展望が見えてくるかを確かめるための場でもあったと考えられる。

1人目の塩田洋氏は、卒業後に本学修士課程(志水研究室)に進学し、1993年に日建設計株式会社に入社、以後現在に至るまで、設計部で主に医療関係の施設を担当している。スライドでは担当作品である「秋田赤十字病院」や「国立成育医療センター」が紹介された。「秋田赤十字病院」(1998年7月開院)はJR秋田駅から約4kmほど南の場所に移転・新築された医療施設で、延床面積は37,000m²、地上8階建て、ベッド数は496床である。建物は道路を挟んで「秋田赤十字短期大学」と併設され、医療現場と医療教育を一体的に行うことを目指して計画されている。この作品は「赤十字の基本理念を医療計画にどのように反映させるか」がテーマであり、ここでは「療養空間におけるアメニティーの確保」と「共用空間における社会性の確保」が重視された。療養空間として一般的な4人部屋では、従来の特質である「会話ができること」を生かすと同時に個人のプライバシーをより確保するため、ベッドを放射状に配置するような平面形状が提案された。一方、共用空間である1階ホール「赤十字プラザ」にはさまざまな店舗が設けられ、患者が社会との接点を失わないように配慮されている。これらの点が評価され、この建物は2000年1月に日本建築学会東北支部から東北建築賞「作品賞」を受賞した。現在の担当作品である「国立成育医療センター」(2002年3月開業予定)は、国立大蔵病院と国立小児病院(ともに世田谷区)を統廃合し、新たに「成育医療」を行うナショナルセンターとして新築した建物で、延床面積65,000m²、地上12階建て地下1階、ベッド数は500床である。「成育医療」とは小児医療を中心とした包括的医療を指すものであるが、この施設ではここで育てて行く子供の患者たちが、社会や家族との関係を大切にしていけるような環境づくりが目指されている。塩田氏はまともとして、医療施設ではハイテク設備の占める比重が高いため、ともすると施主(医療現場)が共用空間やデザインに無関心になりがちな点を問題として指摘し、いかにしてその重要性を認識させ、施主とともにテーマを見つけて行くかに設計者の果たすべき役割があることを述べて話を終えた。

2人目の高森和志氏は、卒業後1992年に鹿島建設に入社し現在に至っている。高森氏は鹿島での9年間を「下積みの時期(1~5年目)」「SDの時期(6~7年目)」「実務の時期(8年目~現在)」の3つの時期に区分し、ゼネコン設計部のシステムと自身の活動内容について説明した。入社5年目までの「下積みの時期」は、設計補助、構造・設備担当者との打合せなどを上司について経験し実務の流れを把握する、いわば「見習い期間」で、その時期には数多くの上司のもとで、7~8件の建物の設計・監理に携わっている。この時期には自らデザインすることがないため、高森氏はデザイン欲を発散させるために勤務時間外で設計コンペに応募するなどしている。鹿島建設では入社6年目から2年間の出向制度があり、高森氏の場合は鹿島出版会の『SD』編集部に出向し、そこで雑誌の編集業務を経験した。『SD』編集部では5人の編集スタッフが1人1冊の責任編集という形態をとり、取材から写真撮影まですべて担当者に一任される。高森氏が担当した号の中では、「設計ユニット」としてのあり方をテーマにした「次世代のマルチアーキテクトたち」(1998年4月号)、および「なごみ」の時代を背景にした「木の空間」(1999年3月号)の2冊がその年の売り上げNo.1を獲得しており、時代の空気を敏感に取り入れた編集方針が好評を博したものと考えられる。出向期間が終了すると、本業の設計実務に戻る事となる。ここからは原則的に1人が1物件の担当を任せられる。高森氏は以後の実務においては業務内容のほとんどが施主や構造・設備事務所などとの打合せであり、実際の設計時間は1割りにも満たないことを述べ、しかしこの9割の「雑務」で調整能力を発揮することこそ良いデザインを実現するための最も重要な要素であることを強調した。現在に

至るまでの担当作品としては、代官山の商業ビル「ラ・フェンテ代官山」(2000年竣工、基本設計のみ)、京急青物横丁駅のホテル「東急イン」(2002年開業予定)がある。高森氏は最後に在校生に向けて、「ゼネコン設計部」の長所について、「世の中を広く一般的に見ることができる」「海外に行かせてもらえるので懐が深い」「アトリエ系にはないメリットがある」といった点を宣伝して話を締めくくった。また、発表後に久米設計の金子 潔氏から、「『SD』編集時代の2年間で直接担当雑誌の無い時期にはどのような業務活動をしているのか」という質問が出されたが、その時期には主に展覧会のオープニングパーティーやアトリエ作家の住宅作品のオープンハウスの取材などを行っていることが補足説明された。

3人目の佐々木健夫氏は1993年に本学大学院(山下研究室)を修了後、山下和正建築研究所に就職し、現在に至っている。山下和正建築研究所での仕事の進め方は、仕事の規模・時間やその時の個人の仕事量などに応じて単独で担当することから3人ほどでチームを組む場合までさまざまな構成で行われる。佐々木氏の場合は、現在までに学校2件、集合住宅2件、駅および公共建築2件、住宅および店舗複合住宅3件と、大小取り混ぜ合計9件を担当している。スライドでは数多い担当作品の中から、千葉ニュータウン20住区の印西市立原小学校(1995年竣工)、豊島区の6階建て店舗付き住宅(1998年竣工)、4.5帖スペースのホーム・バーへの改修(1998年)、山形県新庄駅と最上地域広域交流センターの複合建築、ゆめりあ(1999年竣工)といった、規模や種類の異なる4件が紹介された。紹介された最も小さい仕事は、もともと予備のトイレスペースとして計画されていたビルの一部をホーム・バーへと改修したもので、スチール・木・布を素材に用いてインテリアをデザインしたものである。アトリエならではの小回りの利く仕事といえる。一方、山形新幹線の延伸工事に伴うJR東日本の新庄駅舎と周辺7ヶ町村の最上地域広域交流センターとの複合施設、「ゆめりあ」は規模も大きく、また寒冷地へのガラスのファサードの適用など、大胆な試みもなされている。また広域交流センターのエントランス部分では、照明計画事務所とチームを組んでのコラボレーションが試みられた。佐々木氏は、仕事ごとに違うパートナーとチームを組むこともアトリエならではの経験として位置づけている。最後に佐々木氏は、アトリエ設計事務所の特徴として、「様々な規模・種類の建物を設計することができる点」「様々な構造・設備事務所と仕事ができる点」を挙げたが、

おそらくこれに加えて、彼の担当物件の多さに示される「所長との信頼関係」もまた、アトリエ事務所ならではの特徴と想像される。

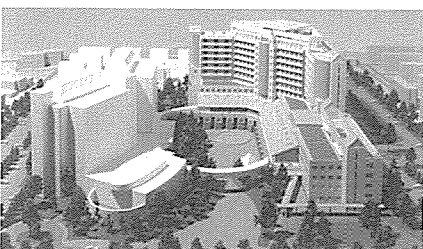
4人目の梅野圭介氏は、卒業後に本学修士課程(仙田研究室)に進学し、1997年に修了後、竹中工務店に入社して現在に至っている。竹中工務店では、入社後すぐに大阪本社に研修に行くシステムとなっており、梅野氏の場合は約4ヶ月ほど「神戸新国際交流会館」の現場を担当した。その後、東京本社に戻り4ヶ月ほどCAD会社へ出向し、そこで設計図面の基礎をひと通り学ぶ経験をし、そののちに設計部に勤務し、現在に至る。梅野氏は実務以外にコンペも重視しており、スライドでは学生時代のものから会社で応募したものまで多くの応募案が紹介され、またコロンビア大学のサマースクールに参加した経験についても語られた。そこからは、時代のテーマをいかに先取りするかを重視する姿勢が見受けられ、発表の最後には在校生に向けて、「今、何をテーマにやっておけば5年後、10年後の将来に役立つのかという視点を持つことが大切」とアドバイスを送った。一方、実務で携わった仕事では、日建設による既存建物に隣接する「資生堂リサーチセンター」の増築(2000年)、「久が原の教会」(山口文象設計)の改修(2000年)など、増築・改修の仕事を手掛けている。前者では新旧建物の緩衝領域としての中庭の採用や、窓枠や外壁仕上げなど外観イメージを踏襲することなどが提案されている。また後者については既存の空間を生かす採光照明計画及び素材の選定を行ったことが説明された。新築の作品としては、日本経済新聞金町専売所(2000年竣工)などが紹介された。ここではバルコニーの手摺りやカラースキームなど、実務初心者が必要最初につぶかる壁についての体験が語られた。

5人目の太田啓介氏は、卒業後に本学大学院(坂本研究室)に進学し、1997年に修了後、自ら太田アトリエを設立して住宅の設計などを手掛けた後、1999年からステュディオ・ハン・デザインに勤務して現在に至っている。ステュディオ・ハン・デザインでは主に高速道路関係の仕事を扱っており、スライドではその中から太田氏が担当した、豊田JCT(2002年頃完成予定)、鹿児島島の高速道路上に掛かる蹄場跨道橋(2001年竣工予定)、上信越自動車道のシンボルツリー(1999年)、東海北陸自動車道の鋼製高欄(2000年)の4件が紹介された。いずれも建築とは異なるスケールのプロジェクトである。豊田JCTは既存の東名高速道路と現在建設中の第二東名高速道路とのJCTで、直径約1kmのきれいな円形をしている。ここでは林立するピアに顔料を混ぜたカ

(写真提供: 塩田洋/日建設)

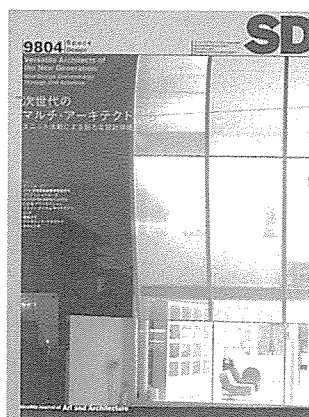


秋田赤十字病院



国立成育医療センター

(写真提供: 高森和志/鹿島建設)



SD 1998年4月号 右: 青物横丁駅前東急イン



青物横丁駅前東急イン



ラーコンクリートを用い、中央から赤→オレンジ→黄→緑→コンクリートとグラデーションを付けることで、中心性を持った秩序づけを表現している。次に紹介された鹿児島的高速道路上の踊場跨道橋では、およそ10kmの区間に1km間隔で現れるオーバブリッジを、いかに軽くりズミカルに魅せるかという課題に対して、橋桁に水平な三角柱を斜めに切断した形を用いることで、運転者(左側通行)に対して常に木口の薄い面を見せ、前後左右で変化する非対称のデザインが提案された。また1999年に開通した上信越自動車道の妙高高原(山)から上越市(海)に至る20kmの区間では、その演出装置として4km毎に設けられた5箇所の路肩に1~5本のメタセコイアを列植し、海に近づくにつれてその本数を減らして行くという、いわば変化する一里塚のようなストーリーを持ち込んでいる。東海北陸自動車道では、飛騨高山・白川郷など風景のすぐれた地域を通ることを考慮して、従来用いられてきたコンクリートの側壁をやめて鋼製高欄とし、色を深緑色にして周囲の風景に馴染ませる手法が試みられた。太田氏は最後に、土木デザインでは機能性・安全性が最優先されるが、「直径1km」「長さ20km」などといった規模の大きさや、風景や植物と人工物との関係づけなどには建築設計とは異なる魅力があることを述べ、またスケールやスピード、季節の変化によって現れてくる「新しい風景」に関心があると述べて発表を終えた。

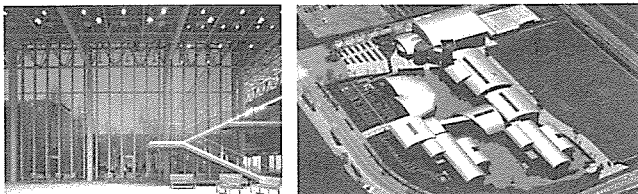
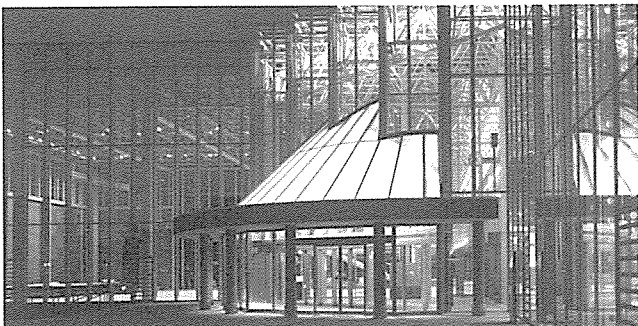
最後の6人目には、同じく1995年の卒業後に本学修士課程(青木研究室)に進学し、現在青木研究室において助手を務める木下芳郎氏が発表した。木下氏は建築計画の研究を続けて現在に至るため、他の発表者のような設計活動の報告ではなく、現在授業で担当している「設計製図第二」の授業を通して見た学生の傾向と、指導に対するとりくみについて重視している点について述べた。あわせて、建築学会での委員会活動についても説明した。現在2年生後期の製図の授業である「設計製図第二」で学生と接していると、今どきの若者にみられる「相互不干渉」といった点がみられ、エスキースチェックの説明に個人的な好みが見られることがあり、説得力を持っていないことを問題と考えている。これに対し、課題の中で導入されているグループスタディーやエスキースチェックを通して、積極的に議論・批評を行うことをうながし、個人的な「好き」に留まらない、客観性や共通理解に基づいた「良いもの」として自分の作品をプレゼンテーションできることを重視し、指導にとりくんでいると述べた。なお木下氏は、こうした思考の

展開の仕方や説得力の持たせ方を『華』の誌面にうまく表現することができれば、『華』が学生にとってより有意義なものになることを指摘している。建築学会の活動からは、木下氏が現在参加している「計画設計情報小委員会」の活動内容が紹介された。同小委員会では、CAD化やインターネットなど設計・計画の情報化が進んでいる現状において、これらの情報・知識をどのように集めて利用・保存し、共有や伝達を有効に行うべきか、またそれらを建築の質の向上に役立てるために必要とされる情報技術についての研究が行われており、そうした建築設計情報の具体的な活用法の一つとして、WEBサイトの立ち上げが現在計画されている。このサイトには掲示板の機能を持たせ、見た人が新たなノウハウや疑問点を書き込むようにすることで次々に新しいノウハウが蓄積されてゆくような仕組みとすることが期待されている。

パネラーの発表に続いて、質疑・感想がいくつか述べられた。戸尾氏は太田氏に対して、「建築を卒業した者が土木の設計を手掛けることは頼もしい」と賛辞を送った上で、事務所での仕事の進め方についてと、現在土木デザインが土木事業全体の中でどの程度の位置づけを与えられているかの2点について若干の補足説明を求めた。太田氏は、まずステュディオ・ハン・デザインが倉俣史朗のところで修行した韓重由美というデザイナーが主催する土木デザイン事務所であり、所員は韓を含めて4名程であること、仕事は韓が全体を統括し、物件ごとに担当を決めて韓+担当者という形態で仕事を進めていることを説明した。また土木デザインの位置づけについては、仕事の関係がある日本道路公団を例に取り上げ、現時点では重要な地域だけのワンポイント・デザインであること、しかし道路公団も将来的には全国的に景観に配慮することを強く意識しており、太田氏もゆくゆくは構造形式や路線・線形の計画にまで携わりたいと考えていることなどを述べた。また仙田教授からも装飾的な仕事に満足しないようにとエールが送られた。

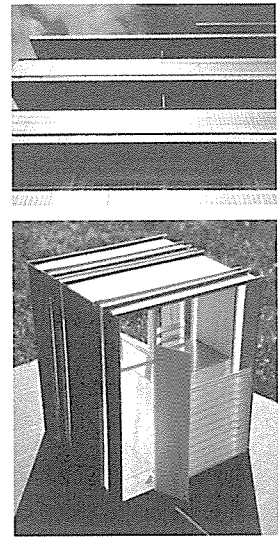
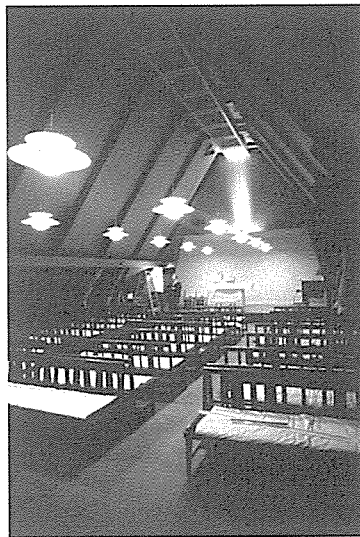
次いで伊達美徳氏から3つの感想・質問が出された。まず太田氏に対してエールを送った上で、「土木デザインにおける建築家の役割」の重要性について語り、過去の模範例として建築家の山口文象が清洲橋の設計に際して、橋をスレンダーに見せるために歩道部分をキャンチレバーとし、鼻先きの見付寸法を極力細く押さえたエピソードを紹介された。次いで梅野氏に対して、「久が原教会」について「既存

(写真提供: 佐々木健夫/山下和正建築研究所)



上・左下: JR新庄駅舎、ゆめりあ 右下: 印西市立原小学校

(写真提供: 梅野圭介/竹中工務店)



左: 久が原教会改修工事 右上: 日経新聞金町販売所 右下: コロンビア大学課題

建物のデザインコンセプトをどのように継承したか」という質問を出された。梅野氏はこの点について、特に3方向からの光(トブライト、地窓)がもたらす空間の雰囲気重視したことを説明した。伊達氏は3つめに高森氏が発言した「設計1・調整9」における調整とは実は「計画」あるいは「プログラム」づくりのことで重要な仕事であるが、それについてどれくらい真剣に考えているか、また実務においてどれくらいプログラム作りに関わっているのか、とパネラー全員に対して質問した。時間の都合上、既に質問を受けていた太田氏と梅野氏を除く4名がこの質問に対して、それぞれの経験に即した見解を披露した。

高森氏はプログラムを特に「事業計画」として位置づけた上で、「チーム・ハマノ」を例に挙げ、建築家がデザインと事業プログラムの両方を手掛けることができれば面白いものができると考えていること、しかし自らは現時点ではまだそこまで行っていないことなどを述べた。また代官山の商業施設を具体例に、「そこにどんなテナントが入るかまでは設計者はタッチできない。基本的にはどういうテナントを連れてくるかというのは事業者側の問題で、設計者のアンタッチャブルだ」と述べている。

塩田氏は「プログラム」の解釈について、用途の内容に制約が多い医療建築の場合、「計画」とはそうした用途をどう配置するかということとはほぼ同義になっていると説明し、「プログラムを作ることは自体、形を作ることだと思う」と述べた。それゆえ配置計画に対しては強く意識的であることを述べ、「例えば病院の入口の所に外来を置いて、風邪を引いた人が目の前にいるのではつくる方としてはいただけないので、外来は二階にして一階はパブリックとする。たまに来た人が入ってきた瞬間に見えて欲しくないという要素は見えないようにする」といった工夫を実践していることを述べた。また「弱った人が光とか風を感じられるように物を配置すること」の重要性を実務の中で理解したことを述べた。

佐々木氏は「プログラム」について、設計者と施主との間に存在する「あくまでも具体的な形になる前の『漠然とした状態』を作り出すための説明手段」と解釈していることを述べた。それは、ある施主から依頼があったときに、施主が当初抱いている希望の用途やテナントで採算が合うのかどうか、また要求を満たすことができるのかといった点について、常に施主と一緒に最良の策を探して行くような行為を指しているようである。そして現代は「そういうところから入ってゆく仕事

は、あくまでも個人、若しくは個人企業レベルのクライアントの方には随分やれる時代になっているのかなという気が多少している」と述べ、しかし、都市計画レベルに遡ってプログラムを考えるようなことは、一般的にも個人的にもまだ難しい状況だと考えていることを述べた。

木下氏は、「プログラム」という言葉を「計画」という概念を少しはみ出している形で理解していると説明し、「要するに『こういう目的でこういうものを作ろう』というのが計画であるならば、それができた後で、人がそれとは違う使い方をして行くことで異なる機能も持つようになっていく場合があり、それがどのように変化してゆくのか、ということも含めてそれを計画するという、『計画』のさらに拡張した概念として『プログラム』というものがある」と理解していると述べた。なお、こうした理解は学生にとって複雑すぎるため、設計製図の授業では、あくまで初めに「こういうものを作りたい、その故にこういう形として設計する」という意味での「計画」というものを、きちんと自分で説明できるような指導を心掛けていくと述べられた。

また、最後に半澤重信氏からは、後世に残るものを作るためにも「思想」を大切に作品を作ってもらいたいとの感想が述べられた。

記念講演の終了後、続いて同じ場所で懇親会が開かれた。会場には在校生の姿も散見され、特に学部2・3年生の姿が多く見られた。冒頭に述べたように、この記念講演の趣旨の一つは、卒業生が自らの経験を在校生に向けてアドバイスすることにあつた。この点については、パネラーの就職先がゼネコン設計部(高森・梅野)、大手組織設計事務所(塩田)、個人アトリエ(佐々木)、土木デザイン事務所(太田)、大学研究者(木下)と多様であることや、話の内容が就職先で経験したさまざまな業務の話や担当作品のスライド紹介、在校生に向けてのアドバイスなど多岐に渡っていたことから、会場に集まった建築設計を志す学生たちにとっては、卒業後の進路を考える際に必要とされる判断材料を幅広く知る機会になり得たと考えられる。そして、「TIT 建築設計教育研究会」は、設立から今日に至るまでの最初の10年間で卒業生が在校生に対して一方的に支援するものであったのに対し、これからは「大岡山建築賞」の受賞者が卒業生へと立場を変えて学生を支援していく、そのような新しい段階に入ったのだと考えられる。

(写真提供: 太田啓介/ 스튜디오・ハン・デザイン)



左上: 踊場跨道橋/東九州自動車道/鹿児島県 右上: シンボルツリー/上信越自動車道/新潟県
 下: 豊田ジャンクション/第二東名高速道路/愛知県

(画像提供: 木下芳郎/東京工業大学)

計画設計における情報活用事典(仮題)出版にむけた

計画設計情報活用フォーラム 日本建築学会 計画設計情報小委員会

ホームページ **本サイトについて**

本サイトのねらい 本サイトは、「計画設計における情報活用事典」の出版にむけて用語の解説やノウハウ等を集めていくなかで、計画設計に関する情報交換を行える場になることを期待して作られたものです。

目次

検索

新しい用語の募集 本サイトには情報をめぐる行為や、計画設計に関する用語それぞれについてフォーラムがあります。そこではこれまでによせられている意見を見ることができ、また自分の意見を書き加えることができます。

事例紹介 本をとりまとめる段階で、いただいた意見を本の内容の一部に加えていただく場合があります。あらかじめご了承ください。

ご意見・お気づきの点等ありましたら管理者までご連絡下さい。管理者へのメール

建築学会・計画設計情報小委員会ホームページ

建築設計製図第一

Sophomore-studio Work: Spring Semester

住宅設計課題:「森の中のHouse Office」 "House Office in Forest"

担当:

八木幸二[教授] 藤岡洋保[教授] 宮本文人[助教]

YAGI Koji (Professor), FUJIOKA Hiroyasu (Professor), MIYAMOTO Fumihito (Associate Professor)

奥山信一[助教] 塚本由晴[助教] 那須聖[助手]

OKUYAMA Shinichi (Associate Professor), TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor),

NASU Satoshi (Assistant)

TA: 田口陽子[博士課程] 長岡大樹[博士課程] 吉村英孝[博士課程]

TA: TAGUCHI Yoko (Doctor Course), NAGAOKA Dajū (Doctor Course), YOSHIMURA Hidetaka (Doctor Course)

以下は、課題の内容と2000年9月4日[月]に行われた第2課題の講評会の発表作品の一部を助手の那須と学生編集員の田口陽子[D3]がまとめたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

1—「最小限住居」

第一課題では、最小限住居(増沢洵自邸)の平面、立面、矩計図のトレースを行い、木造住宅の基本的な構造を理解した上で、10坪程度の小空間の設計を行った。課題は、7件の住宅を各自が選択し、増築するもので、既存の建物の価値や空間の大きさを把握しながら新しい空間を付加するものである。

対象住宅: 山口文象自邸、前川國男自邸、山田守自邸、清家清自邸、直方体の森(篠原一男)、猪股邸(吉田五十八)、増沢洵自邸

2—「森の中のHouse Office」

第二課題は木造小住宅の設計を行った。まず、浜田山の家(吉村順三)のトレースを行い、続いて設計課題に入っている。本課題では、エスキスの初期段階から架構模型を作成させ、単なる形のスタディではなく、いかに建物を成立させるかという点へ学生が意識を向けるように配慮している。結果として、単なる形式的な提案も多く見られたものの、「森の中のHouse Office」が示すように、住居と仕事場の関係や家族相互の関係、森という周辺環境との関係などを具体的にイメージした案が提示されていた。以下にはその作品の一部を建物の形式で分けて紹介した。

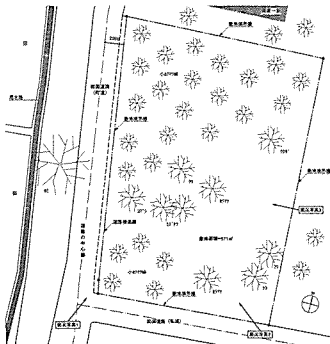
〔設計趣旨〕

戸建ての住宅とか、オフィスというような建物の種類(ビルディング・タイプ)は、家族が暮らしたり、人が仕事をするための建物として全く疑う余地のないもののように見えます。しかし、近年の情報技術の発達は、在宅勤務や遠隔会議を可能にし、産業構造の変化はソフト制作などの小さな組織による活動領域を拡大しました。こうした変化を捉えて、SOHO(Small Office, Home Office)というような、住宅と仕事場を明確に区別しない種類の建物も現れてきました。

そこで、住む場所と働く場所の関係をこの新しい条件の中で再検討するために、仕事場を併用した住宅を設計しようというのがこの課題です。家族構成を各自想定し、快適で楽しい住宅の空間を的確に図面化した上で、さらに、生活と仕事が共存する空間はどうあるべきか、そこでの生活や仕事はどのような相互影響を生むのか、といったことに対する提案を期待しています。

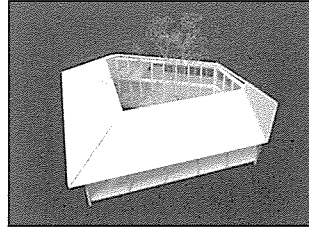
〔設計条件〕

建物規模: 原則として地上2階、地下室も可。下記の法的制限を守ること。また、面積は最大限利用すること/敷地面積: 571m²/用途地域: 第1種低層住居専用地域/建蔽率20%/容積率20% 構造: 木造



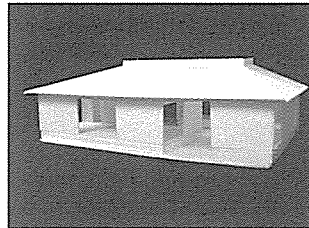
課題敷地: 長野県北佐久郡軽井沢町

中庭案——中庭の中心に木を植え、そこを中心として周囲へ屋根を傾斜させた案や、中庭をスタジオとして利用する案など特定の場所として中庭を意識したものと、細長い空間を連続させた結果として中庭ができた案のように類似した平面形式でありながら、学生の意識は異なっていた。



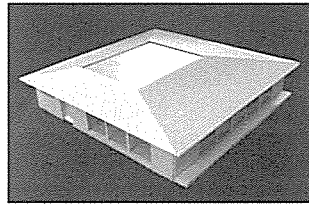
「囲む家」油谷千佳 9926414

木を囲む一つのチューブを設定することから始めた。チューブの連続性を生かすため、台所とトイレのユニットで空間を分節した。可動間仕切りにより喫茶店・家、寝室・居間・廊下を一体空間にできるようにした。



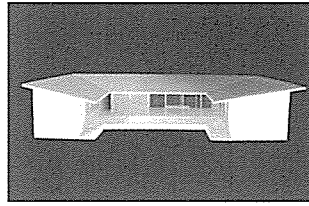
「変化する家」劉敏永 9926390

異なる二つの形態を絡み合わせることで新しい空間への期待感が常に感じられるよう構成した。通路は外部でも内部でもない中間的領域であり、小規模住宅でありながら豊かな空間を生み出すことを意図した。



「異空間をもつ家」荒木裕子 9901012

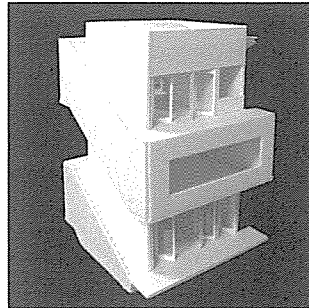
家族構成として写真家の夫婦を想定した。周囲に開放的な建築ヴォリュームによりスタジオを囲む構成とすることで、軽井沢の自然と結びつけた「開放的な内部空間」と自然のなかにありながら「独立した外部空間」の対比を表現した。



「森の画家の家」鎌田詩織 9907150

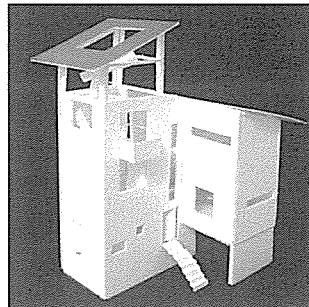
父親は風景画家で仕事場は北側の別棟である。長時間の作業に集中できるように配慮した。デッキの通路をはさんで、母屋を設け、別棟と屋根・デッキにより連結させ、仕事と家族が離れすぎないようにした。

塔状の案——二案とも塔状のヴォリュームを立ち上げ、林のなかを異なる高さから眺めることを意識した案であるが、伊庭野案の二重螺旋による形式性、和田案の内部空間の構想への具体性のように異なる思考過程がうかがえる。



「二重螺旋の家」伊庭野大輔 9902738

いろいろな場所で絵が描けたり、また高い木に近づくとによって、より身近に自然を感じられるように建物を4つのレベルに分けた。そして階段を二重螺旋構造とし、屋上でつなげることで一本の動線ができ、建物の中を回遊する楽しさを見い出そうと考えた。

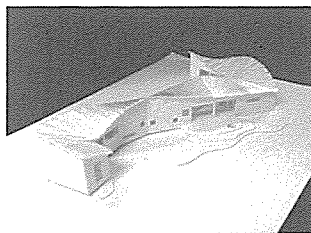


「森の中の天文台ハウス」

和田智子 9927661

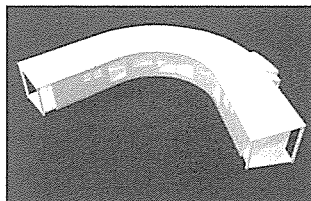
家族構成は天文学者の父、普段は専業主婦で父の留守中には天文観測を手伝う母、小学校低学年の息子二人である。天文台は仕事部屋と一体化させる為にロフトとして取り付けた。また、建物の高さを活かして、スキップフロアにより内部の連続性を生み出した。

細長いヴォリュームとリニアな内部空間——細長いヴォリュームに生活空間を配列した案と、細長い連続した内部空間をつくらうとした案のグループである。空間の長さを活かすために湾曲させたり、天井面に変化を与えたりするという工夫が見られる。



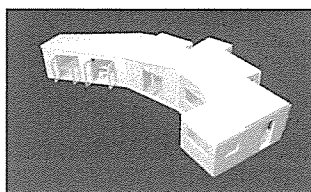
「道の家」吉川寛華 9926696

住人の職業はランドスケープアーキテクトである。彼の作品が見渡せる敷地内を通る「道」のような家をつくらうと考えた。そして、暮らしながら様々な庭の風景を楽しみ、仕事のアイデアを得る場所となる。家全体がランドスケープの一部となるよう、屋根で山脈を表現した。



「つながりHOUSE」四ヶ所高志 9911648

住人の職業はパソコンを使用する仕事である。仕事場と生活空間を等価に捉え、長いヴォリュームの中に均等に配列させた。直線的なヴォリュームだと、家族の活動が互いに意識しづらいので、湾曲させることで、中心に人が集まるようにした。

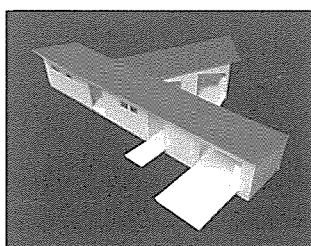


「小さなキッチンレストラン」

松本卓士 9922860

この家には料理家の夫婦と二人の子供が暮らす。生活の基点としてキッチンと寝室を設定し、細長い空間の中にくい込ませて天井面を傾斜させることで、人の動きをうながし活力ある空間をつくることを意図した。

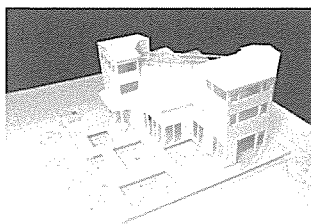
枝分かれした内部空間——ヴォリュームを敷地になじませるように複数の方向に枝分かれさせている案である。枝分かれさせることによって、それぞれの空間に内外の関係を表現すること、機能の差異を視覚化することなどが、意識されている。



「(ホン)ダナ、イエ」大森真樹 9904996

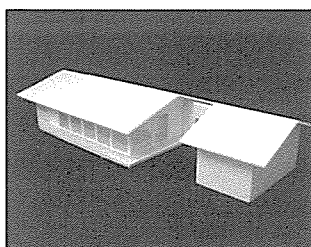
仕事と生活は混在して明確な区別がないが、公私をある程度区別する必要がある。敷地南のオープンスペースに第二のダイニングとリビングとしてのデッキを設け、その脇に母親の仕事場であるキッチンを置いた。そして、その横に外との接点である入口を、この両方からの視線の先に父親の仕事場を、一度外部を介して配した。

複数のヴォリュームの組み合わせ——複数のヴォリュームを組み合わせることで、外部、内部ともに多様な表情を作り出そうとしている。なかには、形の組み合わせに終始せず、内部空間にヴォリュームの組み合いを表現し、魅力的な空間をつくらうとする意識も見られた。



「森の家」深澤千賀子 9920630

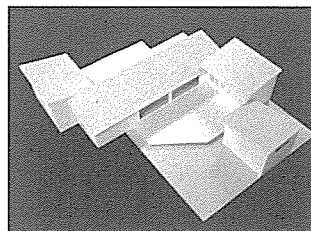
和菓子とお茶を森の息吹を感じながら楽しんでもらう家。来客者は木を囲みながら緑側に座れる。オフシーズンには緑側のスペースで家族が団らん出来るよう、リビングとの繋がりを工夫した。



「見える家-陶芸家のための家-」

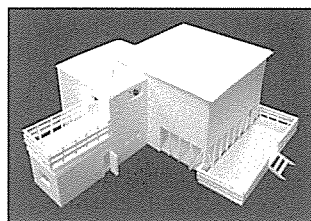
宮崎昭子 9923717

外↔ギャラリーの作品
リビング↔アトリエ↔アトリエの客
ギャラリーの飾り棚には、とっておきの作品を飾って欲しい。創作意欲がわいたら、すぐにアトリエに行けるようにした。



「deck'n house」恵崎孝之 9903844

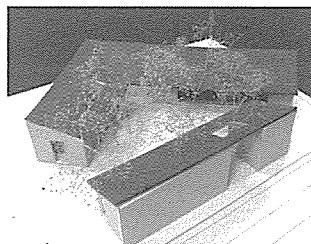
居間を中心に南側と北側にデッキを設けた。南側のデッキを仕事場へ、北側のデッキを子供たちの部屋へと連続させた。家族それぞれに個室をつくり、廊下を設けずに外部のデッキを動線とすることで、常に外を意識するようにしている。



「Square House」中間明子 9917527

店と生活空間を分けながらも、厨房を兼用することで一体感を持てるようにした。店は内部を吹き抜けにし、森の中に作られたもう一つの空間の広がりを味わうことができるようにした。

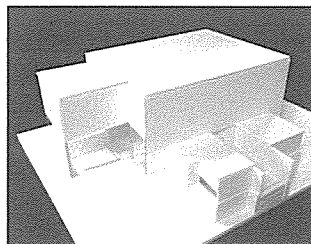
分棟案——分棟にすることで、複数の機能を敷地内に振り分けている案が多く見られた。敷地全体を生活の場所として意識できることを考えているが、外部空間に手を加えた案は少なかった。稲用案は複数の棟によって囲まれた外部空間が同一の床素材によって仕上げられており、敷地全体に一体感を与えるものであった。



「親父が背中を見せる家」福用隆一 9902514

各部屋を大きくとり、子供の成長に合わせて変化させられるようにした。また、外部と内部を一つの屋根で覆うことで家と自然の調和を図った。開口を小さくすることによって視線を内側に向け、常に家族の存在を感じさせるようにした。

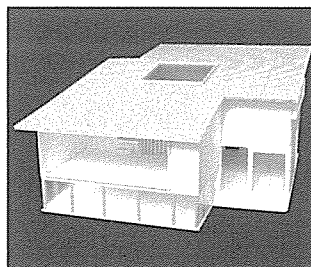
主従関係を持つヴォリューム——ヴォリュームに主従関係を持たせた案。形の組み合わせが結果的に主従関係を作り出しているものが多く、ヴォリュームの大きさが内部の空間の差異に積極的に表現されている案は少なかった。



「Black Hall」本橋良介 9924384

家族4人全員が音楽家なので、音楽会を催すことが可能なホール兼居間を中心とした構成とした。極小のプライベートスペースより広くて気持ちの良いホールに家族が自然に集まることを意図した。

単一のヴォリューム——外形を一つのヴォリュームとしたものであるが、単一のヴォリュームを複数の細かい空間に区切ったもの、断面的に大きな空間を重ねたものなど、内部空間の構成法は異なっている。貝塚案は、吹き抜けやスキップフロアで内部空間に一体感をもたせた点や単一のヴォリュームでありながらも周辺の景観との連続性を意識した点が評価された。



「段の家」貝塚祐樹 9906940

居間、寝室などといった機能の異なる室を壁で仕切るのではなく、床レベルの差により分ける。そうすることで視線が通るようになり、空間に伸びが生じる。また、中央に吹き抜けを設け、中央から縦・横に空間が広がっていくようにした。

建築設計製図第二

Sophomore-studio Work: Autumn Semester

「ふだんの居場所を考える」

"Design a daily-use Space"

担当:

青木義次[教授] 藍澤宏[教授] 大佛俊泰[助教] 藤井晴行[助教]

AOKI Yoshitsugu (Professor), AIZAWA Hiroshi (Professor),
OSARAGI Toshihiro (Associate Professor), FUJII Haruyuki (Associate Professor)

八木幸二[教授] 奥山信一[助教]

YAGI Koji (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor)

木下芳郎[助手] 斎尾直子[助手]

KINOSHITA Yoshiro (Assistant), SAIO Naoko (Assistant)

以下は、課題の内容と2000年11月16日[木] 講評会の発表作品を学生編集員の村上修平[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

緑ヶ丘地区周辺に、建築の学部生、大学院生、および6類のためのスペースを計画する。現在設計製図の作業スペースの不足、コンペなど課題以外のグループ作業空間の不足、課題作品や卒業設計を展示するスペースの未整備、講評スペースの不足などの問題がある。CAD、ネットワークの整備が遅れているため、学生が自由に使える端末機が無いことも問題としてあげられる。6類全体の学生からは、雨の日や授業以外の居場所がないことや、簡単な飲食を行うスペースが無いこと、自由に使える外部空間の不足が不満としてあげられている。

課題はこうした学生の身近なテーマに対して、具体的な空間を提案してもらうことを求めている。

「設計条件」

所要スペース:

- 学部生、大学院生がコンペ等で不定期に利用するスペース
- 講評会や講演、スライド上映、卒業設計展、OB建築家の展覧会などが行えるスペース
- 簡単な飲食や喫茶を行うスペース
- 建物へ搬入出を行うための駐車スペース
- その他各自の提案するスペースを積極的に計画にとり入れること。

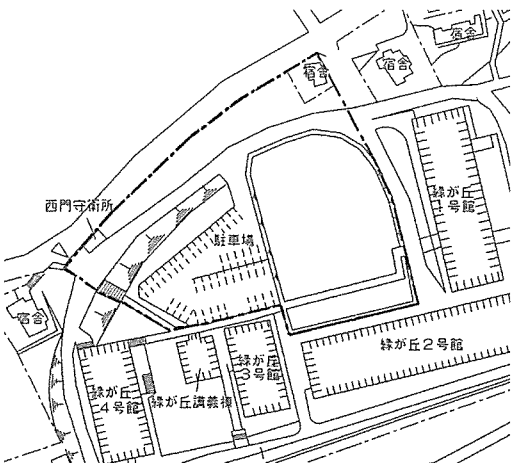
規模: 地上2階、地下1階以内とする。延べ面積は1000m²程度を目安とする。

構造: 主構造はRCラーメン構造とする。

法規: 特に設定しないが、不特定多数が利用する公共性の高い建物であることを考慮し、2方向避難、居室条件は考慮すること。

その他:

- 既存の樹木、植栽などを極力維持すること。
- 現在の駐車場部分へ建物を建てる場合は、既存建物への搬入出、緊急車両のアプローチが可能な経路、駐車スペースを確保すること。
- 空調、電気の機械室等最低限必要な設備について考慮すること。
- 動線(人の移動する経路やそこでの行動等)を考慮すること。
- バリアフリーについても検討すること。



敷地図



グループ発表会

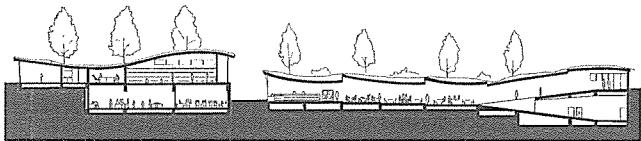
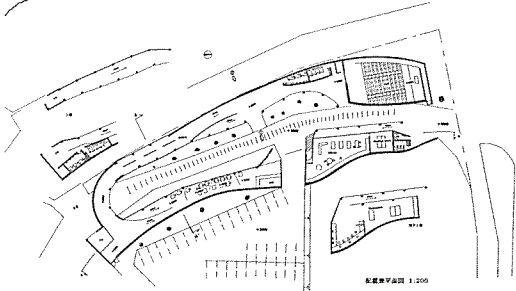
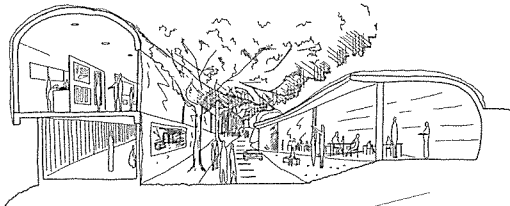


中間発表

「課題の進め方(1,3,4はグループ作業)」

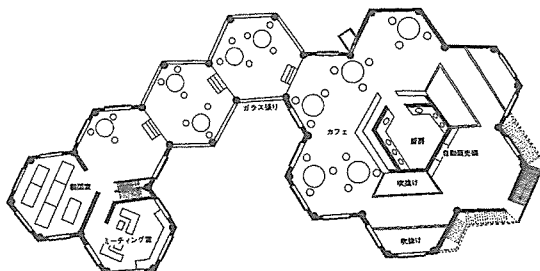
1. 3,4人のグループを作り、敷地の調査、研究室の学生へのヒアリングを行う。
2. 課題内容についての解説
3. 敷地模型作
4. グループ発表会
グループごとに議論した結果を紙やOHPフィルムにまとめ、発表する。
5. エスキスチェック
6. 図面表現などに関する解説
7. 中間発表
8. 基本図面縮め切り
9. 最終図面縮め切り
10. 講評会
11. 図面を掲示し、良いと思った作品とその理由を全員が用紙に記入し掲示する。

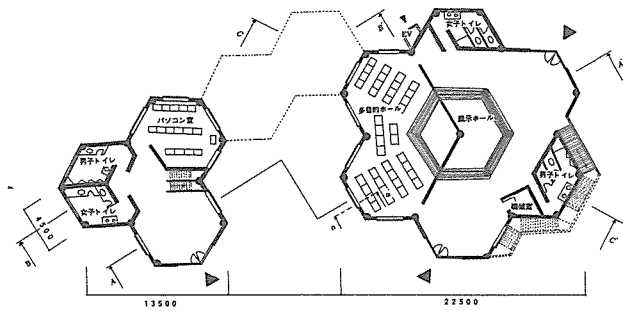
「Tube/Green」大森真樹



現在は単なる道路でしかない緑ヶ丘西門から土建棟へ続く道。この道は豊かな木々に囲まれ、緩やかなレベル展開をみせる緑ヶ丘特有のシークエンスである。私はこの道—移動という性質—の両側に Cafe Gallery Hall Workspace 等の滞留の場を配置した。そして、道を挟んで Tube を配置することでこれらの場をつくった。この Tube により Cafe, Gallery, Hall は連続的に移動できる空間となり、緑ヶ丘のシークエンスを彩る。また、Tube は内部用途に対応した光を発生し、木々たちを照らすものとなる。その様は生物におけるそれを思わせる。

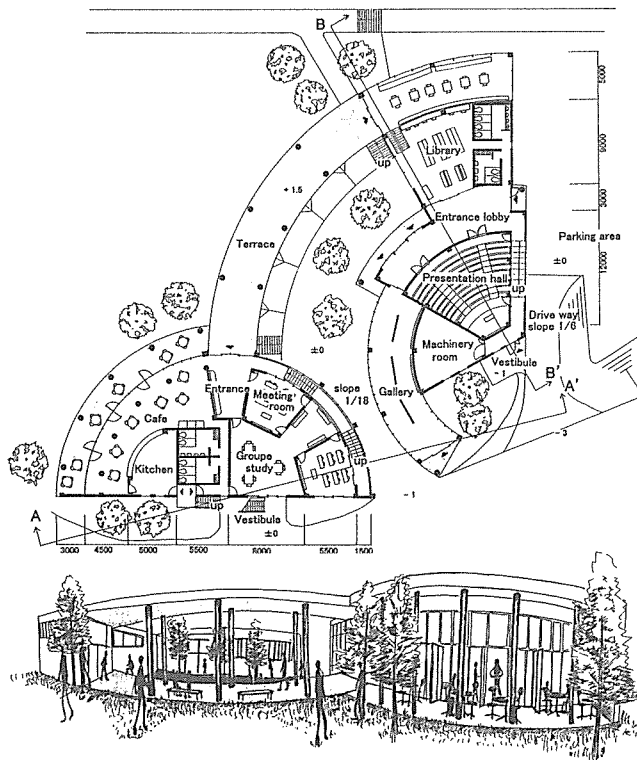
「HONEYCOMB STYLE」小沢宣行





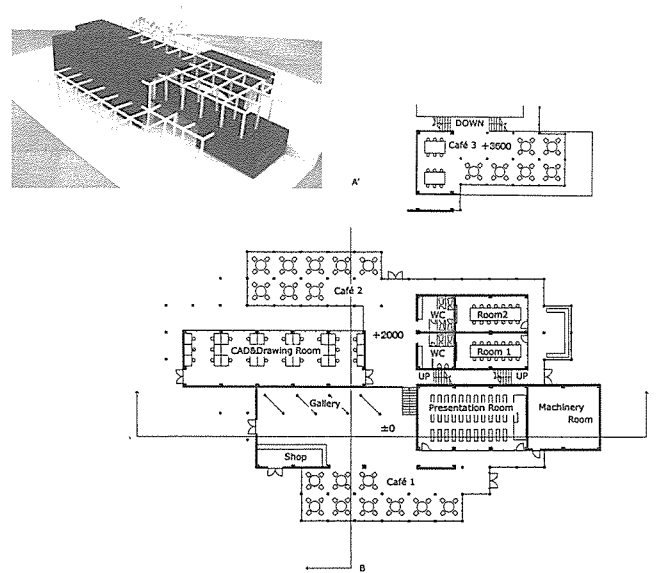
内部は面積を十分広く感じさせる六角形を組み合わせたもので、最初にこの建物を訪れたときに迷わぬよう部屋割りもできるだけシンプルにし、分かりやすさをこころがけた。屋上を芝生で緑化し、既存の広場と駐車場を統合して新たな広場をつくり、ひとつの学生間コミュニケーションの場、さらに地域の人々の憩いの場とした。さまざまなレベルをもつこの建物は相互に人の動きがよく見え、ガラス張りの廊下でつながれた2つの建物は半階ずれることで互いに内部の様子を見せあっている。(コンセプト抜粋:編集部)

「Outside Inside」 筒井摩由子



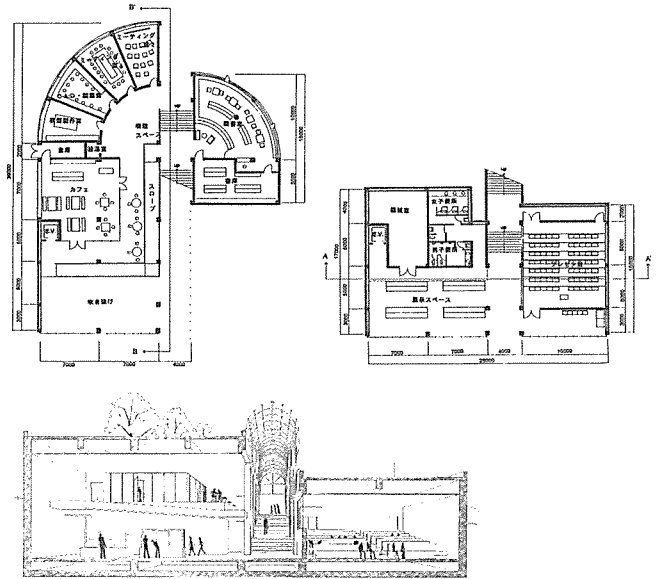
8:55a.m.西門を通り緑ヶ丘キャンパスに登校する人々をこの建物が迎え入れる。弧を描くふたつの建物の間を通る歩行者専用の緩やかなスロープは視界を一度狭くしたのち、再び広げることで上に広がる広場を強調し、またそこから緑ヶ丘1号館へのつながりを感じさせる。17:00p.m.エントランスロビーやその前の植え込みのある空間で、待ち合わせて出かける人、偶然出会って一緒に帰る人。この建物の明かりが、暗くなりかけた緑ヶ丘キャンパスを中央から照らし出す。(コンセプト抜粋:編集部)

「Covering Cubes」 中島敏明



「普段の居場所を考える」という課題に対して現在の駐車場を広場にして図のように建物を建てることで広間全体としての休憩スペースを提案する。緑ヶ丘の各棟からほぼ中央に配置されており、各棟から気軽に立ち寄れるようにしている。休憩スペースと作業スペースを完全に別にする事でメリハリを付けた。Cafeで休んでいる人が移動している知り合いに偶然出会って雑談ができ、Communicationが深まるよう内部を設計した。各作業スペースのアクセスを意図的に難し、それぞれに移動するときに必ずどこかのCafeの横を通るよう設計している。この建物を通して他の場所に行こうとしたときも同様である。Cubeはガラス張りにすることで外との関係を曖昧にし入りやすくした。

「緑ヶ丘通り」 山崎麻友子



現在の緑ヶ丘では、社工棟の学生と土建棟の学生は、西門を入ってから各々の棟に至るまでのルートが異なるため、同じエリアにいても顔をあわせる機会が殆どない。そこで、西門と社工棟前の通路を繋ぐ建物を作れば、学生等が登下校の際に同じルートを取る様になり、交流する機会も増えると考えた。また、「人が通る」「交流する」という観点から、道と建物の中間的存在であるアーケードを設けた。

建築設計製図第二

Sophomore-studio Work: Autumn Semester

「都市と住居」

"Urbanity and Housing"

担当:

八木幸二〔教授〕 **奥山信一**〔助教授〕 **藤井晴行**〔助教授〕

YAGI Koji (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor),
FUJII Haruyuki (Associate Professor)

青木義次〔教授〕 **藍澤宏**〔教授〕 **大佛俊豪**〔助教授〕

AOKI Yoshitsugu (Professor), AIZAWA Hiroshi (Professor),
OSARAGI Toshihiro (Associate Professor)

那須聖〔助手〕 **木下芳郎**〔助手〕

NASU Satoshi (Assistant), KINOSHITA Yoshiro (Assistant)

以下は、課題の内容と2001年1月23日〔火〕講習会の発表作品を学生編集員の石原久一郎〔M2〕がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

私たちが生活する都市にはさまざまな住まい方がある。たとえば、一般的な住宅地と呼ばれる地域における一戸建て住居、あるいは大規模な開発による集合住宅団地における住まい方もその一つである。しかし、もう少し都市に住むということを実感できる楽しい住まい方がありえないだろうか。そこで今回の課題では、住商混在形式の都市型集合住宅を設計する。対象敷地は、別紙に示した自由が丘駅近傍の住居と商業施設が混在しつつある地域である。それぞれの住戸内部のプランニングはもとより、住戸相互の関係、住居部分と非住居部分との関係、街との関係、そして敷地の高低差などについて熟考し、豊かな発想力で刺激的な提案をして欲しい。

〔設計条件〕

所要スペース:

- 住居部分(住居部分と非住居部分の比率は6:4程度とする)

基本的に賃貸住居を前提とする。一住戸の規模は、25㎡から60㎡を目安とし、さまざまなヴァリエーションの住戸を出来るだけ組み込むように努力すること。とにかく、この敷地のロケーションと課題の主旨をよく理解して夢のある住居を提案して欲しい。オーナーハウスを組み込んでも良いが、オーナーのイメージを想定し、そのイメージを十分に満足させる空間としなければならない。

- 非住居部分

業種内容は自由とする。

- 駐車場(住戸数×0.7~1台分を確保すること)

建物規模:

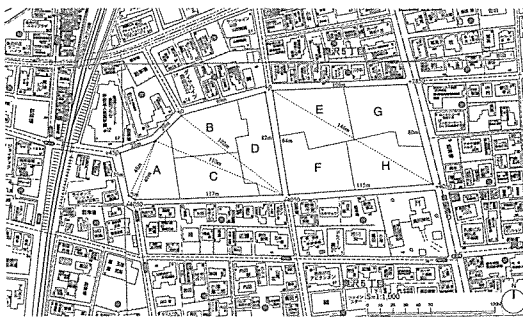
原則として地上3階、地下1階以内とする。実際の都市計画規制は異なるが、今回は下記の条件とする。

- 用途地域: 第1種住居地域、第2種高度地区
- 建坪率(建築面積/敷地面積): 60%(角地の場合70%)
- 容積率(述床面積/敷地面積): 150%
- 防火指定: 準防火地域

構造: 原則としてRC造または鉄骨造

設備: 基本的に個別空調システムとする。

法規: 詳細については規制しないが、次の項目については十分考慮すること。避難経路、最高高さ(12m)、各種斜線規制

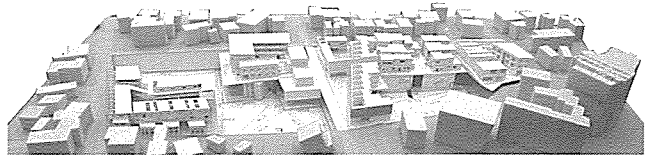


敷地図(各自の名前の後ろのアルファベットは担当の敷地である)

〔課題の進め方(1,2はグループ作業)〕

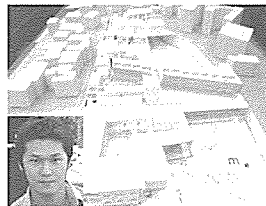
1. 8, 9人で1つのグループを作り、グループの中で敷地A~Hを割り振る。
2. 選定した敷地をいかに読むか? どのような建築的可能性があるか? 課題主旨をいかに解釈するか? これらに関して、各グループごとに議論し、その結果をまとめ、発表する。
3. 基本図面しめきりを経て図面しめきり、講評会
4. 図面を掲示し、全員が評価する作品とその理由を用紙に記入し、掲示する。

グループI

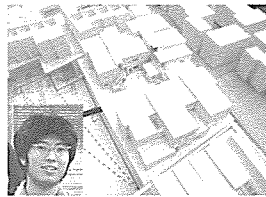


グループIの基本方針

- 駅から伸びる放射状の街路パターンをプランに取り入れよう。
- 敷地のレベル差を意識し、眺めによってレベルを決定する。

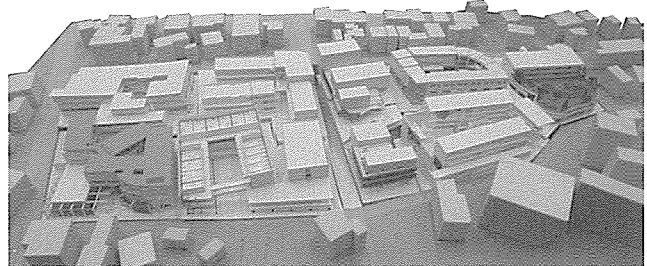


「central park cafe」伊庭野大輔——D
「住戸とギャラリーとカフェに囲まれた中庭」と「道に面した開かれた庭」の性格の異なる二つの庭を提案。「都市の中で集合住宅はいかにあるべきか」を意識して設計している。



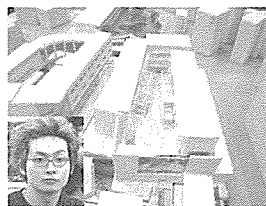
「混住」宇佐美洋平——C
「道→広場→商店→集合住宅」という公私のヒエラルキーを意識して設計。
南北のレベル差2mを住戸単位で吸収した。

グループII

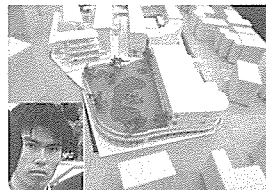


グループIIの基本方針

- 自由ヶ丘には公共の場が少ない
- 8つの敷地にそれぞれの公共施設をつくって住宅と複合させる。



「シュウゴウミクスチュア」大森真樹——B
住民のためのコミュニケーションの場と表現の場を提案。階段やギャラリーをパブリックスペースと捉えて、それらが住戸に侵食していくイメージで設計した。



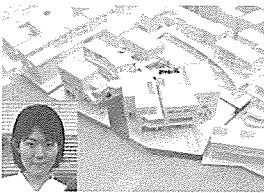
「Contrast」小沢宣之——A
下層部のトレーニングジムと、その上層部にある住民のための広場の対比が面白い。屋内のジムと屋外の広場を同じ運動のための空間と捉えながらも、積層させて対比を強調。

グループIII



グループIIIの基本方針

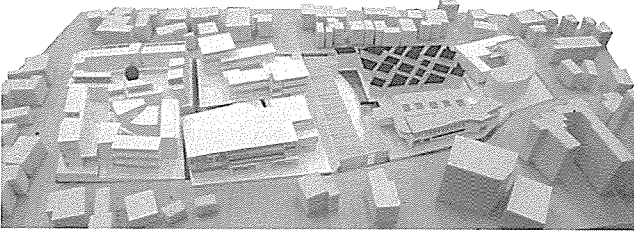
- 都市の中にある住宅として、広場のもつ空間特性に注目。広場をつくらう。



「Open House」小林和子——B

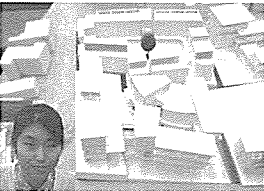
ギャラリーやワークショップを住戸近くに配置することで、変化に富んだライフスタイルを提案する。住民同士のコミュニケーションは縁側で行い、建物間のスペースを楽しくなるように設計した。

グループIV



グループIVの基本方針

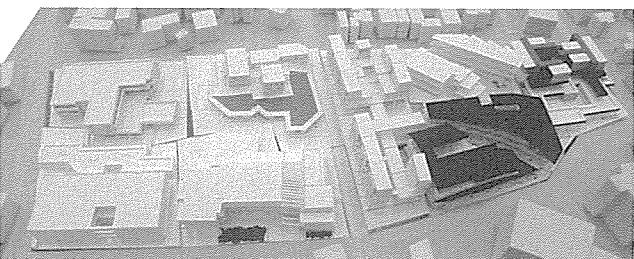
- 集中、分散といった様々な配置パターンの可能性を検討した。



「WealthyLifeBase-J」筒井摩由子——B

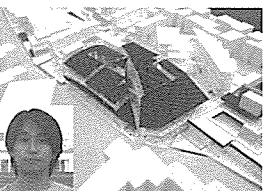
角地の角を切り取るように敷地内に道を通し、通り抜けるだけでなく立ち止まりたい楽しい空間を提案。その道を囲むようにある商店は、外からも中の様子が見えるギャラリーのような空間である。

グループV



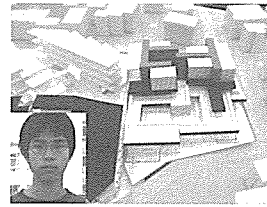
グループVの基本方針

- 八つの敷地で統一の「ブランド」を作って独自のカラーを作る。



「青空コーポ」中尾鶴平——B

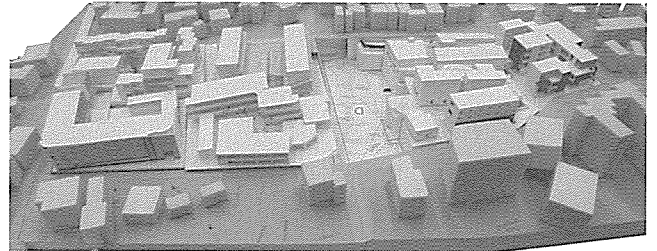
住民を建物に閉じ込めないようにしたい。そのため、台所を土間にするなど工夫をした。また、共有空間でガーデニングをしたり、中庭に喫茶を設けるなど、「青空」の健康的なイメージを大切に設計した。



「Lines Of Light」中島俊明——A

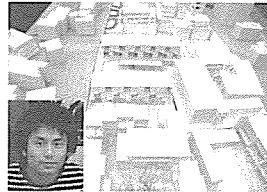
内部空間は全室二方面から開口を設け、且つどの住宅も他の住宅からの視線を遮るよう設計した。廊下、住戸、商店のボリュームを組み合わせ、それらをインテリア的に扱って外観とした。

グループVI



グループVIの基本方針

- キーワード「鬼ごっこ」。そこから様々なイメージを引き出した。



「Jiyugaoka Rent」松本卓士——F

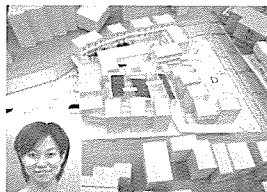
玄関と共用廊下の上に半外部空間を設け、そこにパブリックな都市空間とプライベートな居住空間の中間的な意味を持たせた。

グループVII



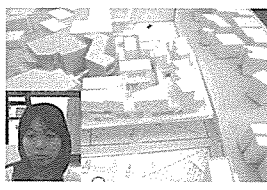
グループVIIの基本方針

- 建物と建物の間を工夫して集合住宅や都市との広がりを考えていく



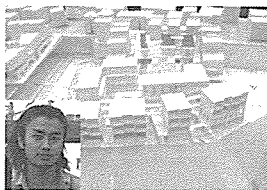
「Creation Village」吉川寛華——C

間を住人が楽しめるよう居住空間に建物と建物の間を取り込む。若いクリエイターのための住宅を設計。1階に展示、2階に作業場、3階に和みの場とし、街を通る人を吸引したい。入り組んでいて楽しい間を。



「Maのある街」和田智子——F

自由ヶ丘の面白い間を発見しよう。くほみをつくり、そこをセミパブリックなスペースにして廊下や通る道との関係をつくる。スケッチのイメージを大切に設計している。



「HS complex」貝塚裕樹——B

建物間を良い空間にするために、路地に於ける視覚的空間の広がり、階段や吹抜けによる縦方向への抜け、空中通路による横方向への伸び、空間の展開を意識して、設計した。

建築設計製図第三/第1課題

Third-year studio Work: Spring semester

「保育園/幼稚園」

"Nursery school"

担当:

曾我部昌史 [非常勤講師、みかんぐみ]

SOGABE Masashi (Guest Professor, MIKAN-GUMI)

坂本一成 [教授] **奥山信一** [助教授] **塚本由晴** [助教授]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor),

TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

寺内美紀子 [助手] **安森亮雄** [RA] **久野靖広** [TA]

TERAUCHI Mikiko (Assistant), YASUMORI Akio (Doctor Course, Researching assistant),

KUNO Yasuhiro (Doctor Course, Teaching assistant)

[ゲスト・クリエイター]

仙田満 [教授]

SENDA Mitsuru (Professor)

課題は「保育園/幼稚園」として、小学校に上がる前の子供達を対象とした施設としています。保育園は厚生省が、幼稚園は文部省が各々管轄しており、30年以上前に作ったルールから外れられない状況にあるので、「保育園/幼稚園」とすることで現状の形式に囚われずに、小学校に上がる前の子供達が生活する空間がどのようにあるべきなのかを考えて欲しいと思います。とは言っても、こうした内容からいきなり始めるのは難しい人は、自分が通っていた幼稚園を思い出したり、最近建てられた保育園や幼稚園で面白いと思うものを見つけてくるなどして、そこから展開していくという方法もあるかも知れません。また、ここでは子供達が起きている時間のほとんどを保育園や幼稚園で過ごしている事を意識するようにして下さい。つまり、保育園や幼稚園は子供達にとって生活の場で、いわば家のようなものです。そして、子供達、管理サイド、保護者の3者の視点から検討して欲しい。というのは、思い入れだけでもが組み上げられるのではなく、それぞれの立場に立って考えることで、一旦自分から切り離して分析的に考えられると思うからです。最後に、外部のスペースを建物の外側としてではなく、建物の一部として検討して欲しい。以上が、この課題のテーマです。

(以上、2000年4月13日[木]スライドレクチャーより抜粋)

[設計条件]

敷地: 東工大大岡山地区の一部(右下地図参照)

延床面積は400m²程度(最大で700m²)

子供は全部で30人(3歳~5歳=小学校にあがる前までの子供たち)

保育時間は9時から18時(延長保育を前提にしてもよい)

火災時などに子供が避難しやすいこと等、計画に留意

[提出物]

配置図(縮尺1/100): 1階平面と兼用可

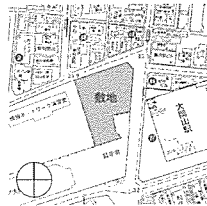
平面図(縮尺1/100)

立面図(縮尺1/100): 2面以上

断面図(縮尺1/100): 2面以上

パースあるいは模型写真

(以上をA1×2枚にまとめる)



百年記念館より敷地をみる



曾我部昌史

SOGABE Masashi

1962年 福岡県生まれ

1988年 東京工業大学大学院修士課程修了

1988-94年 伊東豊雄建築設計事務所

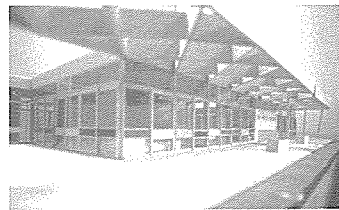
1994年 東京工業大学大学院助手、ソガベアトリエ設立

1995年 みかんぐみ(加茂紀和子、熊倉洋介、竹内昌義、マニエール・タルディッツの5人によるパートナーシップ)共同設立

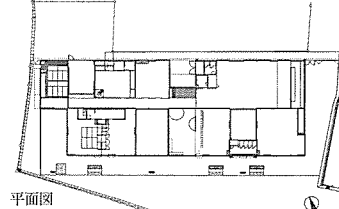
主な作品: 信濃大町の家、相模原の家、NHK長野放送会館、佐倉の家、八代公民館、逗子の集合住宅、押上の家

以下は、2000年4月13日[木]のスライドレクチャーにて紹介された作品の一部、及び2000年6月8日[木]の講評会の一部を、学生編集員(岡村航太[M2])がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

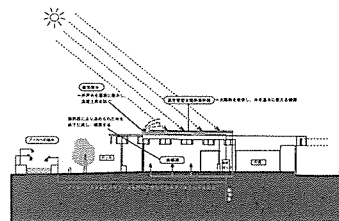
[スライドレクチャー]



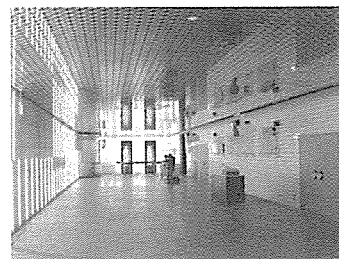
模型写真



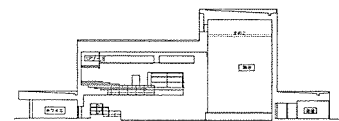
平面図



断面図



内観写真



断面図



内観写真

高田あけぼの保育園

熊本県八代市に建つ0歳から5歳までの子供60人を預かる保育園。北側隣地の公民館と広場を共有することが想定されているため、敷地の北側に寄せ、東西に長い建物が配置されている。内部空間はフラットな屋根の下、平面的に広がった場の中に、採光条件を考慮したテラスが入り込むことで変形したワンルームとなっており、家具や建具によってそれぞれのスペースに分けられる。テラスは子供達の遊び場や保護者の送迎用の場所といった具体的な使い方が想定されている。また、大きく張り出した庇を支える外部の柱や、耐力壁としての穴あきの鉄板も、物をひっかける、マグネットをくっつける、などといったように単に構造としてあるのではなく、行為と結びついた提案がなされている。

SHIBUYA-AX

渋谷の公園通りに建つ仮設のライブハウス。内部空間はライブハウスを成立させる最低限の要素によって構成されており、それが外形に直截に表現されている。アプローチ側の外装はFRPの波板が二重に貼られており、その間に蛍光灯と電光掲示板のシステムが仕込まれている。内部のホワイエは、外装で用いられた蛍光灯の光がもれるFRP板、ホール側のガルバニウム折板、CDが張詰められた天井によって構成される。

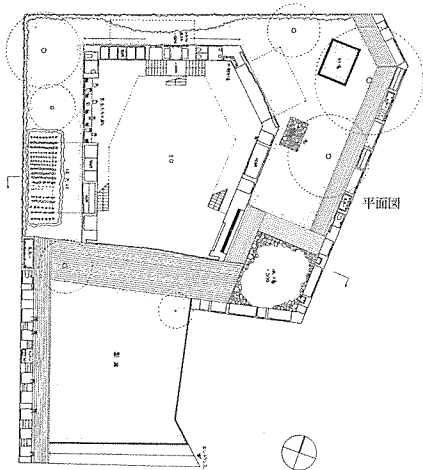
逗子の集合住宅

木造2階建て地下部1階のコの字型の建物。道路からはピロティ部分の駐車場を通して中庭を見ることが出来る。アラン・バーデンによる構造は、ピロティ部分をRCの壁柱によって支え、上部はブレースを入れることで壁全体を梁として支えている。

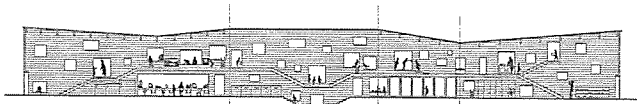
「Pantalica」倉林貴彦 KURABAYASHI Takahiko



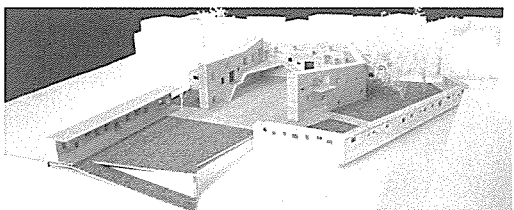
模型写真



平面図



展開断面図



模型写真

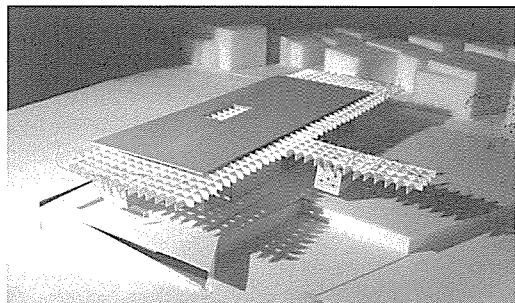
倉林——小さい空間と大きな空間を結び付けることによって、ままごとや粘土遊びといった小さなスペースでの遊びと、サッカーや鬼ごっこといった広いスペースでの遊びを自然に結び付けられるのではないかと考えました。屋根の形状については、雨水を一箇所に集め滝のように流すして、園児にとって楽しみになるようにしました。

仙田——こうした外部空間に屋根を架けると暗くはないですか。部分的に屋根を架けるか、高さをずらしてハイサイドライトにでもしたほうが良かったのではないかと。

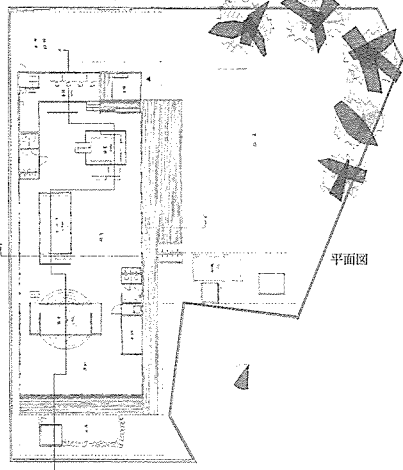
曾我部——あなたのつくったこの空間は、基本的に子供の遊ぶための場所をずっと繋げていって、それが結果として壁になったり、壁がないところは窓になったりするものと考えたら、壁をたてるという前提を変化させるというよりも、遊び場がずっと伸びていってそこを歩ける方が良く思う。そうだとすると、最終案は消極的な気がする。収納になっていたり、入り込んだところを積極的に使うべきだね。

坂本——部分的には使っているんだけど、個別化されているね。単に壁としてあるのではなく、具体的な使い方と結びつけた提案が表現したい空間に沿って行われていると良かったのでは。

「ぶらぶら」玉井洋一 TAMAI Youichi



模型写真



平面図



断面図



模型写真

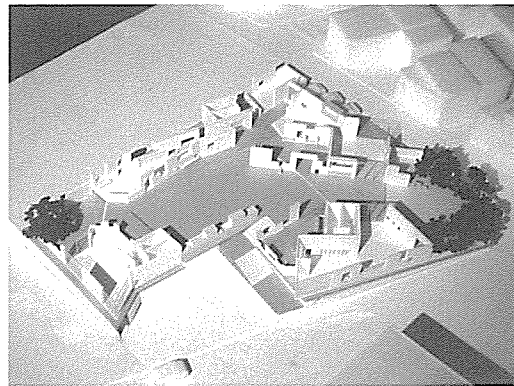
玉井——色々な用途の部屋や家具がぶら下がっている所を、自由に走り回ったり、遊んだりできるスペースをイメージしました。ぶら下がっているスペースは、舞台やトップライトの位置に対応したサンルーム、プールの上にある飛び込み台などです。また、幼稚園の空間について、子供の視線と大人の視線が混じり合うところから考え、こうしたぶら下がってくるものが、大人の視点においては内部空間を分節するものとなり、子供は連続的に体験できるようになっています。

曾我部——これだけの大きさのものをぶら下げるということについて、もう少し説得力をもたせてほしい。

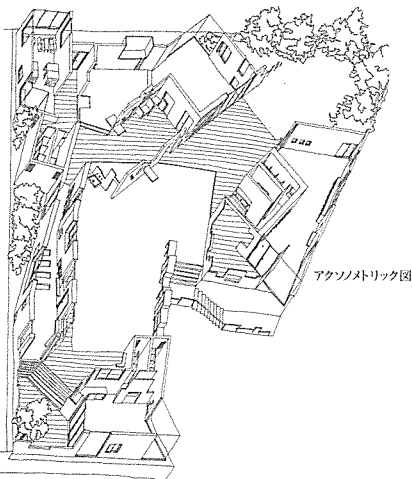
坂本——大雑把ではあるが、地面とぶら下がっている床という2つの要素で高さを調節し、空間に性格を与えていることが、面白いと思う。そういった空間にリアリティーをもたせる図面表現をもっとやるべきだろう。

塚本——残りの部分は園庭として何もしてないのだけど、様々なパラメーターで考えているところと、つきはなして考えているところがあるのが、バランスよく思う。あまり設計しすぎて窮屈になり、うっとうしくなってしまうのだけど、使い方を幾つも想像できる余地があるのが良いと思う。

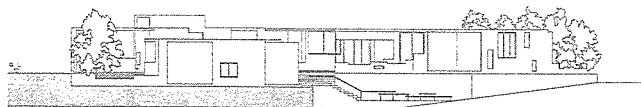
「I can, I could, I will.」片柳恭志 KATAYANAGI Takashi



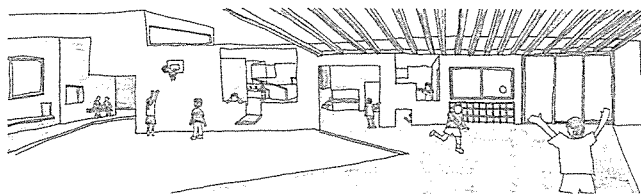
模型写真



アクソノトリック図



立面図



内観イメージ

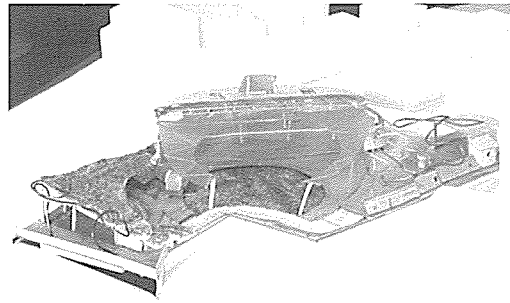
片柳——壁に開口をとることで、大人には見えるけれど子供には見えない、またはその逆といったような大人と子供の視線の高さの違いを利用しているような場所をつくることを提案しています。開口部は様々な方向に視線が抜けるようにつくられていて、プランも全体として環状になっていますが、昼寝をするための部屋だけは敷地の外を向いています。また、デッキや壁、屋根の組合せによって内部空間と外部空間が明確に分節されるのではなく、内外を横断する空間的な広がりを作ることを意図しました。そして、建物の壁と間仕切り、敷地を囲う塀とを区別することなく作ることで敷地における一体感を出せるのではないかと考えました。

曾我部——壁とか床に対する具体的なイメージは伝わってきて非常に良いと思うのですが、なぜ屋根はフラットルーフなんですか。

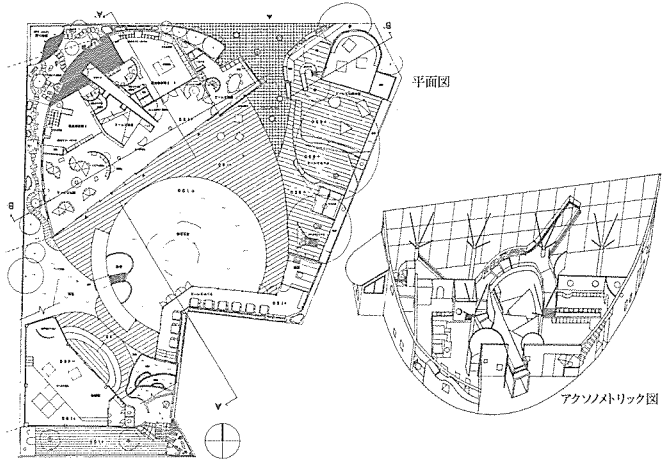
片柳——壁について、かなり操作しているので、屋根をフラットにすることで全体のイメージを調整できるのではないかと考えました。

仙田——そうは言っても、部分的に天井高を変えたりしている。しかし、その変え方に度胸がない感じがする。また昼寝のスペースの配置が駅の真ん前にあるのが疑問ですね。

「ひよこほいくえん」石原奈緒 ISHIHARA Nao

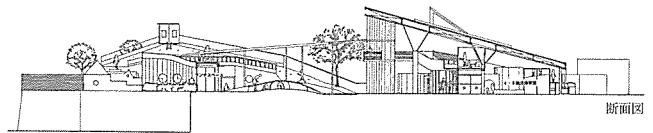


模型写真

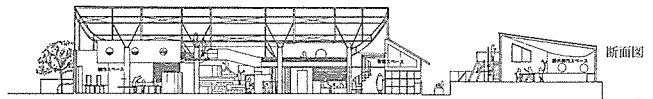


平面図

アクソノトリック図



断面図



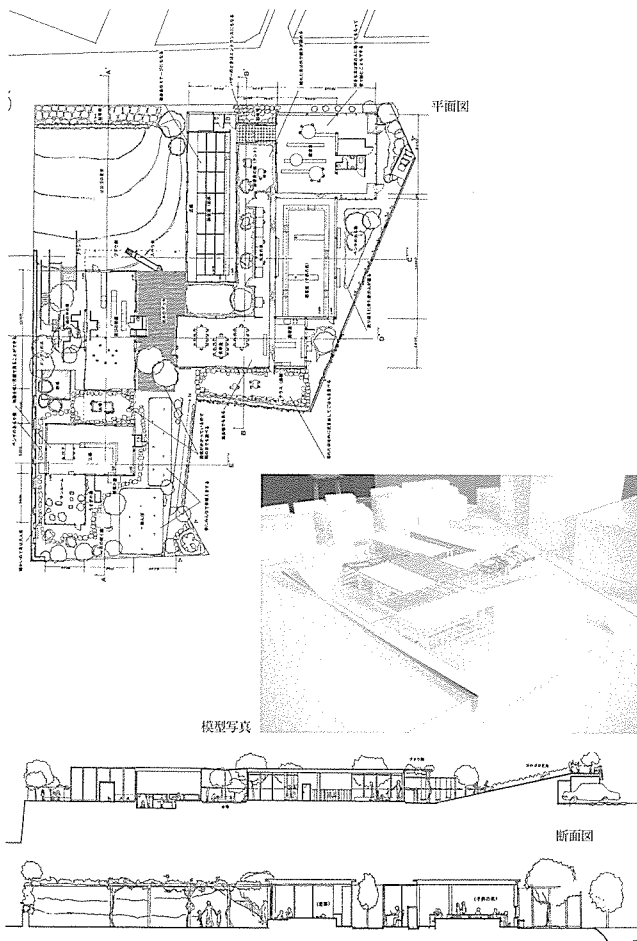
断面図

石原——敷地全体をめいっぱい使って遊び回れる保育園をつくりました。園児たちは、片流れの天井の低い家的な保育室から、敷地中へ広がる内外の区別の曖昧ないろんな世界へ飛び出していきます。まず、敷地を見渡せるような屋上庭園を自由に配置して、芝生と一体化したレベルで使われるワークスペースをつくり、現況の木々を残しながらデッキを設けることで野外散策ステージや木でできた遊具のある場所を設けました。もうひとつは、子供達が敷地の色々な所に遊びにいった帰って来ると、落ちつくことができるような大きな室の保育室をつくりました。

曾我部——スペースの考え方を、具体的に子供がどこで何をするのか、という点から考えていって、それらを積み上げていくというよりも詰め込んでいくようなやり方をしているのですが、あなたの場合それが相当具体的にイメージされていた所が非常に面白い。ただ、周辺のスペースのイメージがこのようなところで良いのか気になる。

坂本——場所の動きのようなイメージが外まで延長してきて良かったのではないと思う。図面は、書き込まれていてなかなか良いですが、少し整理するともっとよくなる。一番大事にしたい空間の連続みみたいなことを簡単に表現方法を考えるべきではないか。

「大岡山駅前幼稚園」古閑めぐみ KOGA Megumi



古閑——子供の時に何が楽しかったのかと考たとき、小川の流れを覗き込んだり、木の下にござを敷いて家をつくるなど、他の人が用意した場所ではなく自分が見つけていくような空間を覚えていました。そういった発見が子供にとって楽しいのではないかと思います、何かありそうな空間をたくさんつくり、子供たちが幼稚園の色々な場所を見つけることで、お気に入りの場所となって自分の頭の中に地図を書けるような、そんな空間のある幼稚園をつくりたいと思い設計しました。全体の構成は、機能別の部屋が広がっていく感じをイメージしており、三つの部分に囲まれているスペースが図書室の庭となっています。

曾我部——様々なことが行われるシーン、あるいは場面を集め、組み合わせることで全体を作っていくのですが、部分的な説明に終始してしまっており、プレゼンテーションが良くない。

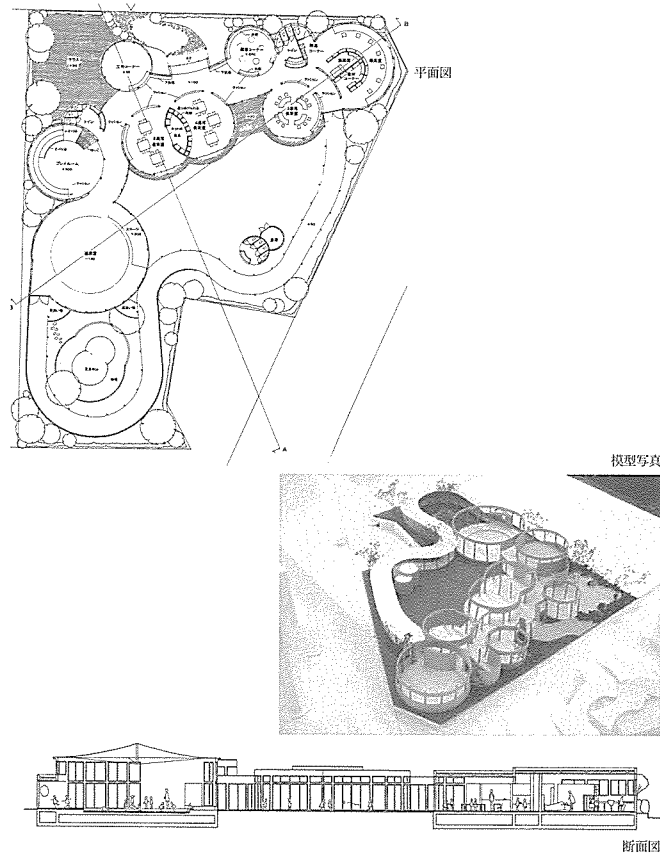
坂本——内部と外部の絡み合いみたいなものから全体をつかっていくようなやり方をしても良かったのではないかと。また、アクソメなどを使って立体関係を分かりやすく表現した方が良いでしょう。

奥山——非常に均質な作り方をしていますが、実体的な要素でそれぞれの場所を特徴を付けていった方が面白くなったのでは。



講評会風景

「ぐるぐる幼稚園」中川美香 NAKAGAWA Mika



中川——子供達が思いっきり走り廻れるサーキットのような回廊をつくり、その周りにそれぞれの機能をもった諸室が取り付くようにして全体を作りました。また、年齢別の部屋の子供しか通り抜けることが出来ないスペースを設けることで、他の年齢の子供との交流が図れるよう考慮しました。また外部空間では、塀や壁ではなく、腰壁程度のクッションのような柔らかい素材でできています。

曾我部——それぞれのスペースのイメージに対して、年齢別に部屋を区切られてしまうのが、惜しい気がする。区切られた部屋どうしを結び付けるようなことが考えられているのに分かりにくい。

【総評/曾我部】

子供の視点で建築について考えるということで、皆さん色々な水準で考えていて、その幅のありかたに個人差があって、同じような設計で悩んできた自分としては参考になり、その意味で面白かったです。また、この大学の特徴でもあるのですが、いろんな意味で物凄く個人差がある。人によっては抽象的なところから計画する人もいれば、すごくヒューマンなスケールで考えるのが得意な人もいるが、それらがバランスとれて旨くいっている人はなかなかいない。だから自分が考えている建築の面白いところと、他人が考えている建築の面白いところをどんどん加えていって、面白い建築を考えていけるようになっていくのではないかと思います。また、エスキスに対してあまり躊躇しないで、楽しむための道具だと思って、コミュニケーションをするつもりでエスキスに参加する方が良いでしょう。なぜかという、毎回のエスキスには出していないのだけれども、結構面白いことをやろうとしている人たちを見つけたからで、その人たちは物凄い損失をしているように私には思えたからです。ですから、もっと積極的にエスキスに参加すると良いと思いました。そうすれば奥行きのある、幅の広い、バランスのとれた面白いものになっていくと思うので、この後も頑張ってください。

建築設計製図第三/第2課題

Third-year studio Work: Spring Semester

「マルチ・シネマ・コンプレックス」

"Multi Cinema Complex"

担当:

小嶋一浩 [非常勤講師、シーラカンス アンド アソシエイツ]
KOJIMA Kazuhiro (Guest Professor, C+A)

坂本一成 [教授] **奥山信一** [助教授] **塚本由晴** [助教授]
SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor),
TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

寺内美紀子 [助手] **安森亮雄** [RA] **久野靖広** [TA]
TERAUCHI Mikiko (Assistant), YASUMORI Akio (Doctor Course, Reseaching assistant),
KUNO Yasuhiro (Doctor Course, Teaching assistant)

【プログラム】

- 新しいタイプの映画館。
- 日本にはまだあまりないタイプ (渋谷などにある3館くらいがひとつのビルに入っているものとは異なる)。
- 10館とかそれ以上のシアターの集合体。
- 各々の館は別々の映画を上映してもいいし、人気大作を10分おきにスタートすることで、いつ行っても待たなくていいといった使い方もできる。
- たくさんの館があることで、マイナーな映画も上映できるようになる。

【条件】

- 敷地は代々木公園内
- 延べ床面積は自由
- 最低でも全体で500人程度の席数を確保すること
- 開演時間は24時間
- 各シアターは10人用でも100人用でも可能

【設計上のテーマ】

- 劇場系の施設は、同時に多くの人々が動くので、住宅などとは異なった視点でのアクティビティの計画が必要である。(特に上演終了後はいっせいに人が外へとあふれ出す。海外では映画館の出口の扉がずらっと歩道に直接面していることも多い。火災などの避難時と同様。) 数百人がある時間をホール内で共有し通過していくということをどう設計に反映するのかを考えてほしい。
- 多くの館が集合していることと、それがいっせいに使われたり個別に使われたりすることを考えた共通スペースの計画としてほしい。
- 人が集中してパニックにならないような動線計画。
- 十分な数のトイレ
- 飲食売店あるいはバーカウンターやカフェレストラン
- グッズ売り場

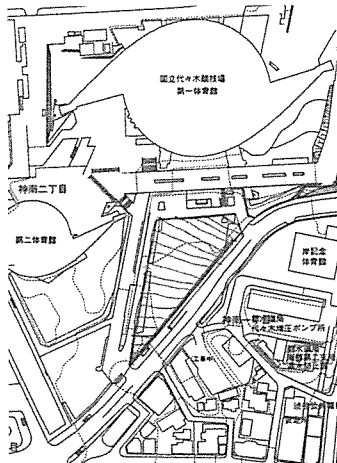
などを考慮し、快適でコンベニエントな施設とする。

【スケジュール】

- 5/25 出題、スライドレクチャー
- 6/1 エスキス1——レポートの発表「映画だけでなく、他の様々な種類のパフォーマンス(音楽、演劇、落語など)を含めて最低5つ実際に体験し、ビジュアルレポートする」
- 6/8 エスキス2——配置計画(スタディー模型、スケッチ)
- 6/15 エスキス3——模型(1/100)+スケッチ(A2数枚)
- 6/22 エスキス4——最終エスキス
- 6/29 提出
- 7/6 全体講評会

【提出物】

- 配置図(縮尺1/200)
一階平面と兼用可
- 平面図(縮尺1/200):各階
- 立面図(縮尺1/100):二面以上
- 断面図(縮尺1/100):二面以上
- 内観パースあるいは内観スケッチ:
数カット
- 設計主旨分 400字以内
(以上をA1×2~4枚にまとめる)
- 模型
(縮尺1/100、人を100人以上並べる)



敷地図



小嶋一浩

KOJIMA Kazuhiro

1958年 大阪府生まれ

1982年 京都大学工学部建築学科卒業

1986年 シーラカンスを共同で設立

1988年 同大学工学部建築学科助手

1994年~ 東京理科大学助教授

1998年 C+A(シーラカンス+アソシエイツ)に改組

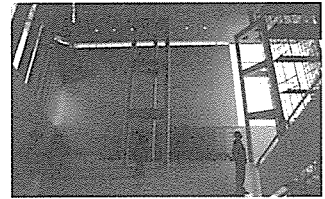
主な作品: 氷室アパートメント(1987)、HOUSE TM(1994)、千葉市立打瀬小学校(1995)、吉備高原小学校(1998)、ビッグハート出雲(2000)など

以下は、2000年6月8日[木]のスライドレクチャーにて紹介された作品の一部と7月6日[木]に行われた講評会の一部を、学生編集員(松岡里依子[M2])がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

【講師の作品紹介】



ビッグハート出雲/外観



ビッグハート出雲/内観



吉備高原小学校/外観



吉備高原小学校/内観

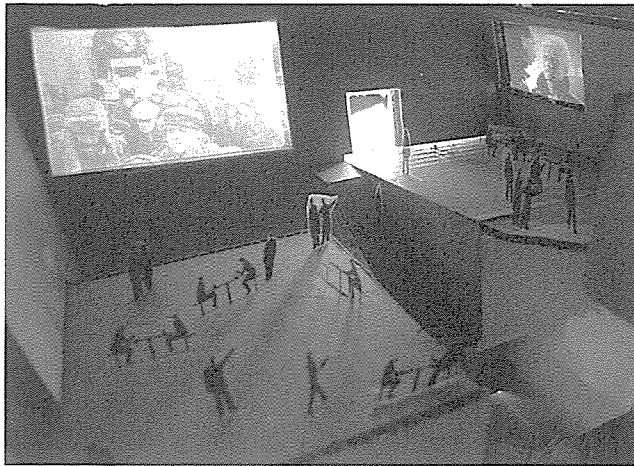
【講評会レポート】

新しいタイプの映画館というこの課題では、映画館という空間を設計するだけでなく、10館以上の映画館の集合体として、そこに人が大勢入ったときに生まれるアクティビティまでを設計するというテーマが与えられた。このテーマに対して、様々なアプローチの仕方が見られた。まず、人の流れや動きから設計を進めるもので、これには敷地全体の作り方をランドスケープ的に考え、屋上を緑化して広い空間を作り出し、人のたまりを作るものと、代々木体育館や道路、ブリッジなどの周辺要素との接続や配置から人の流れを生み出すものが見られた。これらは、10個の映画館を平面的にちりばめてそれらを結んでいく時に人の流れを作り出そうというものである。次に建物自体の構成から設計を進めるもので、映画館のヴォリュームの組み合わせによって空間を作り出すもの、複数の映画館の配列を図式的に構成するものがあった。これらは、映画館という特徴的なスケールと断面をもったヴォリュームに注目して、その組み合わせ方、隙間の使い方から全体を構成していくものである。全体的には、模型を1/100という大きなスケールで作し、人をそこにたくさん並べることで、図面では現れてこない空間の雰囲気や人の流れというものが表現できていて、講評会において自分の考えを伝えるのに役立っていたように思う。図面でそれを十分に表現しきれなかった人が多く見られたのが残念だ。

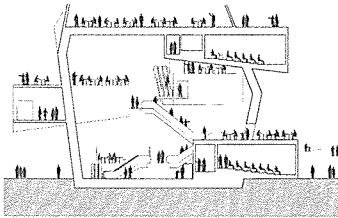


講評会風景

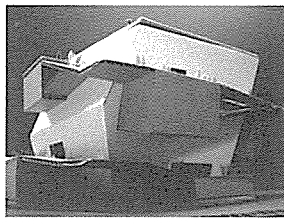
倉林貴彦 KURABAYASHI Takahiko



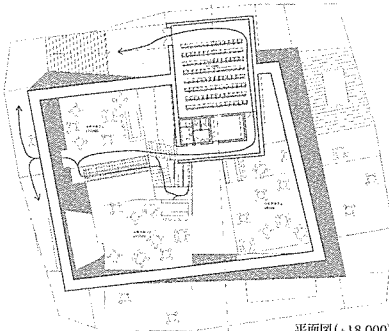
内観写真



断面図



外観写真



平面図(+18,000)



配置図

倉林——大きな殻があって、そこに映画館のボリュームが突きささり、外側にスロープが巻き付く、という構成になっています。突き刺さったボリュームの上部がシネマカフェになっていて、殻の内部では、様々な方向に映写され、来訪者たちは自分のお気に入りの映画や場所を探しながら移動し、映画を見終わったら外側のスロープに出て、映画の余韻を楽しみながら降りていきます。

奥山——現状の地形を操作しているのですか？

倉林——地形は、外側に巻き付いたスロープ状の動線にそのまま連続していき、最初の一巻き目になっています。

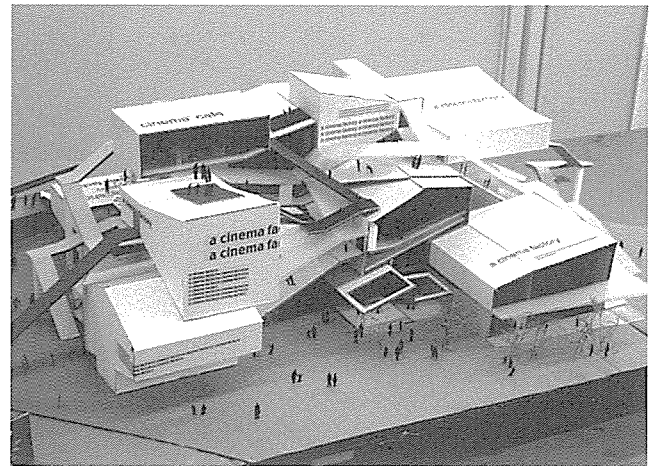
小嶋——複雑なことをやっているんだけど、粘り強くやったことで、余分な空間がなく、コンパクトに成立している。動線の考え方もスムーズでよい。

奥山——入れ子の構成の外殻をガラスでつくらずに、中のルーズな空間をもう一つの映画館としているところが、成功したポイントだと思う。

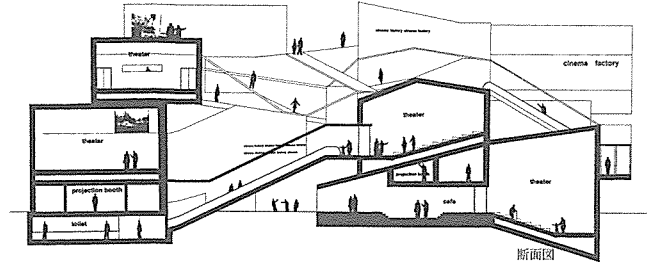
小嶋——もう少し素材のイメージを図面でも表現しよう。スケール感はいいね。特にエントランスが小さくてカッコいい。

坂本——かなり面白いと思う。形にも不思議な魅力がある。映画館のボリュームの外側も館内になっていて、それをうまく利用してシネマカフェができています。動線を外と分けているのがうまくいっているね。実際これだけのモノを突き刺したようにするのは大変だけど、全体でバランスしているから何となくリアリティーがある。

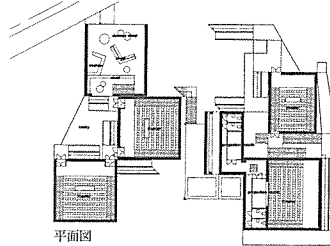
野地智美 NOJI Tomomi



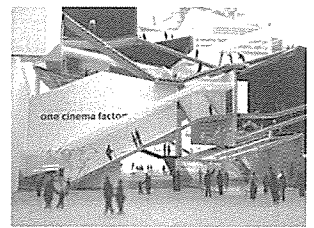
外観写真



断面図



平面図



外観写真

野地——渋谷という、ものすごく流行に左右される場所に出現する新しい建築は、外観も、使われ方も一面性だけを持つのではないと考えました。全体は映画館のヴォリュームと、非常階段やスロープ、エスカレータの組み合わせでパズルのように組み立てられています。移り変わっていく環境の中で、ヴォリューム間の隙間の空間が、フレキシブルで飽きのこない空間にしたいと思いました。

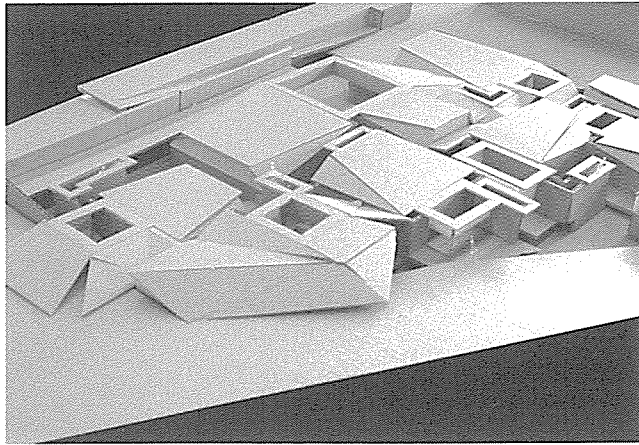
小嶋——映画館のヴォリュームの組み合わせ方を一番コンパクトに置くのではなく、ずらして置き、その隙間に偶然性みたいなものが生まれているような印象で、それが渋谷の街の気配とマッチしている。映画館を後からつけたように見えるんだけど、ビルトインしてある部分もあり、ある種の建築の力が、シネマコンプレックスと合体する有り様を示していて、すごく良い案だと思う。

坂本——ヴォリュームの配置によってどんな面白いことができるかという提案。すかすかな感じの空間だが、その中にリアリティーを持ちながら映画館という特徴的な形を利用して部分的に重ねて、全体としてかなりきわどいところで成立させている。

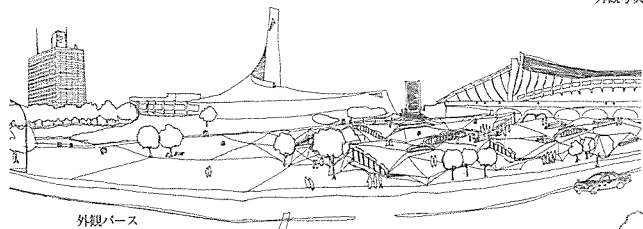
奥山——ヴォリュームだけで、スラブをいっさい使わずに設計しているところが、成功したポイントかもしれない。

小嶋——複雑なんだけど、恣意的でなく、構成の原理が可視化されている。ヒエラルキーがなく、どこからスタートしているのかわからないけど、ちゃんと全体がつながっているというところもよい。

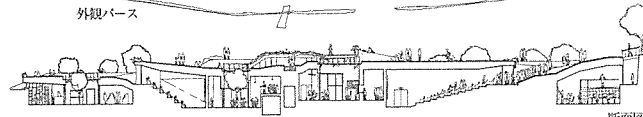
古閑めぐみ KOGA Megumi



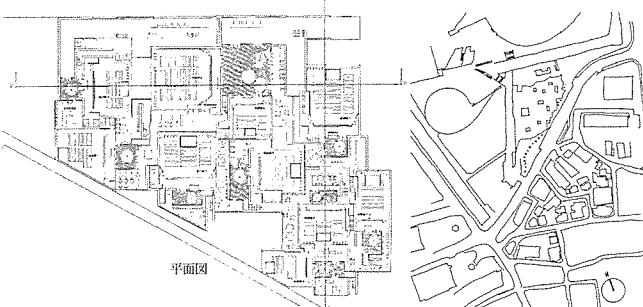
外観写真



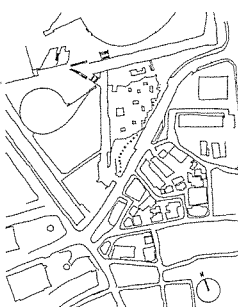
外観パース



断面図



平面図



配置図

古閑——渋谷公会堂からのびる広い空間を連続させるために、映画館を地下に埋め、屋根面の傾斜を利用して芝生で緑化されたなだらかな丘を作りました。地面には穴があいていて、そこはカフェや中庭になっています。穴からは光や情報が漏れだし、外を歩く人は何かがあるかを感じ取れます。下で映画を見て出てきた時に、上がってきて明るい、広い空間で落ち着けるような映画館です。

小嶋——やりたい事を実現させていこうとうまく処理している。屋根面の凸凹が人の大きさに対してかなり大きくなっているけど。

古閑——広さや大きさの感覚がつかめなくて、本当はもう少しならかな丘にしたかった。10個の映画館を無理矢理詰めてしまって少し窮屈になってしまいました。

奥山——中庭の穴が店と映画館で完結していて、地下では映画館同士を歩き来する事はできないね。もう少しつながっていたり、映画館のスケールがいろいろあったりしたらよかった。

塚本——平面図が分かりにくい。出口がないよ。それでは、あまり上下の動きが伝わらないね。あと、裏動線が全く考えられていない。現れ方ばかりでなく、どうしたらその空間が成立するかしっかりと考えよう。

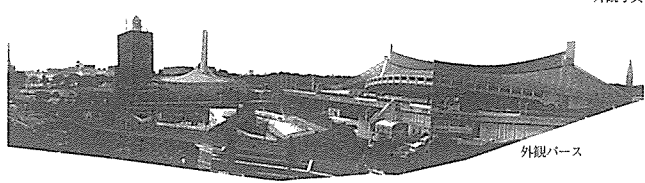
坂本——断面がとても魅力的。平面の書き方を考えていけば、裏動線についても整理していけるのでは。もったいないね。

小嶋——1/2000の配置図が一番メッセージがはっきり伝わるね。

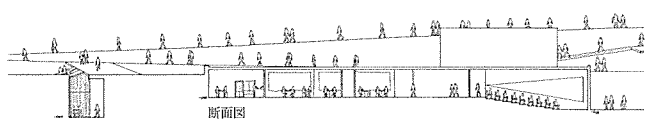
加藤万貴 KATO Maki



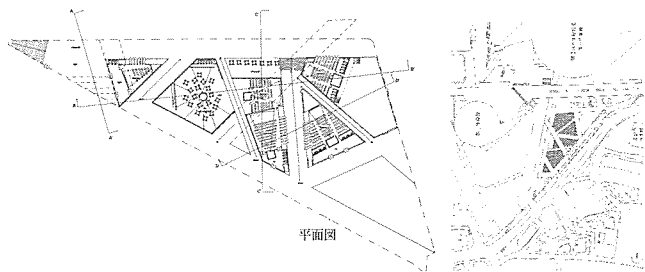
外観写真



外観パース



断面図



平面図

配置図

加藤——道と壁をたくさん用意して、ストリートライブのようにゲリラ的に壁に映画を上映します。道の作り方は、人の流れを考えて様々な場所をつなぎ、行き止まりにならないように計画しました。地下駐車場にも上映して車からも歩きながらも見えたり、カフェの四方にスクリーンがあったり、本屋と映画館が一緒になっていたりと、様々な行為を通して映画が楽しめるようになっています。

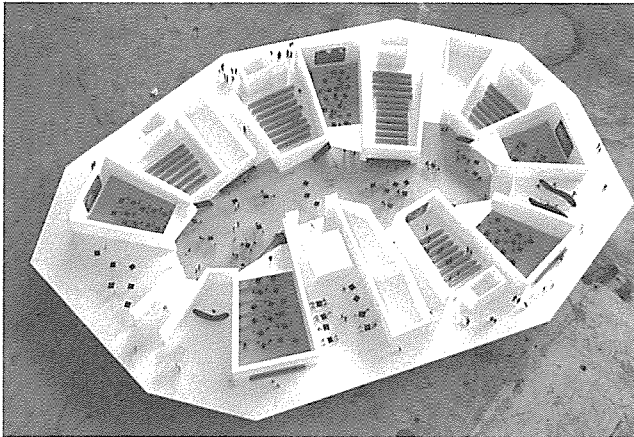
塚本——屋根の部分が空白になっている。道とほとんど同じレベルに屋根があるのに、上を歩けないのももったいないね。こういう案だったら当然表れてくる屋根の上という空間を、自分の考えの中でどう生かせるかというところまで考えた方がいい。

小嶋——基本的には地形を面で想定して、それに対して切り込みを入れていくという作り方だね。コンセプトがはじめからはっきりしている。模型では、実際にこのように集まるだろうという人の置き方を示していて、コンセプトであるストリートライブと言うのがよく伝わってくる。

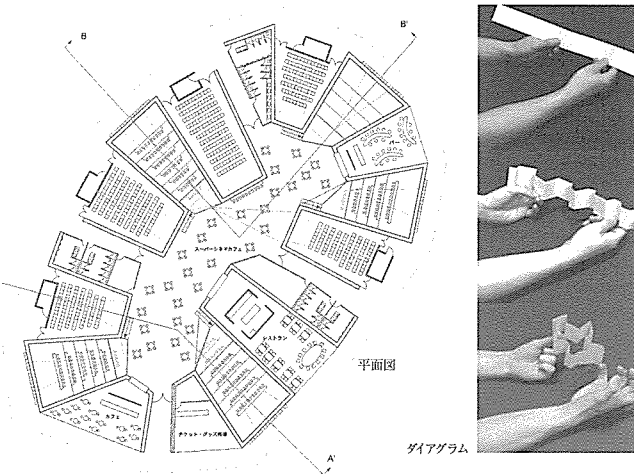
奥山——道と言っている部分がブリッジの表現になっていて、屋根との関係が切り離されているのももったいない。また、道を作るのなら敷地外の建物とも連続させると良かったね。

小嶋——作った部分はちゃんと考えているんだけど、作ってない部分は全く考えていないね。はじっこから順番に設計している。もって全体を見たり、視点を変えて見てみたら。

玉井洋一 TAMAI Youichi



内観写真



玉井—スクリーンとそれを見る人の関係に注目しました。一枚の壁を折り曲げることで、スクリーンと人が溜まる場所が同時にできます。壁がジグザグになっていて、外側に凹型の部分はふつうの映画館で、内側に凹型の部分は、全体がつながっているいろいろなところが見えるシネマカフェになっています。

小嶋—境界線の折れ曲がりだけで映画館というモノが成立するんだということだね。勾配の入れ方など、スケール感をしっかりとつかんでいる。完成度は高いが、気になるのはこの場所にある必然性が感じられないこと。構成の原理から入っているので、サイトとのフィッティングが後回しになっているのでは？

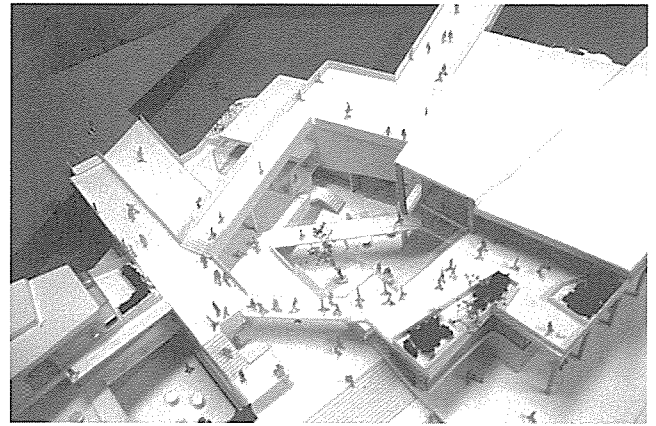
玉井—全方向性のモノがこの場所では良いと考えたので丸い形にしました。屋根も、フラットだと壁だけが強調されてしまうので、色や傾きで性格を分けて、部分から全体ができるようにしました。

奥山—シネマカフェという空間を最も真剣に考えた案といえるね。

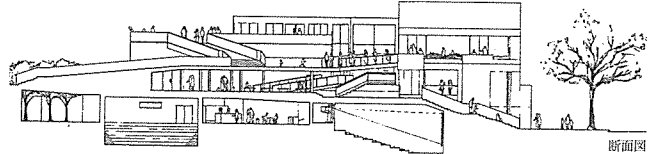
小嶋—模型はいいのに、図面の情報がプア。あなたの持っているスケールに関するセンスをスケッチでも表現できるようになるといいね。平面の構成だけでなく、断面もしっかり考えよう。

坂本—プランニングの作り方は面白い。こういう建物は、空間の作り方から考えられるけれども、一筆書き的な構成を教条的にやっていないところがよい。屋根をフラットにしまわす、分節してスケールを調整しているところで、丁寧な設計になっている。

石原奈緒 ISHIHARA Nao



外観写真



断面図

石原—まず、映画館ができることで新しい動線のつながりをつくり出したいと考え、周りのブリッジや道からの3つのレベルの道が建物の真ん中で合わるようになっています。映画館は人の流れが突然生まれたり消えたりするものなので、スロープでつないで

いろいろな場所に流れができてまた消えていくという風に作りました。

小嶋—楽しそうにできている。全体を形の中に封じ込めるのではなく、出てくるものをうまく調整しながらできあがっている。うまくたまりを作っている。

奥山—裏表のない空間がうまくつくりけている。

塚本—フォーカスを集める位置に違和感がある。軸が唐突な印象を与えている。何と一緒に考えていくかということが見失われている。

坂本—断片的な情景はよく伝わる。もう少し大きな広がりの中で見ていくと動線のつながりももっと生き生きして見えてくる。

塚本—確かな建築だね。図面や写真の表現などはなかなか味があっていいよ。

[全体講評]

小嶋—エスキスの最初の頃は、この課題に対するみんなの反応が不安だったけれども、最後に出してもらったのはそれぞれいろいろな面白い展開を見せていて、結果的には通ってきて良かった。エスキスを見ていく中で、最後の1週間でもかなりまとめた。後1週間あれば、もっと良くなったと思う。今日はまだ延びていく中での切断面という感じがするので、今日で終わりにしないで、更に展開させてまとめてほしい。

この課題は10館の映画館ということだが、大勢の人がいるということ空間にするとどうなるかということを考えてもらいたかったのだが、人がいることで生まれる空気や、アクティビティというものをかなりうまく作っているものがあって、面白かった。単に形態だけを先行させるのではなく、建築というものができたときにどういう風に現れて来るかという雰囲気みたいなものをどのように作っていくか、という事をある程度みんなで共有できたんじゃないかな。一方では、今日初めて見たようなものもあるけれど、もっと相互に話をしながら進めればもっと良かったのかもしれない。もったいない。全然相談に来なくてもこれだけできるんだから、まあいいか。

建築設計製図第三/第3課題

Third-year studio Work: Spring Semester

「エコロジカル住宅」

"Ecological house"

担当:

難波和彦 [非常勤講師、難波和彦+界工作舎]

NANBA Kazuhiko (Guest Professor, Nanba Kazuhiko+Kaikosakusya)

坂本一成 [教授] **奥山信一** [助教] **塚本由晴** [助教]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shinichi (Associate Professor),

TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

寺内美紀子 [助手] **安森亮雄** [RA] **久野靖広** [TA]

TERAUCHI Mikiko (Assistant), YASUMORI Akio (Doctor Course, Reseaching assistant),

KUNO Yasuhiro (Doctor Course, Teaching assistant)

[ゲスト・クリエイター]

曾我部昌史 [非常勤講師、みかんくみ] **藤井晴行** [助教]

それぞれが考える「エコロジカル住宅」を設計する。何をエコロジカルととらえるかは、各人が調査研究し考える。

[設計条件]

敷地: 東京近郊の住宅街にある約300mm² (90坪)の敷地

用途地域: 第1種中高層住宅専用地域、第1種高度地区

建坪率: 50%

容積率: 100%

家族構成: 祖母(76)、父(50、会社員)、母(45)、長女(20)、長男(16)

車1台分の駐車スペースを設ける。外構もデザインする。

[提出物]

配置図: 縮尺適宜

平面図: 縮尺 1/50、各階

断面図: 縮尺 1/50、2面以上

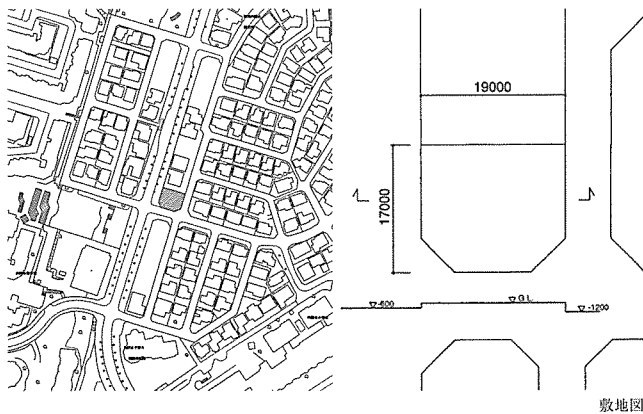
立面図: 縮尺 1/50、2面以上

透視図: 要着彩

ダイアグラムまたはシステム図: エコロジカル住宅の考え方を示すもの

以上をA13枚以内にまとめる

模型: 縮尺 1/50



難波和彦

NANBA Kazuhiko

1947年 大阪府生まれ

1969年 東京大学工学部建築学科卒業

1974年 同大学院博士課程(池辺陽研究室)修了

1977年 界工作舎設立

2000年 大阪市立大学教授

現在、東京大学、東京工業大学、早稲田大学非常勤講師

1995年「箱の家-1」で第12回吉岡賞受賞

1998年「箱の家-17」で東京建築士会住宅建築賞受賞

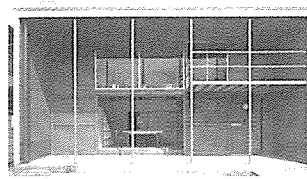
主な作品: 一連の箱の家シリーズ、アルミエコハウス

主な著書に「現代建築-空間と方法17 難波和彦」(同朋社出版)、

「現代建築の発想」(共著、丸善)、「建築的無意識」(住まいの図書

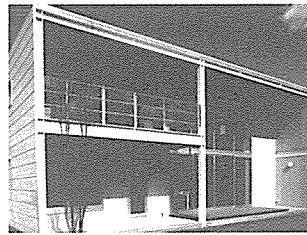
出版局)、「戦後モダニズムの極北 池辺陽試論」(彰国社)など

以下は、2000年7月11日[火]のスライドレクチャーにて紹介された作品の一部と9月5日[火]に行われた講評会の一部を、学生編集員(長谷川奈[M2])がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)



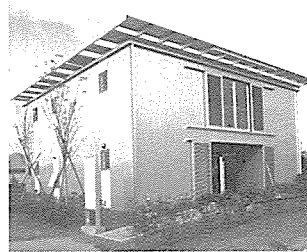
[箱の家-1]

民主的な家族、民主的な社会に向けて発せられた池辺陽、増沢洵らによる戦後の最小限住宅とはその方向こそ異なるが、家族が解体・分化した現代に、難波は再び舞台のような一室空間を提案する。本人は全くの特殊解のつもりでつくったという、ローコスト高性能住宅「箱の家」シリーズの原型。



[箱の家-22]

「箱の家」の在来木造シリーズと鉄骨造シリーズを統合したというこの住宅では、鉄骨造の構法的標準化が試みられている。床下にアクアレイヤー、床材にはフレキシブルボードを使用して断熱性能を高めるなど、エコロジーへの関心がより積極的に作品で展開され始めている。



[アルミエコハウス]

構造材だけでなく可能な限り全ての建築部材をアルミニウムで作り、さらに工期短縮、解体や再利用を考え、溶接は一切使わず部品はすべてボルトとビスで接合される。ダブルスキン屋根を始め様々なエコロジカルな試みがなされているこの住宅は「箱の家」シリーズの集大成であり、同時にプロトタイプたりうる現代のエコロジカル・ハウスといえる。

[講評会レポート]

この課題はまず、NHKで放映された番組「理想のエコロジーハウスに挑む」のビデオ上映後、それぞれが想像するエコロジーハウスについて、学生の間でディスカッションが行われた。

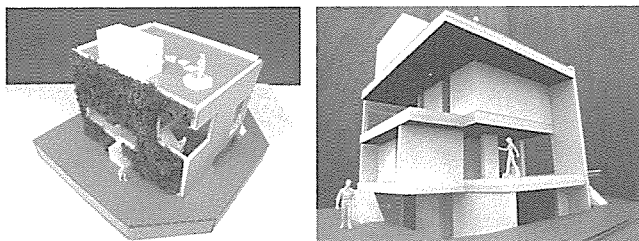


「若手建築家バトル-理想のエコロジーハウスに挑む」NHK/1999年11月6日放送
本学の塚本由晴助教や曾我部昌史非常勤講師も出演したこの番組では、3組の若手建築家がエコロジーハウスの設計を競い、それぞれ独自のアプローチを示した。(ka019にて紹介)

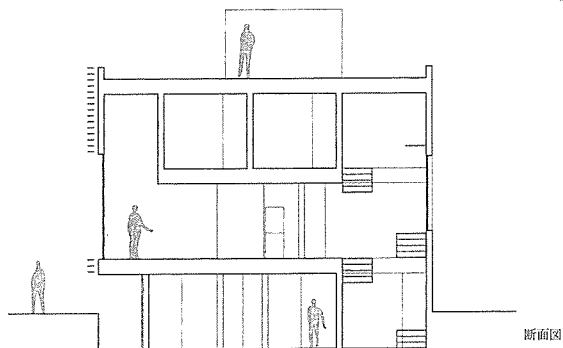
最終講評会においては、エコロジーという現代の社会的、環境的なテーマのもとで、実際に住宅を設計することが求められた。これはかなりの難題ではあるが、社会的なプレッシャーや既存のイメージにとらわれることなく、学生達が自由に、かつ積極的にエコロジーと建築を結びつけた興味深い案をいくつか見ることができた。しかし、多くの案が何らかの空間構成を先に想定し、それをエコロジーと結びつけるという、いってみれば建築をエコロジカルな言葉で説明することに終始していたようにも感じた。つまりどちらかというと建築の側からエコロジーという言葉を読み替えるようなアプローチがほとんどで、逆にエコロジーを掘り下げることからなにか新しい空間の形や作り方の提案に到達しているものは少なかったように思う。また郊外の典型的な住宅地というコンテキストを積極的に利用する案があまり見られなかったことも少し残念である。

しかし今回の課題は、光や風といった建築にとって当たり前がゆえに見落しがちな題材に学生達が意識的に目を向ける、非常に有意義なものであった。更に担当講師は東大、早大、東工大の3大学において同じテーマの課題を与えるなど、エコロジーと建築という枠組みを少しずつ強固なものにしようとする意志を感じた。

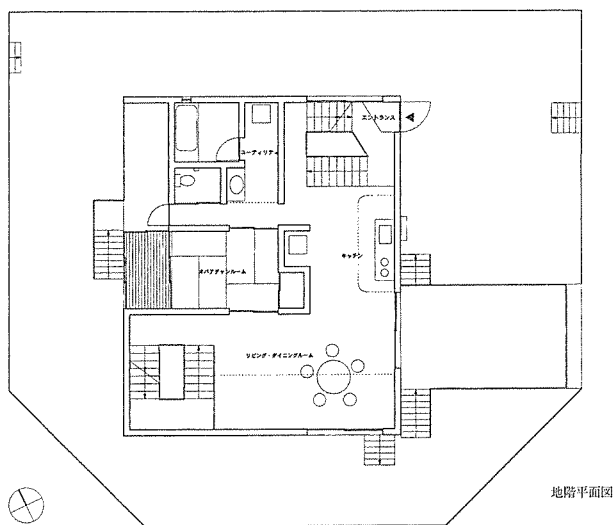
玉井洋一 TAMAI Yoichi



模型写真



断面図



地階平面図

玉井——僕はダブルスキンとかペアガラスとか隙間の空間に人が入ったら面白いな、というところからこのエコロジカル住宅を考えました。1階に夫婦、2階におばあちゃん、3階に子供の個室があるんですけど、それらの個室が一つの箱の中でいろいろとずれることでできるダブルスキンのような隙間を、みんなが集まってくる居間みたいな場所と考えました。構造的にはカンチレバーでそれぞれの個室が張り出しているの、窓のあけ方やファサードの作りかたを個室と別に考えることができます。外装も周りの環境に対応させながら、屋上を含めた5つの面それぞれでエコロジーについて考えています。

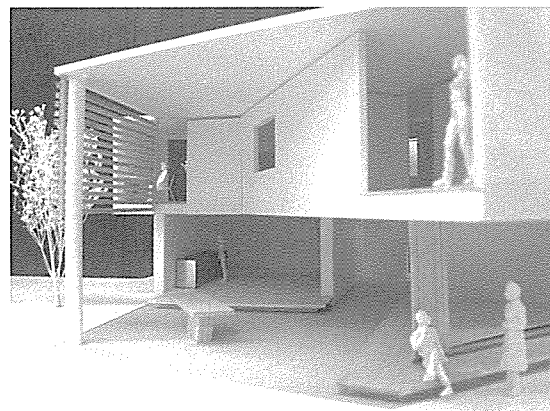
坂本——構造が厳しそうだね。

曾我部——こういうのもダブルスキンと呼んじゃっていいのかな。

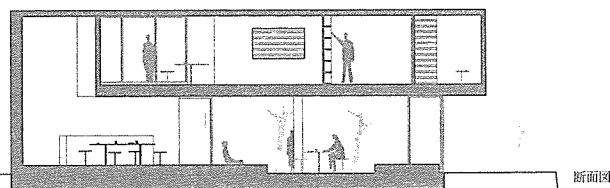
難波——でも、これはダブルスキンという概念を徹底的に空間化し、換骨奪胎することで建築のあり方を少し変えていると思う。入れ子の構成とダブルスキンの話を上手く結びつけているよね。

曾我部——外観の話も中の話も、ダブルスキンだとか外装のコントロールだとかエコロジーでよく使われる手法をつかっ、実はエコロジカルな効果はきつと得られていないだろうけど(笑)、面白い建築の状態をつくりだせているね。

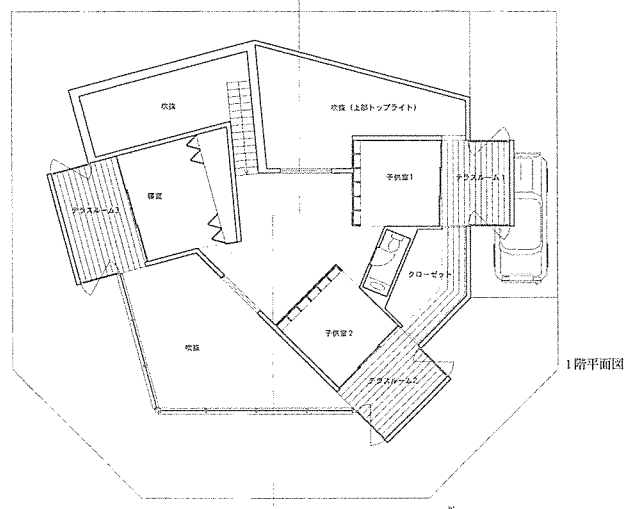
倉林貴彦 KURABAYASHI Takahiko



模型写真



断面図



1階平面図

倉林——僕は各個室に対してテラスルーム、おばあちゃんの部屋に対して縁側、LDKに対して土間といった具合に、閉じた空間と半外部的な開いた空間をペアでつくっています。こうすることで気候や気分に応じて、住人が選択的に空間の領域を使い分けられるようにして、同時に住宅の熱負荷を減らしています。

曾我部——エコロジカルな効果は怪しいなあ。

難波——だけど空間はいいと思う。

塚本——この形や開口部の取り方は周りの建物と違うよね。僕も設計するときには敷地境界線からセットバックしたり、斜線制限がそのまま現れるような形の作り方は避けるようにしているんだけど、この住宅ではどういふふうに形を決めているのかな。

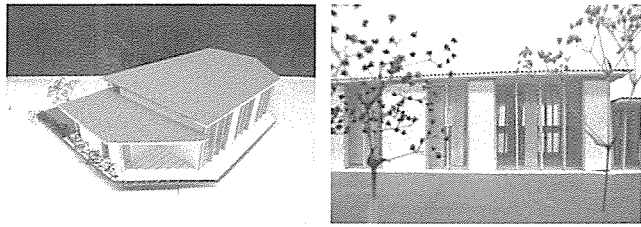
倉林——まず一般的に住宅地の建物は建ち方も、窓の方向もだいたい一緒です。この住宅では2階のいくつかの出っ張りの側面に開口をとり、さらにそれらの角度をふることによって周囲の住宅の視線をうまくすりぬけつつ、公園や並木の緑が得られるような全体の形がつけられています。

難波——今の説明にはわかには信じがたいんだけど、なんか騙されちゃう(笑)。でもそういうふう論理とセットにして形をつくることはとても重要だよ。

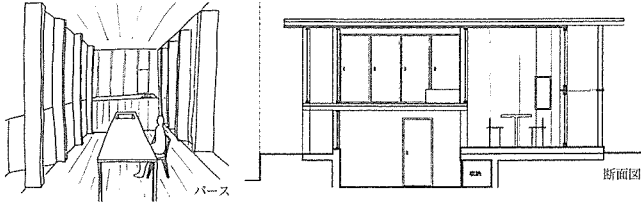
「エコジカル住宅」

"Ecological house"

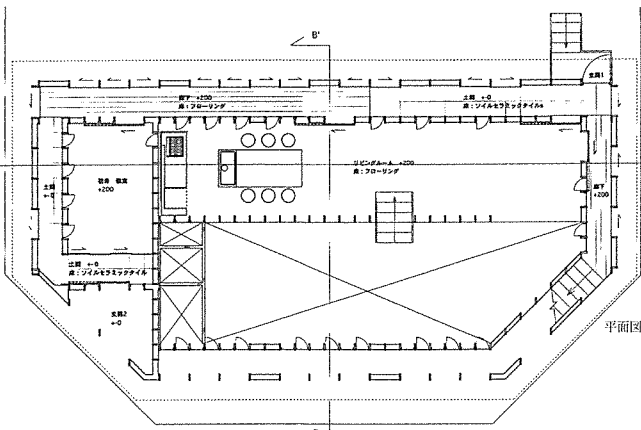
田中盛志 TANAKA Seiji



模型写真



断面図



平面図

田中——僕はまずエコロジーを熱の問題から考えて、室内の温度差が少ない土壁でできた住宅をつりました。土壁は今では職人が少なくコストがかかるためあまり使われませんが、コンパネのようなものの上から土をたたいて詰めていく版築という構法なら誰でもできると考えて、その版築を使っています。細長い40×200ミリの柱を短い間隔で立てて、その間の隙間に土壁を入れていくのですが、その場所のプライバシーや調温調湿の必要に応じて壁の量を調節しています。プランは、部屋の周りに玄関などの通路スペースにあててその両側に土壁を入れていくことで、二重壁の断熱効果を考えています。

塚本——たしか広瀬鎌二の「肆木(しむく)の家」もそうだよね。基礎もコンクリートを使わないで版築でつくっているんだけど、「いやー沈みました」って(笑)。

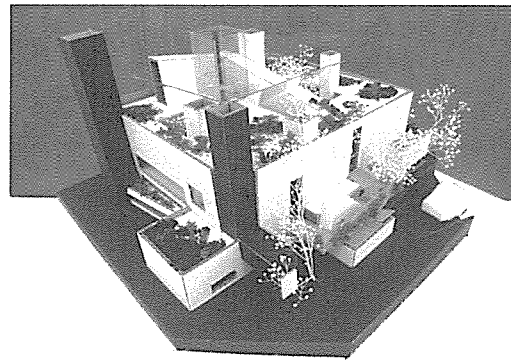
難波——構法も含めて考えて、その構法で可能な空間を考えるという発想が、僕はとてもいいと思う。

塚本——土壁をパンチングメタルで押さえる必要はあるの？

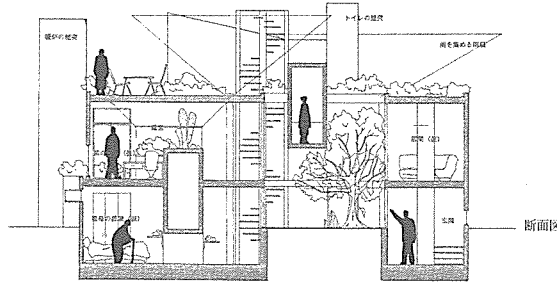
田中——そうでもないかもしれませんが、土壁はろいし、水に弱いので……。

塚本——いやそれなら雨がからないように庇をがーっと伸ばしてくるとかさ、版築にしたことによってまた次のアクションが出てくるじゃない。やりっ放しにしちゃ面白いよ。

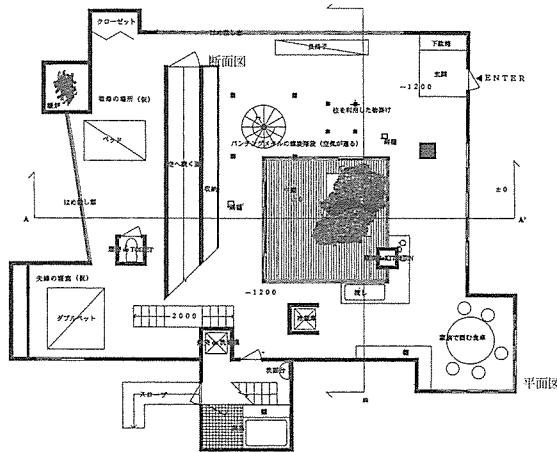
野地智美 NOJI Tomomi



模型写真



断面図



平面図

野地——この家のなかには色々な角度からみたエコジカルな生活を詰め込んでいます。考え方の基本になったのは、平面をリサイクルするということで、壁をつくらずに、煙突やヴォイド、階段室や雨樋、屋上に向かうスロープなどのいくつかのコアで部屋を区切っています。煙突で自然換気を促し、屋上を緑化してデッドスペースになりがちなスペースを楽しく利用できます。キッチンのガス台の上から煙突を出したり、それから冷蔵庫も……。

難波——廃熱を煙突で逃がすわけね(笑)。なんかいろんなアイデアがてんこ盛りになって、模型のスケールもよく分からなくなっているのが面白いよね。

曾我部——平面のリサイクルって具体的にどういうこと？

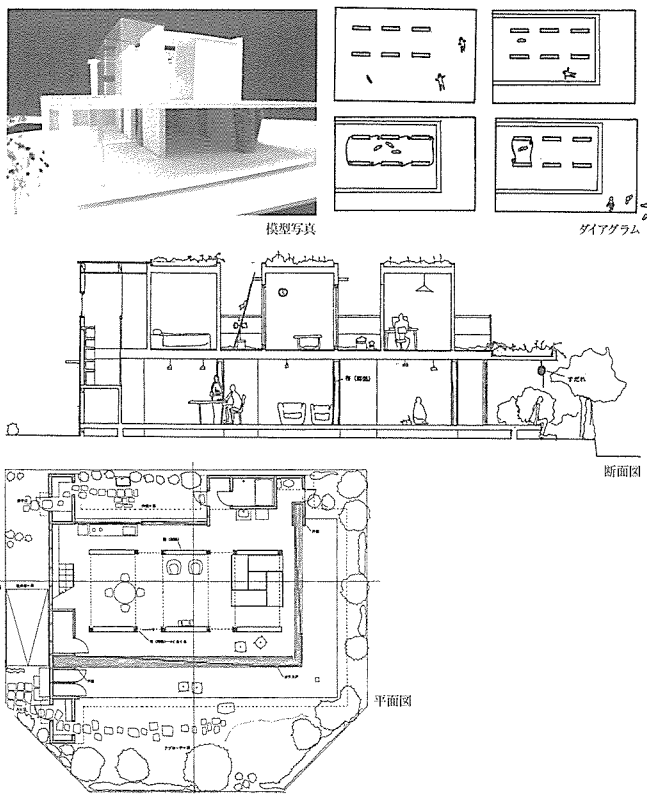
野地——壁で平面をつくらずに、そのほかの機能をもったものが壁の代わりにもなっているということです。

難波——エコの新たな定義だね。でも「エコ」って言葉はまだいろんな人がいろんな使い方しているから、あなたが「野地風エコ」を唱えたっていいんだよ。

坂本——元気あってとてもいいけど、課題の趣旨に答えられているのかな。

難波——「エゴ」かな(笑)。でもこれは力作でした。

古閑めぐみ KOGA Megumi



古閑——私は自然の気候を積極的に利用するエコロジーハウスを考えました。まず室内には壁が間隔をおきながら立っています。外との境目には完全に開けることのできるガラス戸が入っていて、床はその先の庭に向かってのびています。過ごしやすい季節にはガラス戸を開けたり閉めたりして自然換気をすることができて、夏や冬の厳しい気候の時には壁の周りを布で閉じることで断熱性を高め、その中で空調を有効に使うことができます。また空間の使い方に応じて、布による色々な閉じ方を選ぶことができます。

塚本——西側の細長い部分に住宅の最低限の要素がまとめられているとかなら、それだけ開放的なのもいいなあという気もするけど。

古閑——本当はそれさえもなくして、この開放的な部分だけにしたかったんですけど。

難波——でもこの場所に置かれることで街側に1枚壁が出てくるっていうふうに、あなたのアイデアを少しずつ周りのコンテクストになじませているわけでしょう。その時にこの案は少し不純になりかけている気がする。

塚本——きっと君のなかに定住者と移住者っていう両方のイメージがあって、建物や素材の固さの違いがその場所への定着度の違いに表れているっていうのは面白いと思う。

奥山——むしろ1階はワンルームにして、2階の個室でその布のシステムを使ったほうがいいんじゃないのかな。

塚本——これは平屋のほうがいいよ。

【総評】

難波——東大でも同じ課題を出したんですけど、東工大の学生の方が面白かったと思います。でも東大の学生はみんな自分が考えたことをよくしゃべる。東工大の人はそれがあまりできてなかった。屁理屈でもいいからとにかく論理構築する。世の中に出ると、周りからガンガン言われる訳だから、どんなことやるにしても批判に対抗するトレー

ニングをした方がいいよ。

奥山——今回は少し難しかったかもしれませんが、とてもいい課題だったと思います。エコロジーというテーマは特別なものではなくて、普段の設計の時に何気なく決めていたことを外の条件と釣り合わせて、何でそれが決まっているかを考えるいいきっかけになったと思うからです。自分の好きな空間とか形とか、そういうものを一度外側から眺めてみる、外側から説明できるようにする、そういうことはこれからも続けたいほうがいいですよ。

塚本——僕がNHKでやったときには、エコロジーってあまりよく分からなかったんだけど、ただ一つだけ分かったのは、建築家に対して社会がプレッシャーを与えているんだなってことです。柔道で相手の力を利用して投げ飛ばすように、そういうプレッシャーって自分の大きな力にすることもできると思うんだけど、エコロジーっていう言葉には今まで建築家が培ってきた社会性を変更できる力があるような気が最近にはしています。今まで信じられてきた建築の社会性とは別の社会性を打ち立てて、それを主張する役割を若い建築家は担うべきだと僕は思うんだけど、エコロジーもその社会性の問題に接続しうなって思っています。

藤井——この課題は熱、光、音などの物理的な環境と建築との接点を見つけてそれをどういう風に形にするのかというものだったと思うんです。僕はどちらかというとエンジニアリングの視点から環境共生住宅の設計をしたことがあるのですが、なかなか格好いいものができなくて、かといって格好いいものをつくろうとすると環境的にはちっともいいものができない、という経験をしています。あんまり環境について知らない人が環境共生住宅を設計するともしかすると面白いものができるんじゃないかと期待して来たら、いくつか面白い案もみられたので、非常に楽しかったです。

曾我部——今回は污水利用とかソーラーパネルとか、いわゆるエコロジカルな技術をいっぱい使った案がひとつもなかった。使うとしてもダブルスキンや植栽くらいで、いわゆる平面的な計画でエコロジーについて考えるということには僕も非常に共感を覚えるのですが、そういう案が一つもないのが少し意外でした。

寺内——私は東大の講評会を見させて頂いたんですけど、東大には設計としては面白くなくても、エコロジーに対する自分の主張を表現できていた人が多少なりともいました。東工大の人は自分の建築感、空間感にエコロジーの問題を結びつけてかたちにするのは上手なのかもしれないけど、エコロジーを深く掘り下げようとする人が一人もいませんでした。やり方によっては、エコロジーにはまるチャンスになり得たと私は思うんですけど、そういう人が一人もいないのは、ちょっと寂しい気がします。

坂本——今日はみなさん光とか風って言葉をよく使っていたけど、そんな設計では当たり前のことなんですよ。でも逆に言えばそういうことを初めて意識させてくれたとていい課題だったということですかね。ところでみなさんこういう論理だったらこういう案があるはずだ、という案に対する論理をつくってくるべきです。そのときに自分の頭の中だけで考えるのは完結してしまうからあんまり有効ではない。光や風は当たり前で、本とか先生とか自分の目とか、利用できるものは十分に利用して、なにか使える新しいものを探さないよ。もそうした探してきたものを使って何か面白い形ができるかもしれない。最初から固有の論理とか意味があるわけじゃないんです。人間ってバカだから、ある思いや論理を空間に重ねた途端にそれがとても面白く見えてきたりするんだよね。そうした戦略を練ってもらわないとこれからやっていけません。

建築設計製図第四/第1課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「都市に集合して住む」

"Living in the city together"

担当:

清田育男 [非常勤講師、清田育男計画設計工房] (本課題出題者)

SEITA Yasuo (Guest Professor, Yasuo Seita Architect Et Associates)

栗生明 [非常勤講師] **金箱温春** [非常勤講師]

KURYU Akira (Guest Professor), KANEBAKO Yoshiharu (Guest Professor)

仙田満 [教授] **井上寿** [助手]

SENDA Mitsuru (Professor), INOUE Hisashi (Assistant)

かつて東京は多くの人たちが、まちのなかで、地域のなかで、自分たちの仕事場と共存しながら、それぞれの住み方をしてきました。それは長い時間を経て形成されてきた町工場街であり、商店街であり、住宅街でした。しかし、バブルという社会現象から、それまでに形成され、保たれてきたまちのバランスや地域性などが壊され、住む場所を失った人々は街を離れていきました。

都市の効率性・多様性の中で忙しく仕事をする人たちは、都市に住みたいという希望は多く、都市にすむことの重要性は、これからますます高まっています。

都市は休むことなく日々刻々と変わっていますが、現時点の東京を見るとき、その場所の特性に合った住居場所を見つけることができます。その場所に合った住み方も見つけることができます。その場所を積極的に見つけ、その場所に適した人たちのふさわしい住み方、集まって住むのにふさわしい住家を考え、つくるのが本課題です。

【計画敷地例】

- 駅に住む (JR 御茶ノ水駅付近)
- 水辺に住む (JR 飯田橋駅より外堀に面して)
- 商店街に棲む (原宿竹下通り沿い東郷神社境内)
- 同潤会アパートと共棲する (青山アパート他)
- 廃校を利用して棲む (中央区明石二中跡地)
- ビル再開発地に棲む (新宿南口人工地盤の上)
- 臨海に棲む (芝浦アイランドの水辺)

【提出物】

計画趣旨及び計画の説明 (ダイアグラムで表現)、模型、スケッチパース、配置図、平面図、断面図、立面図 (図面スケールは自由、用紙はA1サイズ)



清田育男
SEITA Yasuo

1933年 神奈川県生まれ

1957年 東京工業大学建築学科卒業

1957-69年 坂倉準三建築研究所

1969-76年 (株)坂倉建築研究所 (74-76 同所取締役)

1976-81年 (株)TRIAD 建築設計事務所代表取締役

1981年- 清田育男計画設計工房設立

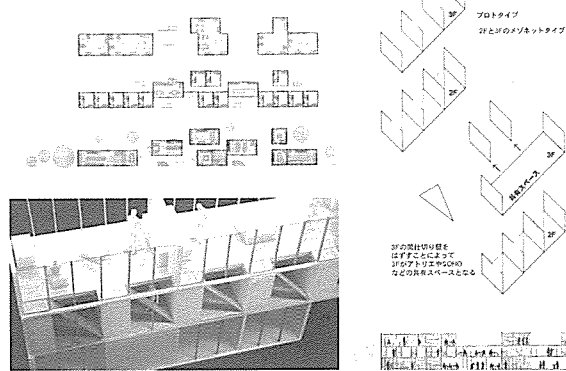
ピラ・セレーナやピラ・フレスカなどの都市型集合住宅やガーデン国立、ガーデン目黒などの都市型低層集合住宅を手がける。

作品: コートハウス八雲、ロイヤルピラ・熱海等

著書: 「都市型集合住宅」(井上書院)

以下は、2000年11月20日に行われた講評会の一部を学生編集員(内山森、末光真一、林孝裕、太田真未[M2])がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

高橋勇貴 TAKAHASHI Yuki



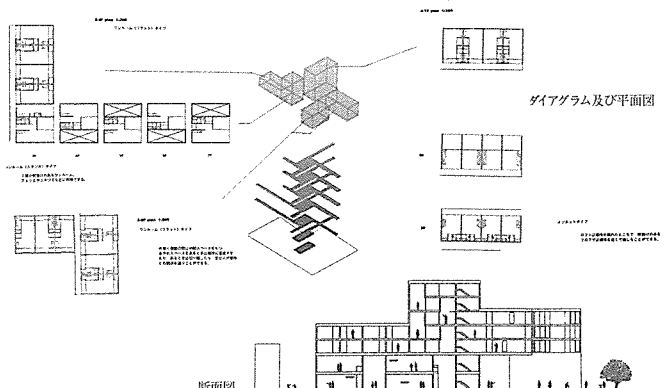
高橋——場所は表参道から一本路地に入ったところなんですけど、路地のところに住居等が混在していて、若い人がこういうところに住んだり店を持ったりするといいなと思って、そのために家賃とかは安くなきゃいけないと思って。そのために1階部分は店舗なんですけど、2階部分は居室になっており、居室は最小限のものにしたのですが、狭くしたのは、若い人はあんまり住宅とかには執着がないんじゃないかなと思ったからです。それよりも例えばソーホーなどをもちたい人にとってはそういうスペースがあった方が良くないかな、と思ったんです。3階部分は、2階と3階メゾネットなんですけど、例えば建築家だったら建築家2人で住んで、共同のアトリエを持って、自分から住む場所を広く使ったり、壁の間仕切りで色々変えたり出来るようにしました。

清田——住むところと共有のところと二つの領域を作って、住むところは個人の領域で、それで個人と共有のあり方を考えるというテーマで作っているね。1階にお店、こちら側にもお店、というようにね。

栗生——1階部分が配置図を兼用して描いていると思うんだけど、その辺の描き込みがもっと欲しいよね。建物を建てるということは同時に外部も一緒に設計するという事だから、ポジネガの関係になるでしょ。だからそれだけポンとこう敷地の輪郭で敷地の内部だけ描くと、やっぱりネガが見えてこないんだよね。だから道路の反対側がどのような壁なのか、大きい空間なのか、住居が並んでいるのか、情報として欲しい。その時初めてあの空間がどんな風に生きてくるのか分かるしね。敷地内から見た時に相手の道路を挟んだ向こう側が樹木なのか板塀なのか万年塀なのかお店があるのかによって空間の作り方は変えていかないとね。

清田——住宅と1階の店舗部分というのは今はつながりがないんだから、その違いがやはり出ていた方がいい。

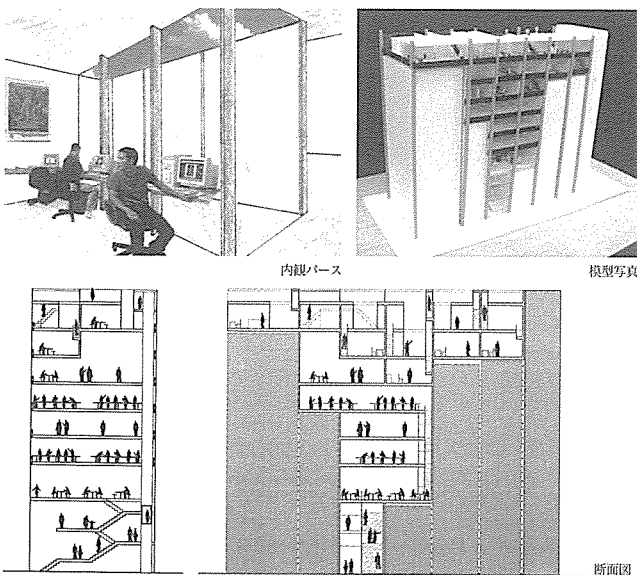
田窪亮子 TAKUBO Akiko



田窪——私は地下鉄の表参道駅から出た表参道沿いの敷地に建てました。ここは商業地域なので、表参道の土地の感じから、若い人が单身とか二人で住む住宅を考えました。で、三種類から成っているんですが、一つはワンルームのフラットもので、あとは2層分の吹き抜けを持つワンルームとメゾネットタイプを考えました。ワンルームのものは、廊下と外部の間に共有スペースを設けて、間にある引き戸を開閉することで、ワンルームをさまざまな形で使えるんじゃないかと考えました。さらに、2層分吹き抜けのワンルームは互い違いに合わさっているのですが、そうすることで、吹き抜けのあるワンルームが、普通のフラットのものよりもさまざまな形で使えるのではないかと考えました。あとはメゾネットタイプでも少し広い床が欲しい人にも住んでもらえるようなものを作りました。この通りがすごく狭いので、1階と2階には表参道と原宿の若い人達向けのさまざまなお店をいれ、人の流れが1階と2階の間に入ってくるような形になっています。その上に住宅が入るような建物になっています。

栗生——道路だけでなく隣地と接するところがあるでしょ、隣地と接するところは隣の家がそのままのりに見えちゃっているんですか。やっぱり商業施設としての環境を考えるとその境界部分が重要だね。だから1階まわり店舗がアイランド型に独立してるんだけどその隙間のデザインというか外部空間のデザインというのをもう少し上手く表現した方がいいと思う。空間としてはなかなか面白くなっていると思うんだよね。

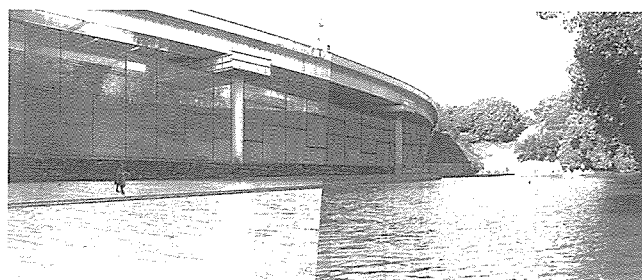
田中盛志 TANAKA Seiji



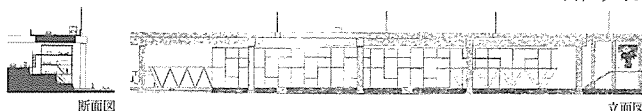
田中——僕は渋谷のビルの上空の空いた容積を利用して建物を建てようと考えました。まず最初に都市に集まって住むということを聞いて、都市に住むということは、まずその都市に既にある建物の中に建てるということになるので、その都市の建物をどういう風に捉えるかという風にして考えていきました。このビルっていうのは、容積率が700%あるんですけど、それをいっぱい建てるってところというのは意外に少なく、ビルのスカイラインもガタガタになっているので、それを解消するように、ビルの余白に建物を建てるっていうのを計画しました。一番上空の環境のいいところにソーホーを持ってきて、二番目のところに、そのソーホーに住む人達が、自分達の中だけでは出来ない活動をするコモンオフィスという空間を設けて、一番下の階は、結構人通りが多いところなので、階段状になって上がっていくような、ショップフロアにしました。建物は、全て上に開きたかったんで、全ての建物に光の庭があり、全

ての建物の住戸が一番上に接しているというかたちで考えました。
清田——隣の街区もきっと同じようなことになるんだけど、そこには空中で発展していくようなシステムもあっていいと思う。だからこういうところに共用スペースが中に入り込んでいるようなね。
栗生——先週、東京ガスのコンベでね、「空き地のデバイス」で審査で、似たような案があったんです。つまり容積を十分に使い切っていないところを使っていくという。つまりそのアイデアだね。その考え方は非常に面白いと思うし、よく考えてあると思うんですね。仕組みとして隣のビルやもう一つ先のブロックをつなげていくと都市の顔がどんどん変わってって、既存のものは既存のものとしてありながら、余っているところはもっと有効利用される、ということで、なかなか面白い案だと思うんだよね。

益谷哲郎 MASUTANI Tetsuro



フォトコラージュ



断面図

立面図

益谷——僕は、都心に今も残る江戸時代の遺構を取り出した、外堀について考えて見ました。それで僕が、外堀を歩いて、実際一番魅力的に映ったのが弁慶堀というところで、この弁慶堀に集合住宅を建ててみようと思ったのは、この辺りには普通の人が住むような住居や、泊まる施設というようなものがなくて、常にそこに滞在している人が少ないと思うんです。ホテルがあつて迎賓館があつて、というすごい大きな規模の中にそういう個人のスケールが入り込むことで、何か都心にいながらもこう都市の喧噪と隔離されたような空間がそこにあると思ひ、そこに芸術家やクリエイターが住む集合住宅を考えました。その時に、堀端であるために、石垣が段々になって今も残っているんですけども、その石垣を上手く利用して、その空間のレベル差をつけたり、石垣が切り立っているところではその壁を利用してアトリエやギャラリーにしました。

清田——これは細長い川と高速道路に住宅を組み合わせるといことがあって、クリエイターの施設で、場所柄からそういう住まい方、居住像を考えたいわけね。

金箱——ちょっと気になるのはさっき遊歩道のね、住む人だけでなくそこを歩いてくる人のためにも計画するって言うてたんだけど、その断面について一番低いレベルが遊歩道なんでしょ？住んでる人の窓のすぐ外に散歩している人が歩いてくるわけ？

益谷——一応少しレベル差が1.6メートルくらい下がっていて、そういう配慮はしてあるんですけど、あまり住む人のための掘ってというのは考えたくなくて、住む人のための掘だったら一般の人を入れないようにすれば一番いいと思うんですが、やっぱりそこに住むからには、堀に集まってくる人達の視線はしょうがないものとして覚悟すべきだと思うし、そういう姿勢がないと堀に対しても開いていけないと思うんで。

仙田——もう少しパースも説明がつけば、面白いんだけど。

建築設計製図第四/第1課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「マイタウンカルテ——私の街の処方箋——」

"My town Karte"

担当:

栗生明 [非常勤講師、千葉大学教授] (本課題出題者)

KURYU Akira (Guest Professor, Professor / Chiba University)

清田育男 [非常勤講師] **金箱温春** [非常勤講師]

SEITA Yasuo (Guest Professor), KANEBAKO Yoshiharu (Guest Professor)

仙田満 [教授] **井上寿** [助手]

SENDA Mitsuru (Professor), INOUE Hisashi (Assistant)

世紀末に合わせたように社会全体に閉塞感が漂う昨今ですが、私たちの身の回りを見渡してみても、高齢化・少子化・環境悪化・商店街の地盤沈下……など、大都市には大都市固有の、地方都市には地方都市固有の問題を多く抱えています。あなとの住んでいる街や、あなたの生活する身近なところにも昔から解決できずに懸案になっている事や、最近生じた問題点などが必ずあると思います。

そこで、この課題では、

- ①あなたの街の健康診断をしてください。
- ②あなたの街の悪いところを的確に診断してください。
- ③あなたの街を元気にする処方箋を書いてください。

具体的には、あなたの提案が意図にふさわしい実存する地域(敷地)を選定し、ハード・ソフトの実現可能な「建築プロジェクト」として提案してください。

提案された作品のそれぞれが、街や地域の抱えている問題を解決するための起爆剤になるような提案を期待します。

[設計条件]

敷地: 提案に最もふさわしい実在の敷地を設定し、応募図面の中に敷地現況が判るように地図・写真等で説明すること。

建物の規模・内容: 特に問わない。

構造・階数・設備: 自由とする。

法規: 常識の範囲内で遵守すること。

[提出物]

設計趣旨(文章・ダイアグラムで簡潔に)、配置図、平面図、断面図(いずれも縮尺は自由)、その他(パース・模型写真等)をA1、1枚横使いにまとめる。



栗生明

KURYU Akira

1947年生まれ

学歴:

早稲田大学工学部建築科1971、早稲田大学大学院工学研究科

1973工学修士

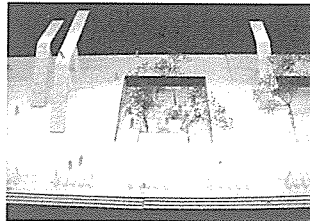
職歴:

楨総合計画事務所、(株)栗生総合計画、1992千葉大学都市環境建築計画講座建築・都市デザイン教育研究分野教授

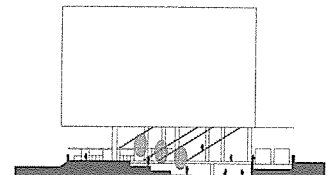
設計作品: 伊丹市地下めいそう空間(公共施設)、信州博覧会建設省ミュージアム(博覧会施設)、植村直己冒険館(公共施設)、群馬県営相生住宅一期(公共住宅)、コアやまくに(公共施設)、岡崎市美術館博物館(公共施設)、パトリ+清里フォトアートミュージアム(複合施設)、平等院鳳翔館

以下は、2000年11月20日に行われた講評会の一部を学生編集員(内山森、末光真一、林孝裕、太田真未[M2])がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

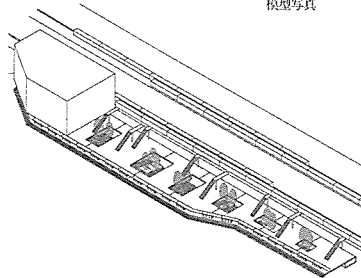
加藤万貴 KATO Maki



模型写真



断面図



アックスノトリック

加藤——私は藤沢市のそばに住んでいるのですが、ホームにいる時楽しくないので、そこを改善したいと思いました。線路に対して色々な建物が壁を作ってしまうと、結果的に、線路が街を分断してしまう形になっているので、それを崩せればと考えました。計画としては、今一番北側の部分にある湘南ライナー専用ホームを拡張して、穴を開けて木を植えたり、ホームの下に図書館やカフェを計画し、さらにルミネの下に花屋を移転させたりということを考えました。ホーム全体に自動改札があって、あと連絡通路もさまざまところに設けて、通路に対して直角な動線を作りました。

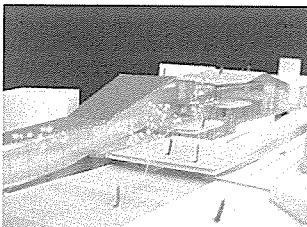
栗生——ホームが拡張されて、そのまま公園になる。そのホームの下に図書スペースがあったり、お花屋さんがあったり、というそういう考えは面白いけど、イメージが伝わりにくい。これだけ大きくなくても、もうすこし小さくても良いんじゃないかな、線路との関係とホームに出たらすぐ公園になるんだよという関係を明確に表さなければいけないと思う。

栗生——ここに入る人はキップを持っていないと入れないんでしょ。だから自動改札と同時に券売機がところどころに欲しい感じでしょ。少しやり過ぎだけど、どこからでも切符を買えてどこからも入れる。自動改札の所を通って中に入って、そしてその中は公園化している。通勤通学の帰りにここで一休みしたり、電車の乗り継ぎの人がここに立ち寄って買い物したりするスペースとして考えたのは良いんじゃないかな。

仙田——課題の設定は非常に良いのですが、提案が上げすぎる気がします。期待される効果も疑問です。全部自動改札が良いのかな。そこまですなくてもいいんじゃないかという気がします。階段も多すぎますね。

栗生——なかなか大胆でいいんじゃないでしょうか。今度は緻密に物事を考えることも必要だね。

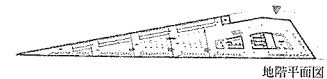
山口健児 YAMAGUCHI Kenji



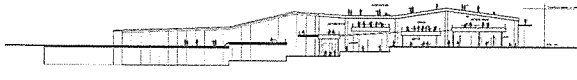
模型写真



1階平面図



地階平面図



断面図

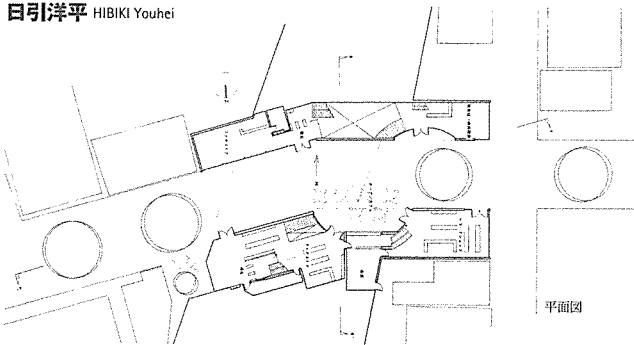
山口—僕は前回の中間講評会の時に、700メートルの長い線路の上にデッキを作ろうという案をやりました。新しいコミュニケーションを作り出す装置として市民大学のキャンパスを作ろうという案は変わりありません。それで、元々は線路がGLレベルでずっと走っているんですけど、それを踏切を渡ってから、一層分落ちるようにしました。

清田—これを作ることで何を直そうと、病気がなにで何を直そうとしたのかな？ 活性化しようというのはわかるのだけど、ここでこの施設をつくった、病気とその治療法は？ やはり、きちんと動線をつかって、広場と一体化するというの大きな一つのテーマとしてあるのだと思うけど……。

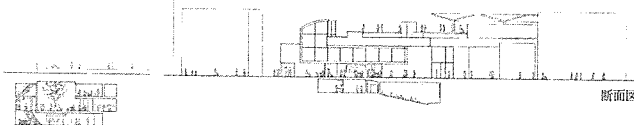
栗生—わざわざ鉄道を下げてつくった広場が、図面ではかなり希薄な単なる外部空間としてしか見えないのはちょっと残念ですね。春日部のトヨカベ地区のどんどこが問題で、その解決法としてこういう処方箋を作りましたという説明をしてください。

山口—この地域は、今はどんどん住宅も建ってきていて、人はたくさん増えてきているのに、街で生活をするという人があまりいないために、うまく活性化されていないということが問題点です。それで、いろんな世代やいろんなアイデンティティーとかいろんな背景を持った人が新たに知り合いになれるようなところをつくろうというのが処方箋です。それを生み出す装置として、近隣大学のやっているような公開市民講座をこの場所ですべてまとめてやらせようというプロジェクトを考えました。それで新たな出会い場所を作れると思いました。

日引洋平 HIBIKI Youhei



平面図



断面図

日引—選んだ敷地は自由が丘の九品仏緑道のところで途中まではきれいな店があったり、デパートとかがあるのですが、高架下のところまでいったときに前とは違って暗い場所で、ここが緑道の流れを遮断しているところになっていると考え、ここを設計しました。問題点としては、流れを遮断していること、高架下が暗いこと、高架下自体に自転車がたくさんあって汚い場所になっていること、などがありますが、ここをきちんときれいにして高架下のボリュームが全体的につながるようにデザインしました。機能としては、高架下という暗い場所を逆に利用できるのではないかと思います、そこに映画を映して、さらにカフェを計画することで、結構人が集まって良いかなと考えています。いままで暗かった場所が、明るくなって楽しい空間になればと思います。

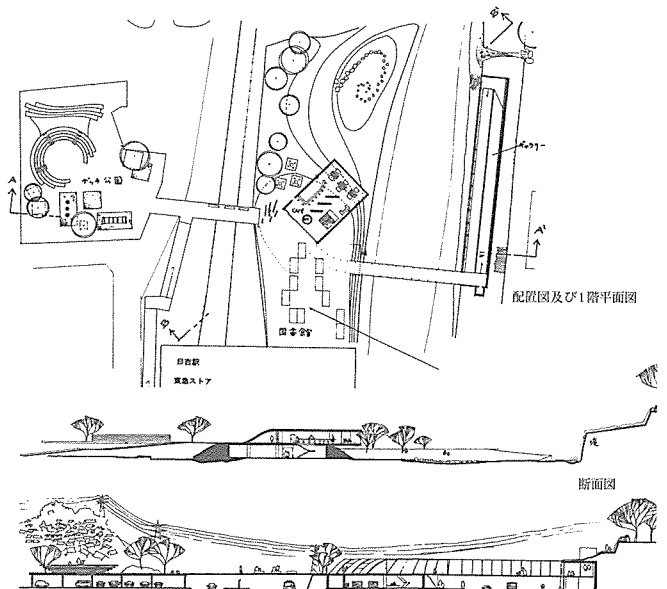
栗生—自由が丘の桜通りというのかな、ほとんど車が通らない通りと

東横線とクロスする通りに仕掛けを作ろうということだね。だいぶ最近人気が出てきたけど、あそこのガードのところは、殺風景であまり良くない。街並みを繋げるためにあそこに色々な仕掛けをしたり、ホームからおりてくる仕掛けも同時に作ろうということだね。ホームの真下にシアターまで持ち込んで、かなり立体的な複合商業施設と駅の改札というものを併せた施設。ちょうどかな折れになっているところの壁面を利用して映像を投影している。いろいろアイデアが盛りだくさんでなかなか面白いと思う。

仙田—あなたの提案で映像というか映画館、シネマを入れる。その予告編みたいなものが高架下の暗い空間を使ってやるというのが、コンセプトとして大変面白いと思うのですが。

清田—割と現実性のある提案だね。やろうと思ったら出来る案だね。治療の仕方がわりとはっきりしていて割に現実的だね、まあ、どの視点で考えるかは分からないけど。

アンドレイ・M・ステファナ ANDREI M.Stefana



配置図及び1階平面図

断面図

ステファナ—選んだ場所は日吉で、私が住んでいるところなんですけど、日吉の一番大きな問題点は分断されているということです。分断は物理的で、線路とか道、慶応大学のとても高い壁などです。そこで、分断されているところをつなげようと思いました。ただ歩道橋を渡すだけではなくて、その歩道橋に違う機能を付け加えようと思いました。大学と住宅地の交差というところを考えたときに、そこには入って欲しいものは、図書館と公園だと思いました。公園は日吉にはあまりないし、図書館は慶応大学にはあるのですが、誰でも使えるものではないので、日吉には町の図書館がありません。そして、案を考えたときにその3つ関係をいろいろとバリエーションさせて、いろいろあり方を考えました。

栗生—最初にね、さっき説明があったけれど、この場所の東横線が地域を分断しているのでしょ。その説明の順序と図面の順序が違うので誤解します。パーク、ライブラリー、ペDESTリアンブリッジというのは提案であって、実際の現状をちゃんと絵で表現してあげてはいけない。このあたりの具体的な問題点を先に書いてあげて、それに対してこういう答えを出しましたという、手順で説明したほうがいいよ。図面がちょっと粗雑ですねでもいろいろところでいろいろ提案をしていて馬力があって良いなと思うよ。

仙田—図書館の部分全部地下にするのじゃなくて、もう少し開放的にした方が良かったのではないだろうか。

建築設計製図第四/第1課題

Second-year studio Work: Autumn Semester

「夢の島公園の中に建つ多目的スポーツ施設」

"Multifunctional sports center in YUMENOSHIMA park"

担当:

金箱温春 [非常勤講師、金箱構造設計事務所] (本課題出題者)

KANEBAKO Yoshiharu (Guest Professor, Kanebako Structural Engineers)

清田育男 [非常勤講師] **粟生明** [非常勤講師]

SEITA Yasuo (Guest Professor), KURYU Akira (Guest Professor)

仙田満 [教授] **井上寿** [助手]

SENDA Mitsuru (Professor), INOUE Hisashi (Assistant)

夢の島はごみを埋め立てて出来た人工島であり、ここには1976年に完成した東京都の総合体育館が建てられている。しかし、完成当時と今日では周辺環境が大きく変化しており、今日ではさまざまなスポーツエリアを持つ緑豊かな公園として賑わっている。このような環境の変化を見据え、単独スポーツ施設として機能するだけでなく、公園の中心施設としての機能も果たす多目的スポーツ施設を計画する。

計画に当たって、既存の建物の扱いは自由とするが、屋外のスポーツエリアやランドスケープは現状の構成を維持するものとする。

本課題のもう一つの意義は、建築デザインとともに構造デザインを同時に意識し計画を進めるということである。構造計画を意識しない建築計画というのは本来はありえないが、特に大空間建築ではそれらの密接な関係が重要である。構造デザインとは、材料や架構の構成を工夫し、力学的な整合性を確保するとともに、それぞれの建築デザインに適合したシステムを創り出していく個別的なものでもある。建築と構造の関係を再認識することから新たな空間や架構を生み出すことも可能であり、本課題では積極的にこの試みを行う。

[設計条件]

計画敷地: 夢の島公園内に自由に設定する。

施設規模・内容: 自由。

但しメインの施設として4000m²以上のスポーツ空間を含める。

[提出物]

配置図(1/500)、各階平面図(1/300)、立面図(1/300)2面以上、断面図(1/300)2面以上、説明文、パース、構造模型



金箱温春

KANEBAKO Yoshiharu

1953年 長野県生まれ

1975年 東京工業大学工学部建築学科卒業

1977年 同大学院修了。横山建築構造設計事務所入社

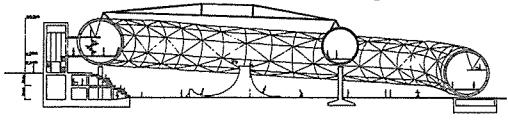
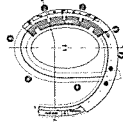
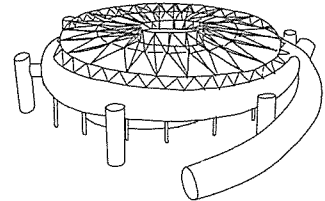
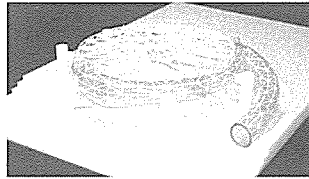
1992年 金箱建築構造設計事務所設立

1998年 日本建築構造技術者協会賞受賞

主な作品: 京都駅ビル、新京橋交流プラザ、ふれあいセンターいずみ、遊水館、湯博物館、広島市立基町高校

以下は、2000年11月20日に行われた講評会の一部を学生編集員(内山森、末光真一、林孝裕、太田真未[M2])がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

阿瀬真由香 ASE Mayuka



阿瀬—広場の奥にあいた入口からチューブ状の通路が始まります。眼下左右に屋内外のスケートリンクを見ながらまっすぐ進んでいくと突然視界が開けて海が見えます。それからチューブはカーブしながらゆっくりとリンクを取り囲むように下っていきます。観客席以外にも屋外リンクとチューブ内からその様子を見られるようになっています。

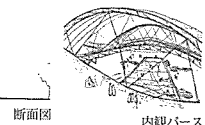
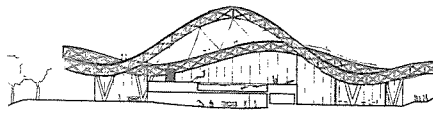
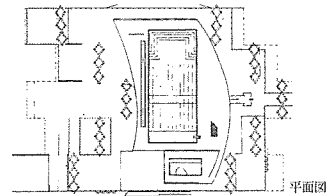
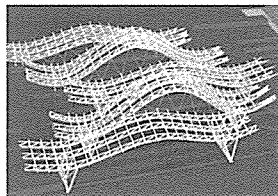
金箱—構造の説明をしてください。

阿瀬—渦状のチューブは細い柱で支えられていますが、がっしりとつくられた7本の階段、エレベータ室がチューブの外側に取り付け、施設の縦動線をつくるとともに、チューブの揺れを防いでいます。

金箱—水平力の抵抗要素を配したのは良いアイデアです。屋根の架構はどうなってるの?

阿瀬—屋根は長軸70m、短軸52mの大屋根で、花をモチーフにしたトラス組です。上部がアーチ、下部はその開きを止める引張材になっています。このような自己釣り合い型にすることで、チューブにかかる負担が少なくなっています。

古閑めぐみ KOGA Megumi



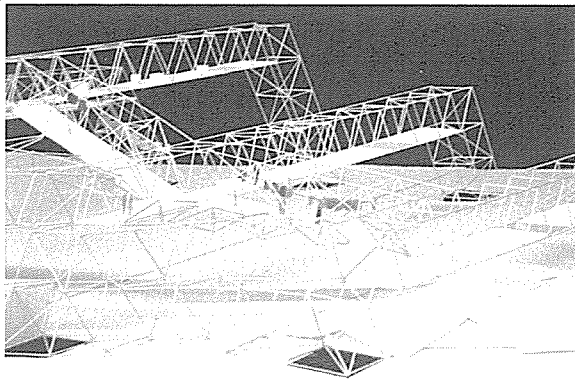
古閑—夢の島に公園全体をスポーツ施設としてとらえたときの拠点になる休憩所、シャワー室などの施設と、プールを含む建物を計画しました。現状ではマリナーと公園がつながっていないので、その間に配置することで新しい動線をつくり出したいと考えました。外側に開かれた大空間をつくりたいと思い、構造体が壁にならないことを意識して計画しました。

金箱—構造はどうなってるの?

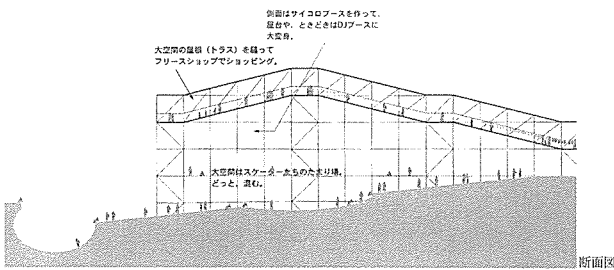
古閑—3本のトラスのアーチが一つの屋根面を形成して、5つの屋根がそれぞれのカーブの山をずらしながら集まっています。これによって屋根の上下が見え隠れする、混ざるといふ状況をつくり出そうと考えました。

金箱—屋根面がずれている部分は構造的には解決されていますが、ガラスの収まりが難しいね。

野地智美 NOJI Tomomi



模型写真



断面図

野地——これは新木場、夢の島を活性化するための服飾関係の施設をつくるということから考えて、リアリティーがあるものを作りたいと思いました。リアリティーがあるものとして、そこに存在する意味が何となく分かるもの、消費者と作り手みたいなのがあって、人のアクティビティーが生まれるようなものを作りたいと思いました。そのアクティビティーとはフレキシブルなものを作ればいいのか、そのような言葉で逃げないで、建物自体が来訪者、建物、常にこの場所にいる人たち、それぞれの間を繋いでくれるようなものを考えました。上層階にある企業が下層階の施設を運営することを考え、そうすることによって上と下の関係が、それぞれコラボレーションしてこの空間がより魅力的になると思いました。そのために視界的にも上と下を遮断しないように、この通路を菱形にして、ここに屋根がくると光がさして、下からはショップの様子とかが見えるのでそういうところも少し考えて作りました。あとは、この構造を保つために、トイレとか収納とか、必要最小限の収納みたいなものを詰めて行けたらいいと思いました。

金箱——平面図の内容ですが、諸施設の構成がしっかりしてないですよ。入り口とか管理部門とか動線についても頑張ってください。

金箱——膜屋根では膜を引っ張っておくシステムができていますか？

仙田——4点だから、膜を突き上げている部分の部材はいらないですよ。

金箱——平らな膜ではないんですよ。

野地——ハイ。

金箱——それだったらこれがいらなそうですね。膜材がテンションになっていて、それを突き上げる部材が一本でいい。

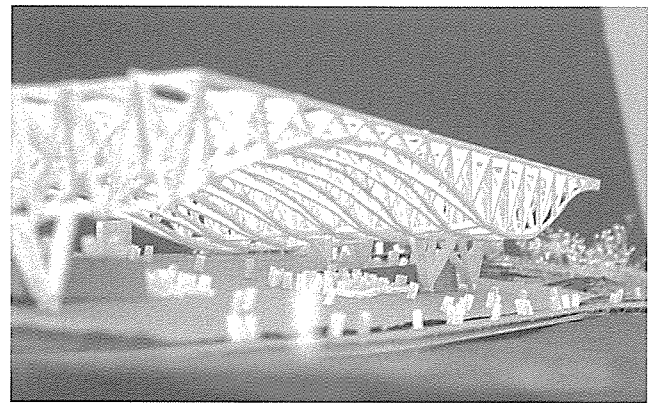
仙田——下が引張材ですっきりしている。大きなストラクチャーがきれいに納まっている。

金箱——トラスの形態を三角形として、逆三角形の組み合わせとしても良くなりました。片側に通路を作って、もう一方が片側施設という使い方とも合っています。

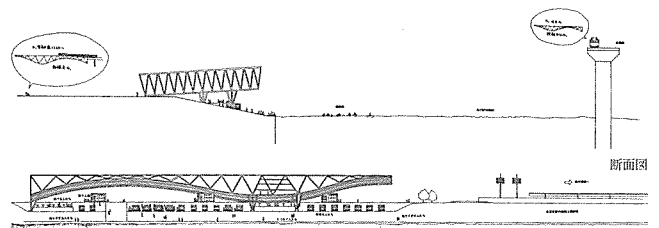
栗生——サイコロブースというのはこれのこと？

野地——基本的に屋根を作ったつもりなんです。空間を作ったというよりは。

諸藤弘之 MOROFUJI Hiroyuki



模型写真



断面図

諸藤——競艇場と競馬場を考えました。構造的には、地面を一部接地させて、接地させた空間は管理室と払い戻し室になっています。二本の部分で支えているようにしています。鉄橋のような形になっているので、見方によっては電車が走っているように見えます。競艇場なので、曲線が波のように見えて、競艇場であることを表しています。

金箱——下のV字の躯体が全然効きそうにないんじゃないかな。

諸藤——この柱の支え方がわからなくて、一日中悩んだんですけど。

金箱——これだけの根元の厚みがあるし、V字柱がなくともバランスはよいんじゃないか、という気がするね。

仙田——これだけの厚さのトラスだけというのは、もったいなって感じがするな、何かの機能で埋めたいという気がするなあ。

諸藤——屋根は屋根として使う方がいいと思っていて、また何かを入れるとして、重くなったり、構造が変わったりするのいやだったし、できれば屋根は屋根として使いたいというのがあって、これだけ頑丈に作っていると、材なんか大きくなってしまっ。

金箱——この材の間隔は何メートル？

金箱——ちょっと窮屈なんじゃないかな。トラスの適切なプロポーションというものがあるって、ピッチが狭いから、力学的にはあまり効果的ではない。

諸藤——下から見ると面白いと思ったんです。上の天井は平らなんですけど、この天井のカタチにしたくて。

仙田——もっとピッチがあるといいのではないのかな。そうするともっと構造的なおもしろさという点で効果がでたんじゃないの。

建築設計製図第四/第2課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「車のような手頃な家」

"Houses as Low-cost as Automobiles"

担当:

鈴木エドワード [非常勤講師、鈴木エドワード建築設計事務所] (本課題出題者)

SUZUKI Edward (Guest Professor, Edward Suzuki Associates Inc.)

芦原太郎 [非常勤講師] **宮城俊作** [非常勤講師]

ASHIHARA Taro (Guest Professor), MIYAGI Shunsaku (Guest Professor)

仙田満 [教授] **井上寿** [助手]

SENDA Mitsuru (Professor), INOUE Hisashi (Assistant)

[ゲスト・クリティーク]

飯田喜彦 [飯田善彦建築工房] **土肥真人** [情報環境学専攻、助教授]

戸尾尾宏 [建築研究所アーキヴィジョン]

IIDA Yoshihiko (IIDA Archipsh Studio), TOHI Masato (Dept. of Mechanical and Environmental Informatics), TOH Tadahiro (Archivision)

1960年、世界人口は30億だった。1990年にはこの倍になると予測されたが事実その通りだった。全ての人間に「屋根」を与えるためには毎日55,000戸の家がつくれねばならなかった。東京という大都会では、今なおホームレスが増えている。果たしてこれからどうなるのか？ 社会的問題はさておき、身近な事を考えてみよう。自分の両親はひょっとして、住宅ローンの返済に追われているのではないだろうか？ いずれ、自分自身が悩まされるのでは？ しかも一生……なぜ家はこんなに高いのだろうか？ こんなに高い必要があるのだろうか？ 車のように手頃な価格で購入し、しかも定期的にライフスタイルにあったモデルチェンジなどできたらどんなに便利だろう。車のサンルーフのようにボタンひとつで屋根が開いたら……(現在の家は動かないにもかかわらず、雨漏りなどがある)。ローンの返済に縛られず、代わりに毎シーズン海外旅行でもできたらどんなに幸せか……こんな悩みの解決案として、TPOにあわせたローテックのDIY、セルフ・ヘルプからハイテックのプレハブ工業住宅システムなどが考えられる。この課題は想像豊かに21世紀にあざわしい手頃でなおかつ素敵な住宅の可能性を追及するものである。

[デザインクライテリア]

1. 手頃であること。例えば日本で坪30万以下
2. DIY、セルフヘルプ、プレハブシステム化できること
3. 場所：先進国または発展途上国の敷地設定
4. 一軒家もしくは集合住宅
5. エコ、ユニバーサルデザインは当たり前
6. 現実性がある
7. 家族構成：2人~4人

[提出物]

平面図(1/100)、立面図(1/100)、断面図(1/100)、パース(内観・外観)又は模型、詳細図及び組立システム図、説明文



鈴木エドワード

SUZUKI Edward

1947年 埼玉県生まれ。

1971年 ノートルダム大学建築学科卒業。

1974年 フラー&サダオ/イサム・ノグチ ファウンテン&プラザ。

1975年 ハーバード大学院 アーバンデザイン建築学卒業。

1975-76 年丹下健三都市建築設計事務所。

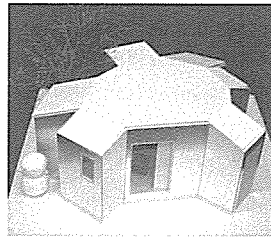
1995年 米国ロードアイランド・スクール・オブ・デザイン客員教授。

ハーバード大学GSD客員クリティック。

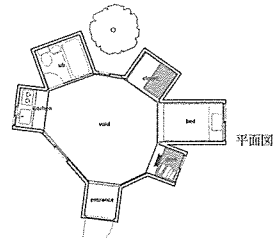
主な作品：ジュールA、ムバタ・ロジ(ケニア)、JR東日本・赤湯駅舎、大曲駅、さいたま新都心駅

以下は、2001年2月5日[月]に行われた講評会の一部を学生編集員(横山志穂[M2])がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

片柳恭志 KATAYANAGI Takashi



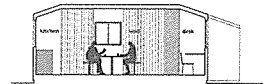
模型写真



平面図



立面図



断面図

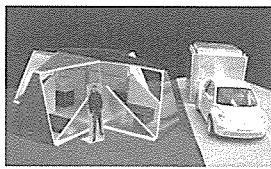
片柳——人には個性があるのだから、住宅にも個性があるべきだと思います。みんなに受け入れられそうなひとつのタイプを量産するのではなく、それぞれにとって、量産された「もの」であっても最適で「ひとつ」しかないものを供給できるようなシステムを考案しました。つくりかたは、まずインターネットでサイトにアクセスします。そこでベッド、机、風呂などに細かく分解された生活の様々な要素の中から、自分に必要な要素だけを選びます。パソコンを使って、選んだ要素を敷地の状況や自分の好みなどに合わせてスタディし、再構築します。形が決まったら注文し、部品が届いたら組み立てて完成です。

宮城——床面積に対しての外壁面積が大きすぎませんか。

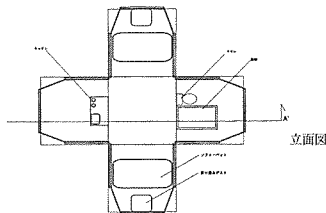
片柳——ここに提示した形は相対的なもので、予算に見合ったもっと壁面の面積が少ないパターンもつくるのが可能です。

飯田——だったらもっとそのパターンを示すべきです。

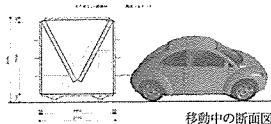
田中盛志 TANAKA Seiji



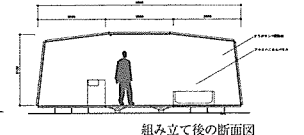
模型写真



立面図



移動中の断面図



組み立て後の断面図

田中——ノマディック・ハウスはアルミのハニカムパネルを構造とした、走行可能な展開型住居ユニットです。アルミは近年、加工性、軽量性、精度さに優れているため、航空機、船舶、列車、自動車などに使用されていますが、住宅にはサッシなどに用いられるに留まっています。この住居ではリサイクル材料としてアルミハニカムパネルを主構造としました。また、自動車で牽引する事で移動が可能で、折り畳まれた立体を展開するとキッチン、バス、ベットなどが備わった住空間が得られます。折り畳まれた状態からの展開は、ボルト接合などマンパワーのみで行い、手頃に折り畳み自分の住空間を移動する事ができます。

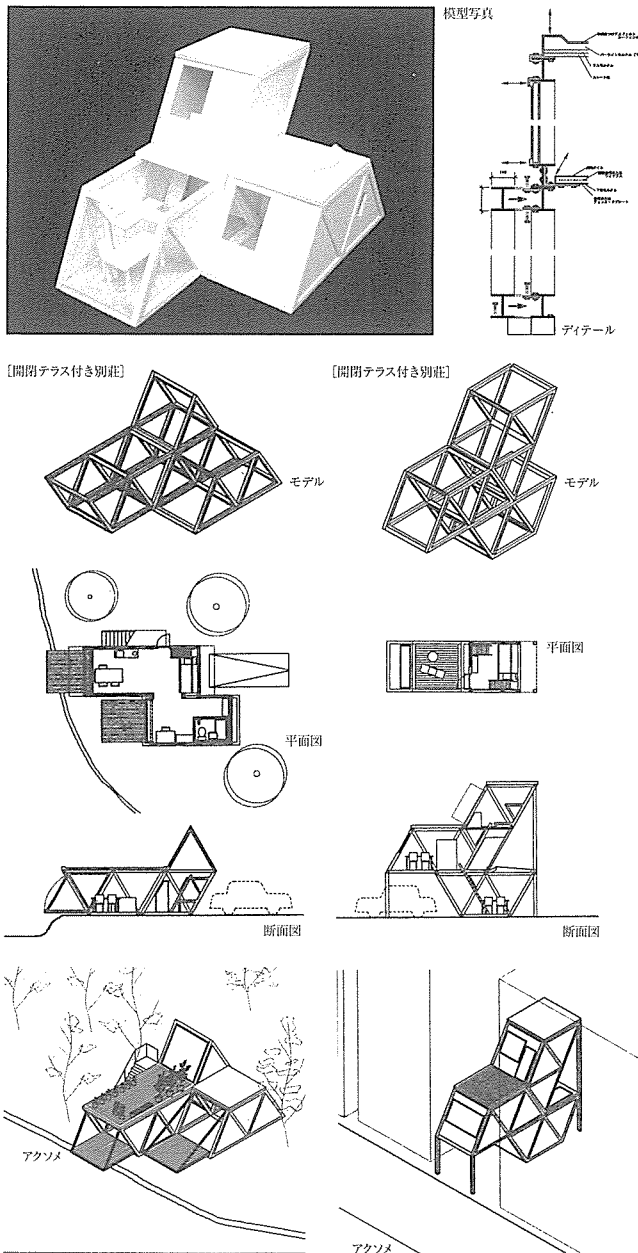
飯田——ただ状態が家具が組み込まれるのがおもしろいですね。

田中——簡単に組み立てて、移動できるのがコンセプトだったので、そこに力をいれました。

仙田——中間講評から基本的なアイデアはあまり変化していませんが、ディテールがよく考えられていますね。

飯田——建物によってできるコーナーのような庭の使い方も考えた方がいいのではないのでしょうか。

日引洋平 HIBIKI Youhei



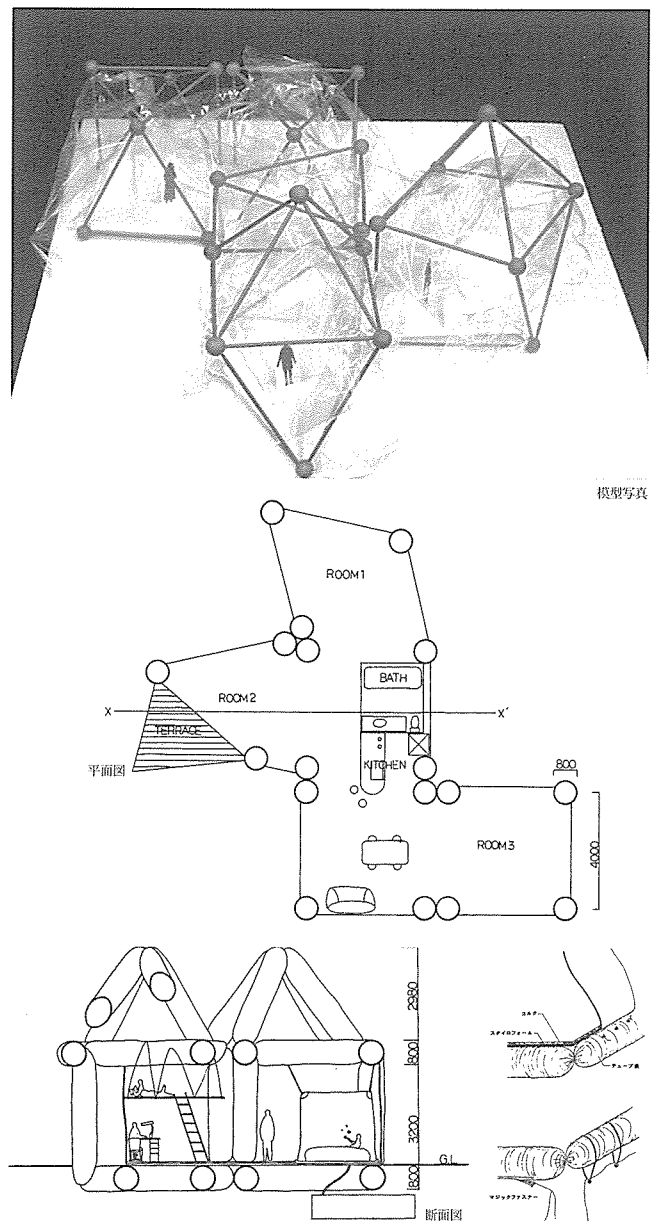
日引—「車の手軽さ」を考えた時、所有者が動いて住むための環境を選べることを考えました。そこで設計やモデルチェンジの手頃さというところに着目しました。規格化された台形のフレームを組み合わせて、シャッターや開ければテラスになるパネルなど住人のライフスタイルや周辺環境に合わせてはめ込みます。モデルチェンジは、既存のものを組み換えるだけで手軽にできます。これらのフレームやパネルは工場で作成でき、低コストで実現できます。

飯田—おもしろいと思います。規格化するとコストは浮くのですが、かつてのプレハブ住宅がそうであったように、お客さんには抵抗があるようです。そういった所も踏まえる必要がありますね。

宮城—かつて殺伐として郊外に沢山のプレハブ住宅を建設したためにより面白くない場所になってしまったことがあります。この建築ももっと周辺環境を考えて設計すると、もう少し広がりが出てくると思います。

鈴木—全員に関して言える事ですが、ディテールをつめて考えて下さい。細部まで設計する事で色々な問題が見えてくると思います。

阿瀬真由香 ASE Mayuka



阿瀬—私はペットボトルからできた曲げられる膜をチューブにし空気を入れる、新しい種類の膜建築を提案します。この住宅はあらかじめ組み合わせておいたチューブ膜に空気を入れるだけで、簡単に施工が出来ます。壁や屋根の膜も内部から作業してセルフ・ヘルプで付けられます。チューブ内の空気の温度を変えたり、壁や屋根を増したり薄くしたりすることで、好みの温度環境が作れます。使わない時は小さく収納できて、持ち運びも非常に簡単です。今回は住宅でやるとどうなるのか、その一例を挙げました。

鈴木—模型の説明をして下さい。

阿瀬—ひとつひとつが一本のチューブからなっていて、ひねっても空気が通る工夫がしてあります。一つの単位が破れても家全体は壊れません。

鈴木—壁や屋根は断熱されていませんが、冬に寒く、夏は熱くありませんか。

阿瀬—冬は内側を布で覆って、夏は布地を代えて、簾と併用します。

仙田—概念的な模型でなく、工夫して本物の模型を持ってきて見せて欲しかったですね。

建築設計製図第四/第2課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「次なる宣教師達の住まい」

"Houses for a new generation missionaries"

担当:

芦原太郎 [非常勤講師, 芦原太郎建築事務所] (本課題出題者)

ASHIHARA Taro (Guest Professor, Taro Ashihara Architects)

鈴木エドワード [非常勤講師] **宮城俊作** [非常勤講師]

SUZUKI Edward (Guest Professor), MIYAGI Syunsaku (Guest Professor)

仙田満 [教授] **井上寿** [助手]

SENDA Mitsuru (Professor), INOUE Hisashi (Assistant)

[ゲスト・クリエーター]

飯田喜彦 [飯田善彦建築工房] **土肥真人** [情報環境学専攻, 助教授]

戸尾任宏 [建築研究所アーキヴィジョン]

HIDA Yoshihiko (HIDA Archship Studio), TOHI Masato (Dept. of Mechanical and Environmental Informatics),

TOH Tadashi (Archivision)

かつて宣教師達は真っ先に新天地にわたり、その地への文化的介入を行ってきた。日本においては、江戸幕府の鎖国政策により、ザビエルなどの文化的介入は成功したとは言えなかった。しかし、明治以降の西欧諸国からの近代化という名のもとでの文化的介入は、深く進行し、今日の東京の姿や人々のライフスタイルを一変させた。そして、2000年東京では、新たな価値観に目覚めた人々による文化介入が次なる時代へ向けて行われようとしている。こうした次なる時代の宣教師として、現代の社会に影響を持つような新しいライフスタイルを体現した、あなた方の拠点となる住まいを設計してもらいたい。

[テーマ]

次なる宣教師たるあなた方の価値観や、ライフスタイルを近代と対比する形のキーワードをグループでディスカッションし、抽出して下さい。

参考:

経済成長を目指し、合理性、効率を重視→サステナビリティを目指し、調和生き甲斐を重視

物の所有価値→物の使用価値

大量生産、大量消費→ストック、リサイクル

システムにコントロールされる個人→参加、個人の主体的関与、システムへの参加

都市化→地球環境

資本主義経済→ボランティア・エコノミー

[場所の設定]

2000年の東京に次なる時代の価値観を持った、あなた方の住まいの拠点とするのに最適な場所を設定して下さい。

参考: 長崎、横浜、軽井沢、麻布はその昔外国人達によって外国人達によって、三宿、下北沢、16豪沿線などはベビーブーム以降のその当時の若者によって、ウォーターフロントは、バブル期のデベロッパーや空間プロデューサーによって、それぞれ価値を見出されてきた。

次なる場所は?

[ハードとしての建物設計]

次なる時代の宣教師として、あなた方の拠点となる住まいを設計して下さい。

参考: 地球環境・建築憲章、サステナブルデザイン、エコロジカルデザイン、ユニバーサルデザイン、関係性のデザイン、参加のデザイン、コーポラティブハウス、コレクティブハウス、スケルトン・インフィル住宅、センチュリーハウジング

[ソフトとしてのプロセスデザイン]

後に続くあなた方の同士を増やし、より一般化させるためのプロセスデザインをして下さい。

—その住まいの計画立案、建設中、維持運営への人々の参加可能なプロセス



芦原太郎

ASHIHARA Taro

1950年 東京都生まれ

1974年 東京芸術大学美術学部建築学科卒業

1976年 東京大学大学院建築学修士課程修了

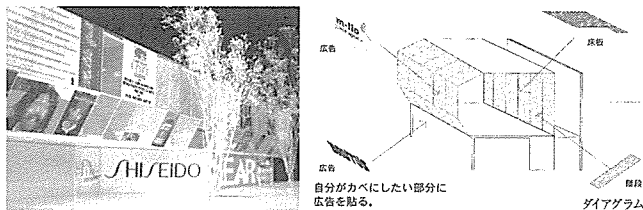
1977年 芦原建築設計研究所

1985年 芦原太郎建築事務所設立

主な作品: 笠間日動美術館・本館、文化交流施設水鳥サロン、宮城県白石市立白石第二小学校など。

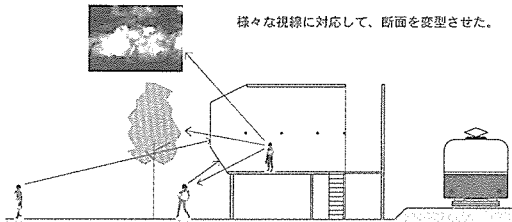
以下は、2001年2月5日に行われた講評会の一部を学生編集員(森永真由子[M2])がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

高橋勇貴 TAKAHASHI Yuki



模型写真

様々な視線に対応して、断面を変型させた。

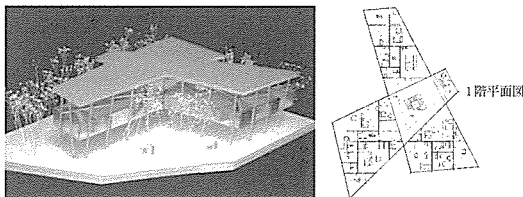


高橋—都市に住む上での障害を広告によって解決できないかと思いました。また壁や窓の位置、天井の高さ、床面積を自分で選択できるようになっています。

芦原—線路側はどうなっているの?

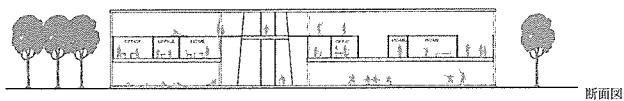
高橋—線路側には防音壁兼広告板が立っていて、これは構造上は水平力に抗する役割も持っています。電車が通らないときは開閉が可能です。

山口健児 YAMAGUCHI Kenji



模型写真

1階平面図



断面図

山口—商業地域と住宅地域の狭間を敷地とし、住宅およびその住民と、街づくりの関係について次なる時代にどうなるかということを考えました。今までは住宅は街づくりの一つの結果であり、住民は完全に受け身でしたが、次なる時代には住民が街づくりのプロセスに関わり、その住宅自体も街づくりのプロセスによって内部で変化していくものがないのではないかと考えました。

そこで、街づくりの拠点となる基地を設計しました。そこには街づくりの専門家たちの事務所やその住居が設計され、街づくりのプロセスが進むと内部の構成がかわり、ショップや事務所、普通のマンションとして使用されます。

飯田—専門家の集団が突然街にやってきて街づくりを始めちゃうんだよね。それを住民が受け入れるのかな。あと、公園をつぶしてしまうことに対してどう考えてるの。結構暗くなってしまふよ。

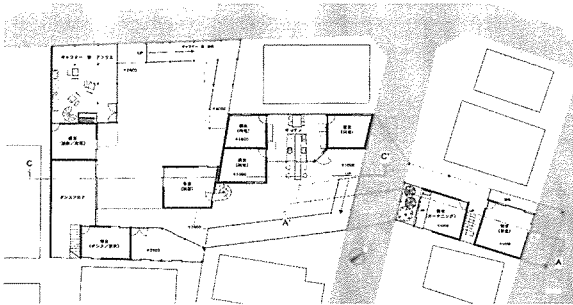
仙田—この人達はしばらくしたらまた別の土地に移って行って中間講評で言ってたね。

山口—はい、そうです。そういった非定住性みたいなところから考え始めました。

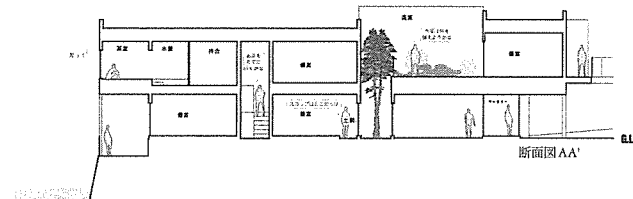
荒井茂 ARAI Shigeru



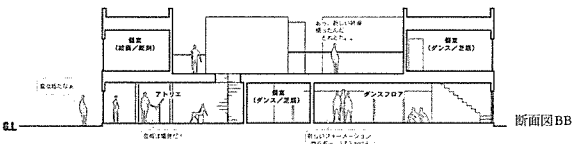
模型写真



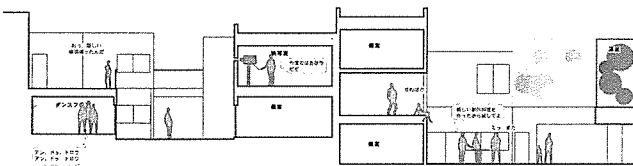
1階平面図



断面図 AA'



断面図 BB'



断面図 CC'

荒井——従来の住宅はn-LDK型や独身用のワンルームといった画一的なプランがほとんどです。そこで各自バス、トイレ付きのワンルームを持つ人が数人で共通の趣味のための部屋を共有するユニットが多種多様に集まる集合住宅を提案します。

宮城——周辺との関係はどうなっているの？

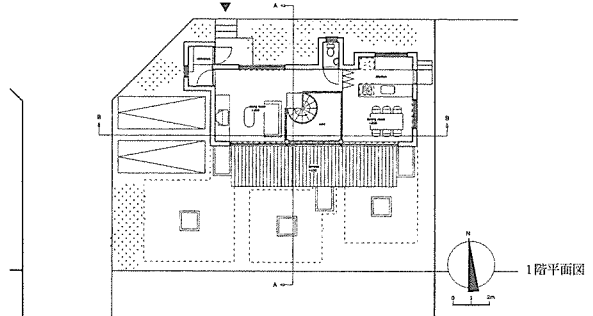
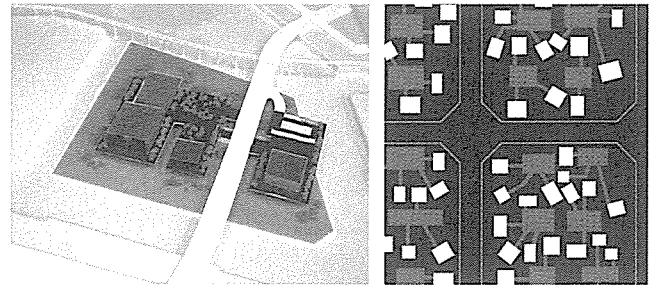
荒井——趣味のためのスペースを道路や隣家との境界に置くことで中が見られるようにしています。興味を持った人は中庭に入り込み、活動に接することもできます。

芦原——リビングで家族が楽しくテレビを見たりするようなことを否定しているの？

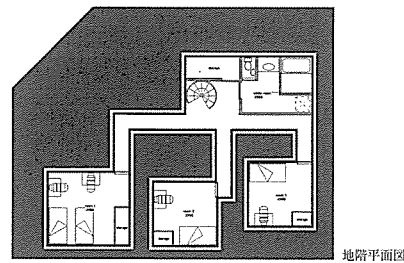
荒井——血縁だけでなく、趣味で結びつくスタイルがあっても良いのではないかと提案です。

芦原——確かにこういう場所があれば良いと思うが誰がこれをつくるのかという問題が残る。そういったソフト面を解決していないためにリアリティーが薄いように思える。

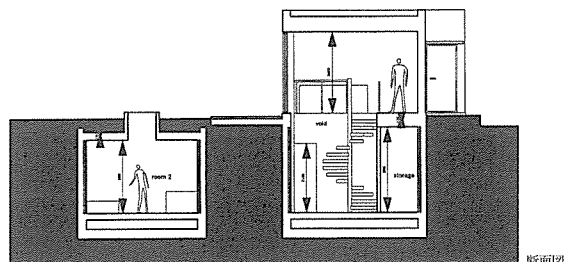
野上真太郎 NOGAMI Shintaro



1階平面図



地階平面図



断面図

野上——家族がそれぞれの価値観が異なっていることを意識しながら、日々の生活の中で貴重になりつつあるコミュニケーションをとってゆけるような住宅を考えました。それぞれの個室は地下に埋設され、地上には家族室だけがあります。個室へのアクセスは地下の共用部分からそれぞれ専用の廊下が伸びています。

飯田——個人を尊重した上でのコミュニケーションを目指すのなら家族室と個室の構成が逆じゃないのか？

野上——それだと直接的すぎて潜在的に意識するということではなくなってしまいます。

仙田——君は外部と家族室とが等価になるようにしたいの？

野上——そうです。完全に等価でないにしても、家族室が外部の入り口になるようなイメージです。

仙田——それならむしろ、個室がそれぞれに出入り口を設ける方がいいのでは？ 個室がバラバラになっている図式にしても、主張とやっていることが矛盾している気がします。

建築設計製図第四/第2課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「土地を再生させる建築」

"Architecture for Land Reclamation"

担当:

宮城俊作 [非常勤講師、千葉大学教授] (本課題出題者)

MIYAGI Shyunsaku (Guest Professor)

鈴木エドワード [非常勤講師] **芦原太郎** [非常勤講師]

SUZUKI Edward (Guest Professor), ASHIHARA Taro (Guest Professor)

仙田満 [教授] **井上寿** [助手]

SENDA Mitsuru (Professor), INOUE Hisashi (Assistant)

[ゲスト・クリティーク]

飯田喜彦 [飯田善彦建築工房] **土肥真人** [情報環境学専攻、助教授]

戸尾任宏 [建築研究所アーキヴィジョン]

IIDA Yoshihiko (IIDA Archship Studio), TOHI Masato (Dept. of Mechanical and Environmental Informatics), TOH Tadashi (Archivision)

先進国の社会が、第二次産業を中心とした工業化社会から情報を主たる媒体とし発展する脱工業化社会へと変貌する過程において、大都市とその緑辺部には、使われなくなって放置された土地が目立つようになってきました。産業棄地と呼ぶことができるであろうこれらの場所では、その履歴のゆえに、汚染物質の存在や徹底した収奪の結果として、土地に本来備わっているべき自然環境の基盤がきわめて脆弱なものとなっています。一方、ごく一部の例外を除いて、これらの土地がすぐさま他の用途に転用されるような社会経済の状態を期待することはできなくなっています。つまり、次の利用が発生するまで、これらの土地は休眠状態にはいるわけですが、その時間を有効に活用しないではありません。

[設計条件]

敷地: 実在する土地であることが必要です。

プログラム: 特に問いません。恒久施設、仮設いずれも可とします。

構造・設備: 自由とします。しかし、あまりにも荒唐無稽な提案は不可とします。

法規等: 常識の範囲内で対応してください。

[提出物]

敷地の現状を説明する図

写真等の資料

提案の趣旨とプログラムを簡潔に表現する文章ならびにダイアグラム

配置図

平面図

断面図 (縮尺は任意)

土地が再生されるプロセスを説明するビジュアルな表現 (CG可)

模型 (縮尺は任意)



宮城俊作

MIYAGI Shyunsaku

1957年、京都府宇治市生まれ

京都大学大学院修士課程 (造園学専攻) 修了

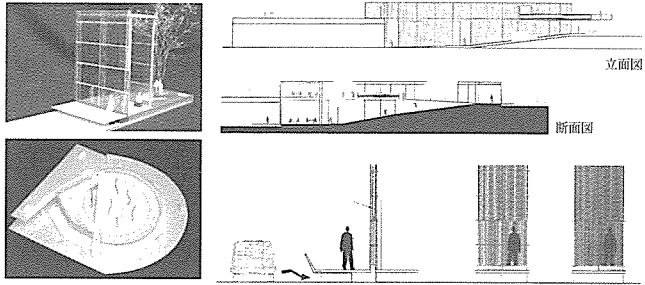
ハーバード大学デザイン学部大学院修了

米国内の設計事務所勤務を経て1994年より千葉大学緑地環境学
科助教授

1990年より設計組織 PLACEMEDIA パートナー

作品: 植村直己メモリアルパーク (1996年度日本建築学会賞)、岡
崎市美術館ランドスケープデザイン、清里写真美術館ランドスケ
ープデザイン、飛騨高山美術館ランドスケープデザイン、多摩ニュータ
ウン稲城長峰地区集合住宅地、平等院新宝物館ランドスケープなど
受賞: 1994年日本造園学会賞、1996年日本建築学会賞 (栗生明氏
と共同受賞)

玉井洋一 TAMAI Yoichi



玉井——敷地は都営浅草線馬込駅前の環七と第二京浜の交わるロータリーの円形の孤島です。自動車のことを考えてできたこの孤島には歩道橋がかけられ、木が植えられ、公園のようになっていますが、そこは自動車による排気ガスで人が休めるような場所ではなく、ゴミ置き場のようになっています。そんな場所を人と車が共存するように活性化してみました。そこで円形の孤島、歩道橋、二つの道路のレベル差、排気ガスの再構成を試みます。提案するのはレストハウスで既存の木をなるべく残しつつ、カフェ、ギャラリーがガーデンを囲むようにあり、そこに歩道橋が貫通しています。また、壁面の炭によって建物自体が大きな空気清浄機になっています。人や車が通過したりとどまったり、そのこと自体が風景になるもの。人や車からの眺めがたのしいもの。そんな建築を思いました。

飯田——提案としておもしろいと思います。ドミナスワイナーのような質を持っている。しかし、そのプログラムで本当に人がやってくるのかあやしい。あとその空気清浄機は本当に機能するのですか?

玉井——空気清浄機の機能は特に期待していません。

一同——ハハハ(笑)。

玉井——それよりも外部や内部からどのように見えるかということを重要に考えています。あとプログラムについては、特にそれを目的として来るのではなく何となく立ち寄れるようなものかいいと思いました。極端に言えば空気清浄機の壁が回っているだけでもいいと思いました。

倉林貴彦 KURABAYASHI Takahiko (次ページ下に掲載)

倉林——昨年、丸子橋はめでたく新装開通しました。それに伴い、それまですぐ隣でがんばってきた仮設橋はその役目を終えて、現在、撤去を待つ身です。橋は何年かに一度新しく造りなおさなくてはならないので、仮設橋はその際必ず生まれる副産物です。しかし、それをただ撤去してしまうのではもったいないので、本計画ではこの仮設橋のストラクチャーを再利用し、これに緑化、増築をして再生させようというものです。丸子橋近辺の河川敷は人々の憩いの場であり、様々なアクティビティが発生しています。増築される建築はこれらのアクティビティをサポートし、多摩川の自然を120%楽しむための「海の家」的施設です。**仙田**——中間講評でも言ったけど、やっぱり橋の上と下をスロープなどでもっとつなげるべきだったんじゃないかな。

倉林——検討したんですが、丸子橋という場所になぜ多くの人が集まり様々なアクティビティが発生しているのかを考えたとき、そのそっけなさみたいなものかいいのではないかと思いました。スロープや階段を多く付けて暑苦しい場所にしたくなかったんです。そのかわり、スリット状のトップライトを多くあけることで上下のつながりを計りました。

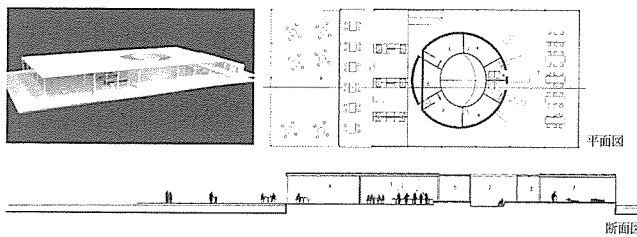
飯田——でも、やはり選択肢は多く用意すべきだよ。

倉林——僕はこれでいいと思います。

宮城——これはかなり遠くからも見える物です。それを意識してもとの橋の形、シルエットを崩さないように設計しているのが良いですね。

以下は、2001年2月5日[月]に行われた講演会の一部を学生編集員(深海孝二郎[M2])がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

益谷哲朗 MASUTANI Tetsuro



益谷——近年ダイオキシン汚染が報道された埼玉県の所沢市の農地に農業支援施設を計画しました。マスコミの過大報道による影響で、所沢の低汚染の農地までもが経済的な被害を受けて、経営的に厳しい状況となっています。このようにして生まれたこの土地は、第二次産業だけでなく情報産業も加担した産業棄地に他ならないと考えました。具体的なプログラムとしてこの土地に農業体験施設のようなものを作り付近の住民を中心とした、多くの人々が畑を耕したり、収穫物を料理して食べたり、くつろいだり学習したりする施設を考えました。建物は広い敷地に対応して、道具や休憩するベンチやトイレなど農業をする上で最低限必要な要素を納めた納屋を各所にちりばめ、キッチンや入浴施設のあるコミュニティー棟を中心の蓮田のなかに配置しました。

宮城——なんか中間発表の時と全く変わっちゃったね。前は建物が土手に埋まっててその方がよかったような気がするけど。蓮池の中に配置したことに何か意図はあるのでしょうか。

益谷——初めこの土地をみた時に、広がるあれた畑の向こうに団地が並んでいて寂しいけれどもとても魅力的な風景だったのでその風景に溶け込ませる意味で建物は土手に埋めていたのですが、暗いイメージを払拭することを考えた時、川の横のこの場所はもともと田んぼだったので、そういう意味で建物が水の中に浮かんでいるという状況もあり得るのではないかと考えました。

仙田——工費も安くあがるよね。

宮城——それにしてもこの作り方は敷地のポテンシャルを十分に生かしていないように思う。

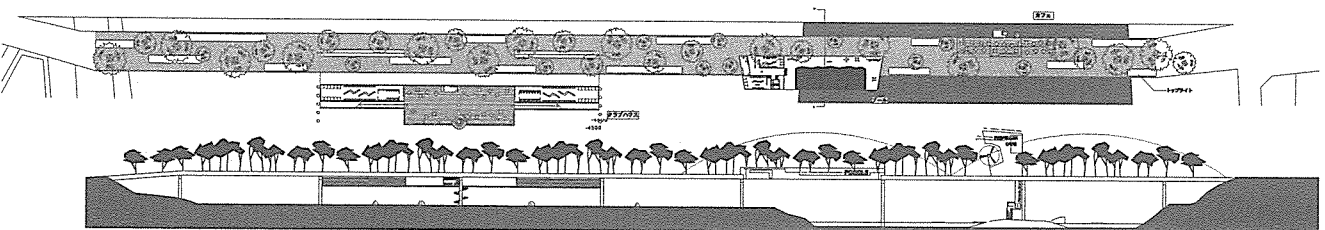
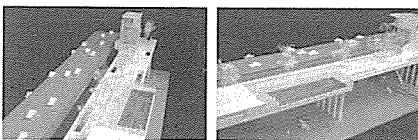
益谷——水に建物やその光が映ることを意識したつもりなんです、
一同——それじゃあ無理だよ。

鈴木——このデッキが広すぎるというかなくても良いかとも思うけど。

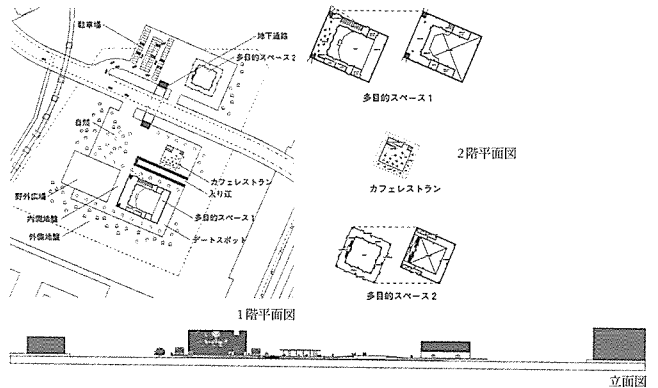
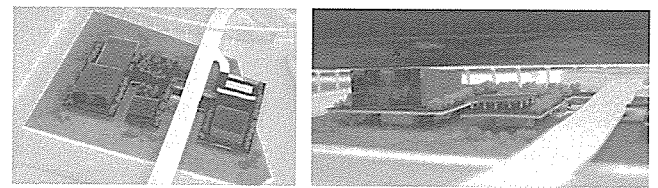
宮城——まあ、建物自体は低く押さえてあって、薄くてフラットな屋根が載ってるからシルエットはまわりの風景に調和していますね。前言っていたお風呂はどうなっちゃったの？

益谷——丸いヴォイドの露天風呂は中心でコアとして働いていて周りは鉄骨の細い柱にして、建物として透明感を意識しました。

鈴木——計画として建物を機能で分けて分散型にしたのは良かったと思う。



峰廣大輔 MINEHIRO Daisuke



峰廣——芝浦という場所で機能と環境という二つの側面で、再生を考えます。一つ目に、この場所が本来持っているポテンシャルとして二次産業と物流が考えられます。現代の社会の情報化により、これらの必要性がなくなり、結果として産業棄地が生まれています。そこで、そのポテンシャルを情報の発信、停留点として再生させます。ここに建つ2つの多目的スペースからは、IT、音楽、ファッション、アートなどジャンルを問わず多種多様な情報が、内部空間からのみではなく外部に設置されたスクリーンからも社会に送り出されます。二つ目に、もともとここは海だったので、この場所の持つポテンシャルとして海が考えられます。なだらかに傾斜のついた外側地盤は潮の満干の変化により、完全に地上となっている状態から完全に海の状態へと変化を遂げます。満潮時、完全に海の状態となった外側地盤の中に孤島のように内側地盤が存在します。時の流れによってここは人に違った空間を与えます。

飯田——こういうものは最近お台場のデックスとか湾岸の方にありがだから、もっと違う方法で表現があらわせた方が良いと思う。

宮城——水が入り込むことによって干潟状になり植生や生物などが自然と生まれてくると思うけどそういうことは考えているのか？

峰廣——土地を再生するということで自然環境の再生という点ではもちろんそういったことは前提として考えています。

飯田——外側の水が入り込む部分と内側の建物の部分とがそれぞれ個別のものとなってしまっている。土地を再生させる建築なのだから、建築と水の部分をもっとお互いに関係を持った構成を作ったほうが良いのではないかと。そうすれば来る人も何か普通の人は違った人たちが集まるようになると思う。

宮城——環境を再生させるという環境共生的な建築オンリーになってしまうのではないかと心配していたが、そうならなかったのは良いと思う。

投稿作品紹介

Contributions

ここでは、コンペの応募案など、設計製図の授業以外で制作された学生の作品を募り、紹介しております。なお、投稿者の所属は本紙の発行日現在のものであります。

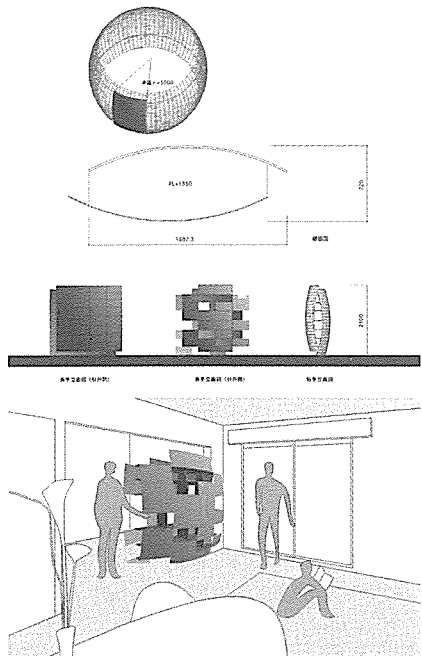
「家庭の中のモノを収納する家具」

ボラダ・デザインアワード2000 [優秀賞]

松本淳 [博士2年] 北川卓 [建築家]

Jun Matsumoto (Doctoral Candidate), Taku Kitagawa (Architect)

デザインしたのは、両側からの使用を前提として壁沿いに据え付けるタイプの棚でなく、部屋の中央部分や二室の境界部分に据え置くタイプの棚である。その形態を特徴付けているのは、側面部にある三次曲面で、隣り合う二つの経線と二つの緯線に囲まれた面同士が同じ曲率を持つことに着目して、棚の外皮を木製の薄板の引戸が集合した面として捉えて覆ったものである。また、木肌の美しさを生かした各引き戸の開閉パターン(完全に閉じた状態では木目が連続する)により、棚によって仕切られた室間の透過度の操作(視線・音・光の遮断)も同時に行なえる。そもそも家具をそのように装置化する試みは、日本家屋の「床の間」から発想を得たものである。従来の「床の間」では、客人や季節ごとに異なる掛け軸や生け花を置くことで、もてなしの心が表現されていたが、そのような精神性を読み替えて備え付け家具の可能性を模索した。



「新世紀の田園居住」

2000年日本建築学会設計競技 [佳作]

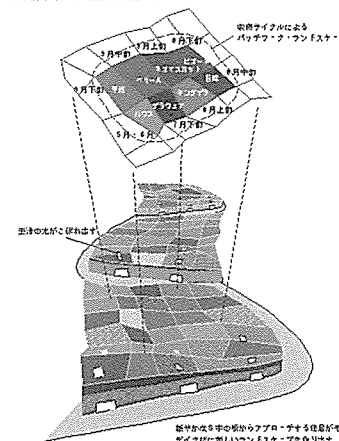
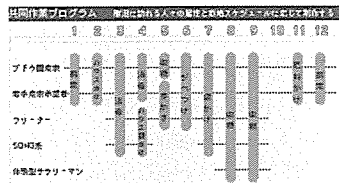
中島光平+米本由佳+大日方宏行+末光真一+村松直美+井上加奈子+丸山徳文+菅又健雄 [修士2年]

Kohei Nakashima, Yuka Yonemoto, Hiroyuki Obinata, Shinichi Suemitsu, Naomi Muramatsu, Kanako Inoue, Noritake Maruyama, Takeo Sugamata (M2)

勝沼町は山梨県甲府盆地に位置し、地域一帯に広がるブドウ棚という特性を持った地域である。そこに都市との関係を取りながらも、地域の景観や自然のすばらしさを身近に感じ、また多様なライフスタイルを可能にしてくれる新しい田園居住を計画した。

本計画はブドウ業を営む農家、自然の中で生活することに憧れ移り住んだ若手農家、住む場所を選ばず生活するSOHO型就労やフリーター、普段は都会の中に住み一時の自然を体感しに訪れるサラリーマンと様々な属性をもつ人々がブドウの栽培スケジュールに応じて勝沼のブドウ園に滞在し、共同で運営する農業形態であり、栽培や収穫も生活に取り入れた、ランドスケープそのものをつくり出す地域一体型の田園居住の提案である。

さらには異なる収穫時期の品種を計画的に育てる収穫サイクルを利用し、その品種の違いによる果実や葉の色が新たなパッチワークランドスケープも可能にする。



「小堀遠州の家」

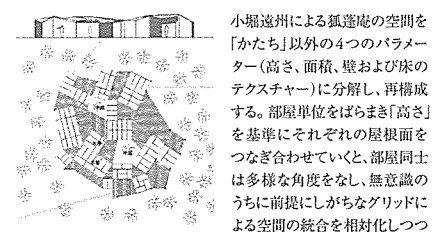
第10回エス・バイ・エル住宅設計競技 [大賞]

長谷川豪+藤村龍至+内山森 [修士2年]+東伸明 [修士1年]

Go Hasegawa, Ryuji Fujimura, Shin Uchiyama (M2), Nobuaki Higashi (M1) / sk0007

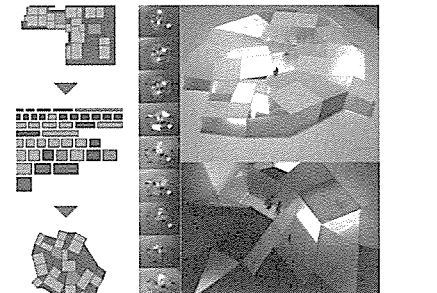
テーマは空間を相対的に定義する事である。ここでは絶対的なルールを設けずに、複数のルールを併走させている。ルールは単独では自律せず、他のルールからの影響を免れない。結果、その連動する様子は関数のように常に相互依存的である。これは「強い」秩序により全体を統合する空間のあり方とは異なる、現代的な「弱い」空間のあり方である。

ここでは機能や用途など、ある特定の質の獲得を目的としてデザインの材料を重ねていくのではなく、ルールとその運用(ゲーム)の結果得られる質を利用している。勾配屋根、構造、テクスチャー、面積などに関わる複数のルールの運用の結果、この奇妙な多面体の集合は現れる。さらに住宅の細部で起こる生活の様々な事象に対し、微妙な差異の中から相応しい現象を内包する空間が選びとられ発見的に利用される。空間の質が発見的に利用される様は、あたかも場当たりのである。これは細部での細かな条件がルールを媒介してかたちに反映することを示しているため、求められている条件やその場の環境を、デザインの材料としてより直接的に設計プロセスに参加させることができることを意味する。その過程の後、建築の各要素は屋根や壁という切り分けでは説明不可能な、環境との特徴的な結びつきを示すようになった結果、このような風変わった意匠を持つことになった。(東伸明)



全体(かたち)を獲得できる。その過程で例えば屋根の形態なら「太陽光の入射角を手掛かりに屋根の断面上の角度は各空間の照度異なるように設定する」というように「照度」から平面と断面の両方に関わるルールを定める。

さらに複数のルールを設定し、それらを併走させながら空間にかたちを与えていく。その結果空間は強い秩序に回収されず無秩序かつ多様な形態、隣接形式を獲得できる。その恣意的なルール設定には、計画から発生する複雑な条件に見事に応じていくことでのみ、より強い根拠が与えられる。



都市を観察するワークショップ

Work-Shop of City Observation

オランダ建築博物館ワークショップ

NAI Workshop

市川知^[修士2年]

Satoru Ichikawa (M2)

2000年8月20日から2週間、ロッテルダムにあるオランダ建築博物館 (NAI) で開催されたサマーマスタークラスに参加した。これは建築と都市の現代的な問題の考察を目的に開催されている。世界各国から30名の建築に携わる学生、建築家、ランドスケープアーキテクトが集まり、マスターとして招かれた山本理顕氏から「都市の特異点」という課題が出題された。都市という環境の中から奇妙な風景を見出し、そこに建築をつくるという課題であった。

初日は山本氏と共に参加者全員で敷地をフィールドワークし、各自が敷地について気づいたこと、不思議に思ったことなどの印象を率直に述べるところから始まった。そして率直な印象の何が設計のきっかけになるか、白熱した議論の中でアイデアを共有しながら探しあった。まずは都市を観察し率直な感想をもつこと。それを議論の中でアイデアに昇華していくこと。そのことは極めてあたりまえかもしれないが、空間をアイコン的に扱うことばかりを思考していた頭にはどこか新鮮で、今後多様な価値観のなかで建築をつくっていくときにこのワークショップは大きなトレーニングとなるのではないかと思われた。

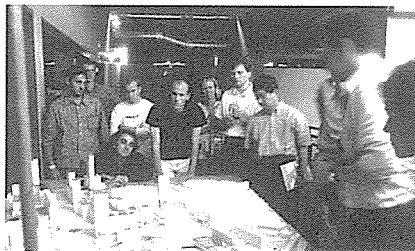
「都市を観察すること」そこから始まったこのワークショップで、オランダであろうと東京であろうと同じ土俵の上に問題があることを学んだ。我々は最初、日常暮らしている街を手持ちのカードにしてオランダを測るわけで、フランスやドイツ、東京、アメリカ、遠くはアルゼンチンまでそれぞれがいろいろなカードを持ち寄って議論する。そんな状況では共有できる事しか伝わらないから、ローカルだった自分の印象にいかなる共有可能な価値があるのかが少しずつ洗練され見出されてくる。写真、スケッチをもとにして自分が都市とどう関わりたいのかを、片言ながら共感できる言葉の中で深めてゆき、さまざまな都市プロジェクトを提案できるまでアイデアを練り上げていった。

議論の中で山本氏は繰り返しsmall devise(小さな仕掛け)という言葉にこだわっていたのが印象的だった。「小さな仕掛けが世界を変えることができる」、「どんな仮説でもいい。見知らぬ人びとを説得するリアリティーを獲得しなさい」と山本氏は言う。我々は議論の末、それは都市を誰にとってもおもしろいものとするための触媒のようなもので、都市をさらにおもしろく更新させたり、現代的な状況の変化の速度を包含できるようカスタマイズするものであり、ゆえにゼロから未だ見ぬ新

しい都市を造るためのものではなく、これはまさに都市という社会と関わっていくときに重要なコンセプトだと考えた。そのことを理解出来るか否かがその後のアイデアの発展に大きく影響したように思う。人が都市と共存できるように、都市をカスタマイズしていく役目を建築がこなすことで、よりアクティブに都市を利用でき、都市に開かれた建築をつくる面白さを見出せるのではないかと、そのことを学んだ。

最終的には類似したアイデアの人が集まってグループプレゼンテーションとなった。網目状の街路を活性化するために、都市をネットワークと捉えつつバス停、自転車置き場などの小さな公共施設で補強すること、都市活動によって生まれた負の環境をスポーツを通して使用可能な開かれた場所に補修していくこと、屋上という動線的には閉じた場所を、緑を使ってネットワーク化し公開された公園にすること、風や音といった見えないけど都市環境を支えているものを風車などで利用可能にしたキオスクを町中に挿入していくことなど、都市をカスタマイズする様々なアイデアを生み出していくことになる。

2週間という限られた時間の中で、我々は都市を観察し感想を持ち、建築とはいかなるものかを議論し続けた。建築が都市という社会を面白いものに更新していく存在、アクティブに都市と共存する存在としての可能性をこのワークショップでは考える契機になったと思う。建築が変化し続ける都市という環境の中で、それと対峙することなく成立する可能性をみた気がした。



山本氏と模型の前で議論



ビデオプレゼンテーション

カジュアルキテックチャー大作戦

Casual-Architecture Project

工大祭イベントレポート

A Report from T.I.T. Festival

藤村龍至^[修士2年]

Fujimura Ryuji (M2)

去る2000年10月、工大祭の開催に合わせ、イベ

ント「カジュアルキテックチャー大作戦」が開かれた。企画と運営は建築学専攻修士1年の有志たちによって進められた。イベントは2部構成で、まず1週目にシンポジウムが、続いて2週目にワークショップが行われた。

【大岡山ミーティング】

シンポジウムは「大岡山ミーティング」と名付けられ、緑が丘4号館2階会議室を会場にして開催された。冒頭にテーマである「カジュアルキテックチャー」についてのプレゼンテーションが映像を交えながら行われ、それをもとにディスカッションが行われた。ディスカッションではゲストの方々(藤本杜介氏、miri-meter)をはじめ参加者から次々と意見が出され、「カジュアルキテックチャー」とはこういうものではないか?と活発に話し合われた。他学からの参加者80名を含み、参加者は100名を越えた。

【目蒲線ワークショップ】

1週間後、「目蒲線ワークショップ」と名付けられたワークショップが東急目蒲線(現・目黒線)沿線を舞台に、大岡山4号館5階図学製図室を主会場として、全2日間の日程で行われた。先行した「大岡山ミーティング」での議論を踏まえ、今度は自分たちで実際にカジュアルキテックチャーをデザインしていくという試みであった。我々は緑地、商店街、駅、丘・坂道、田圃調布、多摩川、環八、団地の8つの項目を用意し、各項目毎にチームを作った。外部からの参加者には予めこれらのチームに所属してもらい、チーム毎に各地に散らばってフィールドワークがスタートした。途中シンポジウムの続きとなるディスカッションが行われたり、ティーパーティーなどの時間が設けられて協賛品の差し入れがなされる場面もあった。

36時間に渡るチームワークの果てに、参加者一同は最終講評会を迎えた。プレゼンテーションは主にコラージュが用いられ、そこに示されたのは「カジュアル」をキーワードにした実際の都市空間への様々な建築的提案の数々であった。参加者からは同時に、「何がカジュアルだと思うか?」や「どのようにカジュアルさを獲得すればいいのか?」といった議論の結果としての、様々なカジュアルキテックチャー観が示された。

【イベントをやってみて】

「何をやったらいいのか?」前期の期間中、毎週授業後に有志が集まり、話し合いを重ねられた。このイベントは、例えば「お神輿を作ろう」といった、最初から決まったある目的がある人が集められるタイプとは異なり、「シンポジウムをやりたい」「ワークショップをやりたい」「ラウンジをやりたい」といったバラバラな希望をバラバラのまま実現していったことに意味があるのではないかと。イベントの一部分でも興味があればそこに参加できるからだ。そのとき「カジュアルキテックチャー」というキーワードによるパッケージが重要になってくる。イベントの告知にはインターネットを最大限利用した結果、イベント当日には遠く信州大学からも参加者が駆け付けてくれた。東工大内部でのこうした盛り上がりも、広く同世代の学生たちへ示すことが出来たのは、広範に活動が広がっていく可能性も含め、意義深いものであった。

イベントを終えた今、イベントを通じて獲得した様々な成果を材料にして、議論をさらには展開して行きたいと思う。最後に、企画の実現にあたり協力をお願いした多くのの方々、先生方、相談に応じて下さった先輩方、宣伝や設営等、いろいろ協力してくれた同級生や後輩たち、そして僕達の呼び掛けに敏感に反応してイベントに参加してくれた皆さんに、この場を借りてお礼を申し上げます。どうもありがとうございました。



ディスカッションの様子

特別講演 Lecture

「方法と空間——ディープな空間を考える」

"Method and Space - Thinking about 'Spatial Deepness'"

岡部憲明 [建築家、神戸芸術工科大学教授]
OKABE Noriaki (Architect, Professor; Kobe Design University)
レポート: 松本淳 [博士課程]
report: MATSUMOTO Jun (Doctoral candidate)

岡部憲明氏プロフィール

1947年 静岡県生まれ
1971年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
1973-74年 フランス政府給費留学生
1974-77年 Piano & Rogers (パリ, フランス)
ボンビドー・センターを設計
1977-81年 Piano & Rice & Associati (ジェノバ, イタリア) 設立
1981-88年 Renzo Piano Building Workshop Paris (パリ, フランス) 設立 チーフアーキテクト
1988-94年 Renzo Piano Building Workshop Japan (大阪) 設立
1995年 岡部憲明アーキテチャーネットワーク (東京) 設立
関西国際空港旅客ターミナルビル設計で、レンゾ・ピアノ氏とともに日本建築学会賞を受賞。長岡文化創造フォーラムコンペで最優秀賞

2000年5月22日[月]、岡部憲明アーキテチャーネットワーク代表の岡部憲明氏を本学へ招いて特別講演が行われた。「方法と空間」と題された講演の冒頭で岡部氏は、「情報と技術と様式を合わせて『方法』と呼べば、『方法』は設計の論理を優先的に支配する。『方法』のみでの設計に陥らない為には、設計の節目に記憶の内にある突出した建築と『空間の質』に心を向けることが必要だ」と述べて、自らが設計の際に指針としてきた建築作品の紹介を図面とスライドを通して行った。挙げられた建築作品はパルテノン、ル・トロネ修道院、パリ国立図書館、ボーヴェのカテドラル、ガラスの家、カサ・デル・ファッショなどで、設計年代や様式、ビルディングタイプは多岐に渡るが、それらの建築内部に創り上げられた、岡部氏の言う「ディープな空間」はどれも秀逸で素晴らしく、歴史的背景や構造的整合性など数々のエピソードとともに語られたため、建築を学ぶ学生にとっても非常に理解しやすいよう整理されていた。講演では随所に建築家ならではの観察力と洞察力の鋭さがかいま見ることができたが、中でも自身の著書『エッフェル塔のかげら』で「究極の空間」として位置付けたル・トロネ修道院における光のありようには惹き付けられる何かがあると直感した。

ル・トロネ修道院を実際に見てロンシャンの教会のヒントを得たと言われるル・コルビュジエは「建築とは、光の下に集められたヴォリュームの、知的で、正確で、そして壮大な遊びである。」と述べているし、ルイス・カーンも「構造体は光を与え、光は空間を与える」と述べているように今までにも光と建築の関係については多くの建築家が言及してきた。シトー派の修道師たちが築き上げてきたこの建築家なき建築においては、光を変質させることに成功したロマネスク様式の分厚い壁にあけられた孔と、分厚い壁によって形成された深い闇を照らす一筋の光によって「ディープな空間」が生み出されている。

岡部氏の手掛けた作品の中でもボンビドー・センターと関西国際空港旅客ターミナルビルはどちらもその規模の大きさゆえに採用された構造形式に圧倒的強さがあるように読み誤りがちである。この形態や構造形式に辿りつくまでに幾重ものフィードバックがなされ、『空間の質』が模索されていたことを知るにつけ、建築学生が現段階でできることと言えば、観察力と洞察力を磨きながら、こうしたより「ディープな空間」を自ら体験しておくことではないだろうか。

「アルヴァ・アールトとそれ以後」

"Alvar Aalto and After Generations"

ヤリ・イェッツォネン

[建築写真家・模型職人、ヘルシンキ工科大学講師]
JEISONEN Jari (Photographer, Modeler, Lecture; Helsinki University of Technology, Finland)

レポート: 松本淳 [博士課程]
report: MATSUMOTO Jun (Doctoral candidate)

2000年8月2日[水]、フィンランドより建築写真家で模型職人のヤリ・イェッツォネン氏を本学へお招きして特別講演が行われた。今回の講演は日本大学芸術学部で行われた模型制作ワークショップのために来日したイェッツォネン氏の、工学部に所属する建築学科の現状を知りたいという強い要望もあり実現したものである。

講演ではフィンランド人建築家アルヴァ・アールト(1897-1976年)の設計した5つの住宅(マンネル邸・アールトの自邸兼事務所・アールト夏の家・カレ邸・シルツ邸)と、フィンランドにおいてアールトに続く5人の建築家たち(A.プロムステッド、V.レヴェル、R.ピエティラ、K.グリクセン、A.シピネン)の残した作品が紹介された。建築写真家として四季折々、様々な視点で、様々な状況下で撮り貯められてきたスライドの一つ一つには思い入れが感じられ、エピソードや冗談を交えて終始和やかに進められた。

イェッツォネン氏にはそもそも建築模型製作のプロとしてアールトなきフィンランドにおいてR.ピエティラ、J.レイヴィスカらと協同で数々のコンペに応募し勝ち抜いてきた実績がある。模型製作という職業が成立するのも比較的大きな規模の建築のほとんど全てが公開コンペ形式で建設されているフィンランドならではのとも言えるが、特に興味深いのはコンペ応募時には模型製作を委託した設計事務所の所員の一人としてプロジェクトに参加しながら、フィンランドの建築界の趨勢をつぶさに見つめてきたことである。

ステューブ・ホールが設計したヘルシンキ現代美術館(キアズマ)のコンペは、近年では最も膨大な応募数の公開コンペであったといひ(篠原一男案も2位に選ばれたが)、コンペという形式が続く以上、フィンランド建築界では常に白熱した議論が交わされるはずだとイェッツォネン氏は熱く語ってくれた。

講演後のパーティではイェッツォネン氏自慢の

建築模型のスライドを見せて頂きながら、ウォッカと日本酒による国際交流がいたるところで繰り広げられていたことを付け加えておきたい。

「アーキテクチュア・オリンピック」

"The Architectural Olympics"

ハンス・ファン・ベーク [アムステルダム]

パトリック・ピネル [ワシントン]

ジェレミー・ベイリー [ロンドン]

クノ・ブリューマン [パリ]

Hans van Beek (Amsterdam), Patric Pinell (Washington),
Jeremy Bailey (London), and Cuno Bruilman (Paris)

レポート: 田口陽子 [博士課程]
report: TAGUCHI Yoko (Doctoral candidate)

オランダ、アムステルダムにおける集合住宅の共同プロジェクト(1988-1992 オラニエ・ナツフ・カゼルネ)に参加した世界各国の建築家たちが、オリンピックイヤーの昨年、日本から参加した八木幸二教授のもとに集結した。彼ら各々の近況報告と大学院の「建築空間論」の講義を兼ねて2000年10月16日[月]、最近の建築作品の紹介を中心にスライドレクチャーが行われた。

オランダ出身のベーク氏はハーグに設計した大規模な大学のプロジェクトを、アメリカ出身のピネル氏とイギリス出身のベイリー氏は住宅作品を中心に講義した。パリで活躍するスイス出身のブリューマン氏は、起草段階から実際のプロジェクトがどのように立ち上がっていかを、コンセプトスケッチなどで補足しながら分かりやすく解説していた。設計者はもちろん、地域もプログラムも異なる作品群は、設計のプロセスやそれを取り巻く社会状況の多用さも示しており興味深かった。

各人は婦人同伴で、時よりジョークを交えながら終始リラックスした雰囲気でのレクチャーは行われた。レクチャー後の質問では、建設コストやデザインツールとしてのCADの賛否など、学生が普段耳にすることの少ない実務的な問題について議論することができ、貴重な経験となった。



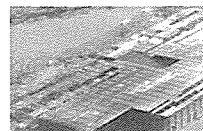
ハンス・ファン・ベーク 大学



パトリック・ピネル 住宅



ジェレミー・ベイリー 集合住宅



クノ・ブリューマン オフィス

TIT建築設計教育研究会会則

[第1条] 名称

本会はTIT建築設計教育研究会と称する。

[第2条] 目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援するとともに、学生と会員、会員相互の交流を促進し、設計技術向上の相互啓発を行うことを目的とする。

[第3条] 事業内容

本会は次の事業を行う。

①国内外の建築家・特別講師等の招聘、②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存、③展示会・講演会等のイベントの開催、④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行、⑤その他、本会の目的にかなう事業

[第4条] 会員

本会は本会の目的に賛同する会員によって構成される。会員は東京工業大学の卒業生を中心とした個人または、上記の個人の関与する法人とし、その会費を基金として本会を運営する。

[第5条] 会費

本会の会員の会費は法人会員は1口10万円とし、0.5口(5万円)よりとする。期間は1年間以上6年間までとする。(期間削除=第8回総会にて承認)個人会員は1口1万円とし、1口よりとする。(個人会員=第8回総会にて承認)

[第6条] 役員

本会は次の役員を置く。

運営委員9名

(運営委員長1名及び監査役1名を含む)

[第7条] 総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

[第8条] 会計

本会の会計年度は1月1日に始まり、12月31日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

[第9条] 存続期間

本会の存続期間は平成2年10月1日より平成8年9月30日までとする。

(この項 削除=第5回総会にて承認)

[第10条] 会則

本会則は平成2年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決裁を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。(以上)

<細則>

TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

[第1条] 役員

本会の役員構成は下記による。

運営委員9名

(学外運営委員6名、学内運営委員3名)

運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授その他2名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により6名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

[第2条] 総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教官(教授・助教授)出席による集会とする。

役員による事業報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決裁を行う。

(以上)

2000年度役員(00.12.31現在)

顧問:中島隆(1951卒)鹿島学術振興財団専務理事/顧問:林昌二(1953卒)(株)日建設計名誉顧問/運営委員長:戸尾任宏(1954卒)(株)建築研究所アーキヴィジョン代表取締役/副委員長:山下和正(1959卒)(有)山下和正建築研究所代表取締役/監査役:藤江澄夫(1960卒)清水建設(株)常勤監査役/運営委員:岡部富雄(1959卒)(株)構造計画研究所建築技術本部常務取締役本部長、仙田満(1964卒)東京工業大学教授、服部紀和(1964卒)(株)竹中工務店取締役、坂本一成(1966卒)東京工業大学教授、八木幸二(1969卒)東京工業大学教授

2000年度法人会員(00.12.31現在)

(社名/本会への代表)

大林組/杉山直、鹿島建設/中島隆、清水建設/日置滋、大成建設/光岡宏、竹中工務店/服部紀和、構造計画研究所/岡部富雄、環境デザイン研究所/仙田順子、日建設計/三栖邦博、松田平田/和田信昭、IAO竹田設計/竹田秀道、久米設計/伊平則夫、建築研究所アーキヴィジョン/戸尾任宏、清田育男計画設計工房/清田育男、日本設計/高橋徹、山田守建築事務所/山田達郎、レーモンド設計事務所/森山興真、葛西潔建築設計事務所/葛西潔、金箱構造設計事務所/金箱温春、伊達計画文化研究所/伊達美徳、山下設計/井上雄治

2000年度個人会員(00.12.31現在)

(氏名(卒年))

田口武一(S10)/東久世秀禱(S10)/黒田正巳(S13)/吉江憲吉(S14)/高田清(S16)/石田繁之介(S16)/堯天義久(S19)/栗原勝(S22)/石野治(S23)/池田忠彦(S25)/遠藤正明(S25)/中島隆(S26)/佐久田昌昭(S27)/濱田昭二(S27)/中村晃(S28)/林昌二(S28)/半澤重信(S28)/田中正美(S29)/戸尾任宏(S29)/吉井一夫(S29)/高木賢(S30)/田口好孝(S30)/内藤昌(S30)/城間勇吉(S31)/洪田実(S32)/中神弘(S32)/松下謹三(S32)/青柳司(S33)/太田雅三(S33)/佃隆介(S33)/増田一真(S33)/清水康久(S34)/富野壽(S34)/村口昌之(S34)/山下和正(S34)/永井雄一(S35)/野村邦夫(S35)/藤江澄夫(S35)/星野利一(S35)/松野公一(S35)/森孝夫(S35)/佐々木雄二(S36)/鈴木歌治郎(S37)/最上達雄(S37)/三栖邦博(S38)/有田桂吉(S39)/岡部富雄(S39)/片野毅(S39)/仙田満(S39)/只野康夫(S39)/西野敬史(S39)/野口三郎

(S39)/服部紀和(S39)/平川長(S39)/満田恒男(S39)/味生威(S40)/野崎英彦(S40)/森下清子(S40)/守谷一彦(S40)/岩沢二郎(S41)/坂本一成(S41)/志岐孝之(S41)/鈴木清友(S41)/大嶋顕世(S42)/小西敏正(S42)/光岡宏(S42)/矢口彰(S42)/奥村光男(S43)/西村博道(S43)/花島晃(S43)/細入誠一(S43)/村田靖夫(S43)/和田章(S43)/藍澤宏(S44)/佐藤俊作(S44)/清水弘道(S44)/田中享二(S44)/牧圭介(S44)/八木幸二(S44)/山口洋一郎(S44)/岡本慶一(S45)/岡本聖司(S45)/鳥羽広明(S46)/梅干野晃(S46)/山口潤二(S46)/大野隆造(S47)/猪子順(S47)/西尾秀平(S47)/杉原繁樹(S47)/菊谷武郎(S48)/日置滋(S48)/藤岡洋保(S48)/保坂一夫(S48)/森行臣(S48)/伊原基(S48)/有里公德(S49)/高田典夫(S49)/豊田雪夫(S49)/三橋伸夫(S50)/上山博夫(S50)/河野晴彦(S50)/小林謙一(S50)/清水寧(S50)/土屋隆(S50)/高橋寛(S51)/田中一晴(S51)/宮木宗和(S51)/松永浩一(S51)/木谷靖孫(S52)/前田康憲(S52)/熊谷昌彦(S53M)/浦春彦(S53)/白川裕信(S53)/宮本文人(S53)/飯利昌人(S53)/鈴木敏彦(S54)/常木康弘(S54)/武田直行(S54)/小室清高(S55)/三上貴正(S55)/吉田親史(S55)/伊東龍一(S56)/乾靖(S56)/仲野順一(S56)/宮本昌明(S56)/高橋晶子(S57M)/津金猛(S57M)/酒井星志(S57)/西田達生(S57)/平島信一(S57)/山口勝巳(S57)/安部武雄(S58D)/坂田弘安(S58)/横山裕(S58)/新井貴(S59)/帽田秀樹(S59)/中村安志(S60M)/大佛俊泰(S60)/小田宏正(S60)/所司護(S60)/若松均(S60)/中村芳樹(S61M)/奥山信一(S61)/山田泰範(S61)/鈴木達也(S62)/塚本由晴(S62)/鈴木重則(S63)/今井賢治(H11)/栗原正明(H11)/鹿野秀馬(H2)/木島千嘉(H3M)/渡邊哲也(H3M)/片庭修(H3)/櫻井康雄(H4)/菅原正則(H5M)/保住秀樹(H5)/藤岡務(H6M)/村田淳(H7)/井上寿(H8D)/七田裕(H8M)/菅菜々子(H8)/笠井啓仁(H9)/吉田佳代(H9)/以上165名

2000年度大岡山建築賞

2000年度大岡山建築賞受賞者は、以下のとおり決定し、6月7日、第11回総会にて授賞式が行われる。詳細については次号で報告する。

[大岡山建築賞]

黒川智之(B4):「スキゾフレニア」

鈴木悠子(B4):「U」

[大岡山建築賞銀賞]

足立拓(B4):「WRAP and BUILD project」

卜部祐加(B4):「五反田駅開放計画」

宮脇康起(B4):「node」

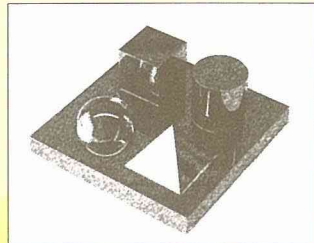
編集委員: 八木幸二/奥山信一/那須聖[以上幹事]/横山裕/堀田久人/湯浅和博/木下芳郎/寺内美紀子/井上寿/山崎嗣介
 学生委員: 川上正倫/久野靖広/斉藤哲也/田口陽子/谷川大輔/長岡大樹/松本淳/安森亮雄/吉村英孝/石原久一郎/岡村航太/松岡里依子
 取材協力: 大学院修士課程2年有志
 編集協力: デザイン=秋山伸+久世健/翻訳=デイヴィッド・スチュアート/表紙バック写真=立木圭之介
 発行: TIT建築設計教育研究会[2001年6月発行]
 (学内事務局: 東京工業大学理工学研究科建築学専攻 坂本一成研究室)
 定価: 800円

ka021

Spring/Summer, 2001

編集後記

この号から編集体制が変わりました。
 編集委員を中心として、計画系の助手全員、ティーチングアシスタントの大学院生、大岡山建築賞を頂いたことのある大学院生、その他有志の大学院生がさまざまな形で参加して作っています。これまで、春学期と秋学期の設計課題を年2回の号に分けて載せていましたが、そのため卒業設計にあまりページをとれませんでした。今回から、春号で年間の設計課題を載せ、秋号は卒業設計号とすることにしました。卒業設計を向上させる効果も期待しています。TIT建築設計教育研究会の支援に感謝しつつ。
 [八木幸二]



表紙: 大岡山建築賞トロフィーとTIT建築設計教育研究会10周年記念会の様子
 2000年12月14日[木]16:00から東京工業大学百年記念館において行われ、卒業生による活動報告と設計活動から教育に至るまでの活発な議論が行われた。会議室前ロビーには歴代の大岡山建築賞が展示され、多くの学生が見学に訪れていた。



歴代大岡山建築賞受賞者

- 1991
 小林茂雄: 水のある街
 塩田洋: FISHERMAN'S HILL—都市と水際の新しい関係
 塩田洋: BIO-RECYCLE—都市と水際の新しい関係
 中井邦夫: 浅草リバーサイド・エアターミナル (ARAT)
 コヴァーチ=ベンツェ: 世界の建築博物館の現状分析をもとにした新しい建築博物館の提案[修士制作]
 1992
 高森和志: 都市型複合ビル
 寺崎徹: 王子・水辺の文化施設計画—町中の親水空間
 陸鐘驍: TEANS SPACE—上海証券交易中心
 1993
 足立真: お台場埋め立て地域開発計画
 鈴木智朗: 横浜芸術プラザ計画
 佐々木健夫: 分散配置・回遊形式による美術館計画[修士制作]
 1994
 繁昌朗: 超乗換駅—HYPER JUNCTION
 是永美樹: From Gate to Stage~Gaien Amusement Complex

- 1995
 梅野圭介: 東京港開放計画
 太田啓介[銀賞]: blank of the city
 木下芳郎[銀賞]: X TALLINE
 仲胆[銀賞]: Tokyo Amusement
 1996
 増山絵理奈: A Record of Urban Cross Talk
 久野靖広[銀賞]: 広場—ゴミ清掃工場+プール+消防署+……
 菅菜々子[銀賞]: 東工大キャンパス開放計画
 佐々木省悟[銀賞]: Multistory Town Project Sibuya Kuru kuru
 1997
 米津正臣: 飯田町貨物駅跡地再生計画—都市の空白における複合空間
 大成優子[銀賞]: ドライビング スクール ビルディング
 小川一人[銀賞]: Scrap/Reclamation/ Reconstruction
 笠井善仁[銀賞]: TOKYO WOODSY LAND
 田口陽子[銀賞]: SPONGE
 服部ひかる[銀賞]: MULTINATIONAL PROJECT
 1998
 伊藤立平: 新宿御苑改修計画

- 吉村英孝: Office for Short Stay
 遠藤康一[銀賞]: 東銀座のサービスエリア
 清水加陽子[銀賞]: River Overflows
 丸山美紀[銀賞]: Fragment / Whole
 1999
 網川いずみ: カンダハウジング・オフィス・パーキング・ライブラリー
 米津正臣: 環境ビルディングタイプ 建築による渋谷再編成計画[修士制作]
 稲毛誠[銀賞]: H-marketing Project
 大村卓[銀賞]: Ichigaya Seamlas
 高橋寛[銀賞]: station square
 笠井善仁[銀賞]: ヴォイドシステムによる巨大複合建築—汐留貨物駅跡地再開発計画[修士制作]
 2000
 松岡里衣子: 渋谷文化中心
 遠藤康一: ポーラス・ビルディング・システム—ヴォイドの配列による高容積・高密度地区の都市再開発[修士制作]
 石原久一郎[銀賞]: サクラノモリノマンカインシター—呑川緑道カルチャースクール
 岡村航太[銀賞]: タウンスケープ 町田集合住宅プロジェクト